

I. 第53回例会 平成8年6月2日(日) 於教職員互助組合会館和室

(出会者) 青柳俊二・上野堯史・上野三善・大田照夫・納 栄蔵・小山田稔・木場武則・下野敏見・永坂芳彦・肥後芳尚・平澤幸夫・平田功美子・平田信芳・松浪由安・米原正晃(16名)

II. 夔藩名勝考読会 P.185 ~ P.188

(問題となった地名および事項) 大友天皇・檳榔島・高千穂峰

### 大友天皇

納 187ページの段のちょうど真ん中ごろ、山口大明神とあって、天智天皇・大友天皇・持統天皇とあります。大友天皇というのは？

平田 壬申の乱の時に、大海人皇子と大友皇子が戦いますね。負けた天智天皇の皇子：大友皇子を天皇の位に置いて大友天皇と言います。次の持統天皇は大海人皇子の奥さんになります。

納 昔、小学校で習った神武・綏靖・安寧—の中にはないですね。

平田 ありません。

青柳 謬伝とあるのはどういうことですか。大友天皇は疑問という形で出て来るとするのは、思想的にはどうなんですか。いつ復活したのですか。

平田 天智天皇の後は大友皇子が正式に後を嗣いだと考えているからです。壬申の乱の結果は、天武天皇が即位する形になりますが、人々は勝敗に関係なく、大友皇子が天皇になったのだと理解していたということです。

青柳 学問がありますね。こういう人も。

平田 そうね(笑い)。

青柳 日本史の裏側まで。

平田 これは、もう、有名な話だから。

青柳 あゝ、そうか。

永田 徳川光圀は大友天皇を打ち出しているわけ

ですね、あの中で。

平田 あゝ、大日本史で。

永田 はい、あれでは。それ以前にどの程度評価されていたか判りませんが、ここでは天武天皇は見事に脱けていますね。

平田 そうですね。

永田 持統は天智の娘ですからね。

平田 えゝ。

永田 天智の流れは出ているけれど、天武の方は見事に無視されてますね。これは何か意味があるのでしょうか。

青柳 そうですね。天武天皇が無視されてますね

平田 一番の実力者が脱けているよね。

永田 大友皇子が天皇として即位しておったのをば、天武天皇と持統天皇が殺害して皇位の篡奪ということで、それが削除されているのではないのでしょうか。

平田 壬申の乱の評価というのは現在とは違っていたでしょうからね。それで天武天皇を除いているのかも知れませんね。それは気が付かなかったな。

### 檳榔島

松浪 188ページの段の4行目、大宮所ノ縁ニシヲこれは「ヲ」でなくて「テ」の間違いでは？

平田 「縁ニシヲ」ではなく「縁ニシテ」伝える

松浪 テとヲは字がよく似ていますから。

平田 「テ」の場合は「而」を使うのではないのでしょうか。だから「縁ニシヲ伝ヘタル遺称ナルコト想ヒミルヘキ也」。このままでいいと思います。

志布志の檳榔島が最初に出て来ますが、檳榔島産の檳榔の葉が貴族たちの牛車を飾ったことは民俗学者の吉野裕子さんの『扇』という本に詳しく書いてあります。こちらから送られたことは有名な事実ですし、『延喜式』にも檳榔のことは書いてあります。大宰府に納め、それを大宰府が都で売るといふ仕組みになっていました。志布志の檳榔島は昔から知られていたわけですね。

納 檳榔のことは沖縄のノロですか。檳榔の木を神の依代とみなす、というようなことを聞いたことがあります。

平田 下野先生、神の依代という話は？

下野 檳榔樹は南嶋では広く使われています。先程出ましたノロの神事には檳榔がよく使われるのです。とくに内輪の葬式に使います。その他に檳榔樹林を拓いて、そこに聖地を設けてやります。いわゆる「モイどん」になります。照葉樹では、タブとかそういう類の木ですが、トカラから南の方はすべてと言ってよいぐらい檳榔です。檳榔がこんもり茂っている所は聖地とみてもよいぐらいです。南九州でも薩摩半島の甲木野の羽嶋崎は、神社の山に檳榔が沢山今でも天然のものが生えています。檳榔はこちらでも聖地と関係があるのではないかと思います。佐多にも檳榔島があります。

平田 佐多にも檳榔島がありますね。

下野 吉野さんはいろいろ珍説を出しておられますから、ちょっとコメントは差し控えます。

#### 高千穂峰

下野 先般、都城に二・三回行く機会があり、責任ある方々とたまたまお逢いしたときに申しあげたことですが、宮崎市と鹿児島市を結ぶ国道の沿線に気楽に入れる立派な博物館がないということです。

市町村立の博物館は若干ありますが、県・市を代表するものではない。もっと大きなものは出来ないのか、と。都城が一番いいのではと申したのです。都城市には城跡に郷土資料室がありますが、それこそ郷土資料室にすぎないので、大都城としてはもっと大きなものがあるのではないかと。そこで問題は今これに出ましたように、高千穂峰を地図の上で見ると、都城市に入っています。日本の神話を知らない人はないというぐらいになっているわけですから「日本のふるさと都城」というキャッチフレーズが使えるわけです。「日本のふるさと」これを使える所は滅多にないですね。神話と歴史を混同してはなりませんけど「心のふるさと」ぐらいはいいのじゃないでしょうか。都城に神話を中心とし、さらに都城の中世・近世の歴史も加味した大博物館を造られたら活性化に役立つのではと申しあげたのですが、なかなか（笑い）、外の者がいう程、内の方々は慎重でして、というよりも市長さんはこう言われました。都城は弓が盛んな所です。世界的な弓の博物館を造ろうと思っています、と。それは名案です、と申しあげました。それを包含した博物館が出来ると一番いいのですが、予算の問題もありましょう。まあ、そういうことでした。

平田 高千穂がやっぱり問題になるのですが、高千穂をはじめ霧島の頂上はほとんどが宮崎県になります。鹿児島県にはないのだけど、一般には鹿児島県の山と考えて宣伝しています。たとえば鹿児島実業が甲子園で優勝した時に「黎明告ぐる朝ぼらけ高千穂峰に――」と字幕が出て来ました。高千穂峰はニニギノミコトが天降った天孫降臨の地であると。それをとくに強調するのは本居宣長であり、甕藩名勝考を書いた白尾国柱であり、三国名勝図会を書いた人々になります。それで天孫降臨の地ということが徹底しているはずですが、七高の察歌集には高千穂のことがあまり出て来ません。数にして160

ばかりの察歌があるのですが、一番歌われているのは鶴丸城、その次が城山。そして桜島、錦江湾、楢の順になります。城山は160のうち120ぐらい出て来るのですが、高千穂が出て来るのは一桁です。七高生は天孫降臨ということについて感激もしていなかったなと感じます。歴史を重んずるのであれば、桜島や錦江湾よりも高千穂がもっと出て来てよさそうな気がします。下野先生に竿差すようで申しわけないのですが、そういう見方も出来ます。

平田（功） 私たちは小学校6年の時に修学旅行で高千穂峰に行きました。馬之背を越えてでした。子供ながらに宮崎県と鹿児島県のそういう争いに気付いていたような気がします。高千穂峰は宮崎県か鹿児島県かということです。山頂は宮崎県の人が管理しているようでした。間違った考えでなければ、何かそんな感情というのですか、子供心に感じていました。

平田 争いをしたということは聞いています。鹿児島の方が大人で向うに譲ったようなことを言っ

## 第十次遣唐船の屋久島来着と多楸国の状況

### —— 多楸国府と郡衙について ——

テーマを少し変更します。当初の予定は「屋久島の地名と歴史と民俗」でしたが、次のように変更します。第十次遣唐船の屋久島来着と多楸国の状況、それがメインテーマです。サブテーマは多楸国と郡衙について、あるいは郡家についてでもよろしいです。資料が沢山あります。最初は『海南民俗研究』これは差しあげます。昨日出来たばかりです。間にあいました。24ページに「第十次遣唐使と多楸国」というのがあります。まずここから入っていきます。

天宝12年(753) 10月19日 鑑真一行揚州を出発し蘇州の黄泗浦で遣唐船に分乗。鑑真一行24人、下船命令。

ますけどもね。その辺の経緯は図書館に古い新聞がありますから、新聞を調べられたら判るのではないのでしょうか。他にありませんか。

#### 妻万(つま・やま)

上野 189ページの妻万を(やま)五社とする表現ですが、妻万(つま)といえば耶馬台国問題ともつながって来る一つの重要な言葉ですね。何故、妻万(やま)というわざわざ変った読み方をするのでしょうか。妻万(つま)の方が歴史的に意味がありそうな地名の感じがしますけど。

平田 学者がことあらたまって特別な読みをしたとしか思えないのですがね。

上野 あゝ、この場合だけです。

平田 この甕藩名勝考には、あちこちにこんな読みがあるのだろうかという読み方がありますよ。難しい読みをするのが学問だと思っている（笑い）

上野 島津斉彬(せふん)というのと一緒ですね。

平田 そうでしょうね。他にありませんか。休憩して後半の下野先生に時間を余計にあげましょう。

#### 下野敏見

11月10日 大伴宿禰古麻呂は鑑真一行を第2船に収容。在中国の日本僧普照は第3船に、大使清河と阿倍仲麻呂は第1船に。

11月15日 4船は船隊を組んで黄泗浦を出発。雉の飛来のため、中止。

11月16日 4船、出帆。

第1船が11月21日に阿児奈波嶋に着きます。沖縄島だと考えられます。第2船は11月21日、第3船は11月20日に着きます。第4船は不明です。

12月6日、3船は阿児奈波嶋出帆。第1船が奄美嶋をめざしますが、不明。第2船は12月7日、益救嶋着。第3船も12月7日益救嶋着です。

右下の表にいきます。第1船、大使藤原清河、阿倍仲麻呂。第2船は鑑真一行24人も乗っています。第3船は吉備真備が乗っています。

そして、その下にいきます。益救嶋からとありますが、第2船、19日、風雨、昼頃山見ゆ。益救嶋を出発して山が見えて来た。12月20日、秋妻屋浦着。これが秋目といわれています。第3船は漂流。12月から1月初旬頃、紀伊半島の牟婁崎に着きます。今の田辺村近だと想定されます。第1船は黄瀬浦から阿児奈波嶋を経て安南に漂着します。第4船は黄瀬浦から途中不明で、753年3月末か4月初旬頃、頼娃の石籠浦に漂着します。現在の「石垣」です。

ま、こういうことですが、問題は多岐国をめざして沖繩から出発して屋久島に着いた。12月7日に着いたわけですね。第2船・第3船が着きます。第4船もやはり同じような航路を経るのですが、第4船は屋久島・種子島のどこを経たかは明らかではありません。ただ、石垣に着いたことだけが判っています。

そこで、第2船には鑑真一行が乗っているわけです。鑑真を乗せた船は、秋目に着く前に屋久島に着いているわけです。12月7日に着いて、屋久島を出発するのが12月18日。18日に2船とも屋久島を出帆しますから、約足かけ12日、2週間近く屋久島に滞在するわけです。この間、鑑真は目が見えませんが、上陸した者があつたはずですが、薪・水とか食料を積み込み、水先案内もあらたに頼んだり、さらにその辺を偵察したかもしれません。そればかりではなく、その情報がいち早く多岐国に伝わって、多岐国府から役人がやって来て折衝したに違いありません。その辺の状況は、ま、霧の中ですが少しでも明らかにしておきたい。そこで地名等の関係があるわけです。

次に27ページの地図を見て下さい。第2船・第3船

が屋久島をめざすとしたら、方向からいえば矢印の方向です。トカラ列島から北上します。トカラ列島では古来、船はトカラの東側を通らずに西側を通っていくのです。東側は太平洋ですから危ないわけです。それで粟生に到着したことが考えられます。一番近い所。時期が旧暦の12月7日、新暦では1月末ですから、冬の季節風が強い時です。私は何回も粟生に行って、この図を想定したのです。最近もまた行ってあらためて土地の人に聞いたり漁師に逢ったりして調べますと、どうもこの地図も訂正する必要があります。

粟生は沖がかりは大丈夫だそう。だが、季節風は強い、と。長くはおれないだろう、と。だから右回りして、どこかに着けた。右回りしますと北西の季節風は島陰になりますから、冬でもおだやかだそう。安房が第一の港、次に宮之浦です。地図で見ますと、安房が一番いいようにみえます。安房には唐船川(とうせん)という、その名も面白い地名が2ヵ所あります。これは近世に至るまで唐船が漂着したわけで、いつのものかは判りませんが、唐船がいつになっても来るような港なんです。これは注目する必要があります。

地図には点線で打ってありますが、実線で引いてみますと粟生から12月18日に出帆して、そうして山が見えて来た。昼頃山が見えたのですから、これは硫黄岳ではなかろうか、と想定するわけです。これを野間岳であるという歴史学者も東京におられますが、ちょっと無理だと思います。実線ではなく点線の方から行ったにしましても、やはり硫黄島ではなかろうか。そして海がしけた中で、しかも視界も悪い中で北上し、秋目に到着するわけです。それから第4船は石垣に行ったわけですから、石垣に行ったということを逆に考えますと、これは開聞岳を山当てにして行ったはず。開聞岳を山当てに行きますと、それに近い方向から来たわけですから

第4船(?)と書いた経路。屋久島のそこから北上したのか、もしくは多岐国に寄って行ったのか、どちらかであるはず。さて、その年、753年という年です。8世紀の真ん中ですが、多岐国が存続していた真ん中の年でもあります。多岐国は702年に設置され、824年に大隅国に合併されますから、120年間多岐国は存在するわけです。その真ん中になります。その時、多岐国はどこに国府があり国庁があったのか。さらに郡衙は、熊毛郡、野間郡、益救郡、馭謨郡とあります。その郡はどこにあったのか。この問題は論争をずーっと続けております。最近も琉大の小島先生が新しい説を出されました。これは永遠の課題みたいなのがあります。地名研究会の方々に私の考えを述べてご批判ご指示を頂きたいと思うわけです。私は民俗学の視点から地名を問題にし、そして歴史も加味しながら考えてみるという立場です。

今度は多岐国の状況について。屋久島は多岐国の中なので、これは間違いありません。種子島を目指したということは、多岐国というふうにとれば文字通りです。益救島が多岐国であれば多岐国にやって来たわけ。初期の想定どおりにやって来たわけですね。だけど多岐国府に行ったという記事はありません。したがって益救島だけで燃料その他を完備して北上したというふうには考えられません。12日間、一体どうなっていたのか。その時に多岐国府の命令でどこの郡衙が動いたか。益救郡家か馭謨郡家か、どちらか、と。益救郡家・馭謨郡家は一体どこにあったのか。それさえはっきりしないし、なかなか証拠というものはありませんので、理屈詰めで攻めていく以外にありません。

今度多岐国の状況について。屋久島は多岐国の中なので、これは間違いありません。種子島を目指したということは、多岐国というふうにとれば文字通りです。益救島が多岐国であれば多岐国にやって来たわけ。初期の想定どおりにやって来たわけですね。だけど多岐国府に行ったという記事はありません。したがって益救島だけで燃料その他を完備して北上したというふうには考えられません。12日間、一体どうなっていたのか。その時に多岐国府の命令でどこの郡衙が動いたか。益救郡家か馭謨郡家か、どちらか、と。益救郡家・馭謨郡家は一体どこにあったのか。それさえはっきりしないし、なかなか証拠というものはありませんので、理屈詰めで攻めていく以外にありません。

それでは第1図を出して下さい。第1図は左下、第2図はその上にあります。そもそも多岐国府というのは、日本の国府の中で未だに分からない存在で、中央の方でも注目しとるわけです。いろいろな方

がいろいろな説を述べています。その説をまず紹介します。

まず図2から見ていきます。多岐国府国上説。種子島は南北に長いのですが一番北にあるのが国上。そこに天然の良港、浦田港があります。さらに港というのがあります。これは北西の季節風の時には良い港です。季節風が荒れる時は、浦田港は入りにくい所です。その下に多岐国府を想定してあります。現在、国上(くにのへ)という大字があり、その中心です。そこは昔から国府があったという説のある所です。そして「寺の角」という名称もあり、これを古代に結び付ける方々も昔からおるわけです。

第1図多岐国府国上説と字図とあります。四角で囲んだ国府想定地のところに「花堂」とあります。これは「カドウ」。「ケドウ」とも読みます。その近くに高峯(たかね)、遠園(とほ)、稲村(いなむら)などの地名があります。花堂、ここに国分寺があったのではなかろうか、という説があります。国府域も国分寺域も実質的には私が想定しました。さらに国見という場所もありますし、早馬という所に奥神社という種子島で一番古い山神の総神社もあります。

次は図3。多岐国府現和説要図。太平洋岸の現和がそうであったという説があります。これも実線を入れてみました。此処にあったとすれば、現在、現和小学校を中心とした平坦地、少し高い所です。港は田之脇港と湊というのがあります。それから院房(いんぼう)という所。平安時代まで廻れる土器も出ております。此処に国分寺を想定できます。ちょっと高台になりますが、大変見晴らしのよい所です。

次に図5。多岐国府中田説。これは中種子町の南部と南種子町との接点の所です。そこに中田(なかつ)という所があります。此処は左に島間港をひかえ、右に熊野浦をひかえています。このように港が両方あって、そして平坦地であります。しかも地名が面白い所です。地名は図4になります。地図の方を

見て下さい。一番上に国ノ峯、それから屋ノ平(ゆのたいら)。これは屋形ノ平と想定されています。これは地名研究の大先輩である小川亥三郎先生が想定された所です。国ノ峯は国府の附山(つきは)だということです。それから城(じょう)、提(ぢ)。こういうのも国府につながるというのが小川説です。今まで誰も想定しなかった所で、大胆な説です。

今度は図6です。図7と連動します。図7は種子島南部です。南種子町にあります。多嶽国府島間説および馬による交通路。上の方に多嶽国府想定図があります。国府津城、そして近くに島間港。島間という意味は種子島と屋久島の間という意味です。島間は屋久島を見据えた大事な港です。そして大広寺というのがあります。これは国分寺の跡だろうと想定されるわけです。そして矢印がいくつかに分かれています。北の方では中田(なかつた)に出ます。水田が若干あります。そして東の方には平山の水田地帯、途中から南下して茎永(きぎや)の村近の水田地帯。種子島では一番広い水田地帯です。それから下中(しもなかつた)の水田地帯。さらに左に寄りまして西之(にし)の水田地帯になります。矢印の所は草原地帯で、馬を駆って走れば10分か20分で到達します。これを歩いたら、それはそれは大変なことです。地形は平坦地ですけど、谷の上の平坦地ですから谷を渡るのに苦労するのです。

問題は下中です。ここに郡川(ぐんがわ)港があります。その近くに郡原(ぐんはら)という所がある。郡が付いていますから、熊毛郡家の所在地と推定されます。郡川港は郡家の河口港と考えられるわけです。

図7に関係して、図6を見ます。図6はその周辺の地名です。多嶽国府島間説と字図。これは島間説にかえりますから、説明をします。内城(うちしろ)と読みます。これは中世の山城です。天神・北野天神・大広。大光というのが本当の名前です。日向国府の場合、大光寺というのが実は国分寺なんです。

ですから多嶽国府も十分に国分寺たり得るという説があるのです。そして付近に大塚とか火合峰(ひあひのね)という所があります。これは狼火をあげた所でしょう。天神はまあ後からでしょうけども。いろんなものがあります。こういう具合に島間は港をもっている。しかも東シナ海岸であります。そして種子島の穀倉地帯と結んでいるわけです。下中・茎永・平山というのは種子島一番の水田地帯です。ここで結ぶのは島間が一番いい所です。他に港はないのかといえば、港はあることはありますが、よくないのです。宇宙センターあたりは少し沖に出ると岩礁がありますから、航海に危険です。したがって、どうしても島間でなければならないのです。これは積出港と考えられます。あるいは連絡港ですね。しかも屋久島をにらんでいるわけで、島間には役所があった。そして穀倉地帯を馬で結んでいたということです。ちなみに矢印のある台地は長谷野(ながひの)と言いまして、終戦後まで広大な牧場がありました。藩政時代は沢山の牧場があった所です。

図8に参ります。図8は下中の字絵図です。郡原(ぐんはら)というのがあります。熊毛郡家が想定されます。そして下の方に多嶽国府として真所(ましろ)があります。真所は政所から来たと思われま。国府であったらという以前からの説のある所です。そこには市之坪という地名があり、条里制を思わせま。それから真所八幡宮というのもあるのです。右側にちょっと離れて、二つ町・一つ町というのがあります。国府から2七ツぐらい右の方に一つ町二つ町。さらに花峰(はなね)・東里(ひがし)・西里(にし)・山神というのがあります。

図9。5万分1地図、真所近辺のものです。左に森山があって、そして真所八幡宮。多嶽国分寺がこの辺に想定されます。森山では今でも祭りが行なわれております。一の坪、市之坪という地名が左の方にあります。大字は西之(にし)になります。また

森山というのは先程配りました本の表紙の写真に出ています。これはすばらしい森山です。私は日本中の森山を大概見ましたが南種子の森山は日本一だと考えております。その美しさ、そして祭りもあるという点、すばらしい森山です。この森山の前が真所八幡宮で国分寺が想定されます。その右横が真所の部落です。そこに国府が想定されるわけです。そして郡衙は離れた郡原(ぐんはら)にあると考えま。まあ2キロ半ぐらい離れています。そして郡原から南の方に真っ直ぐ道が通っています。この道は近代になって整理されていますけども、これは古代の条里以来のものではないかと考えられるのです。「昔から真っ直ぐしとった」と村人は言います。これは種子島で一番真っ直ぐな道です。

さて次に図11。これは多嶽国府および周辺遺構図です。私の考えでは最初、島間に国府を構えて南種子の開田を始めた。国府周辺の開田を始めたと思います。そして一応整ったところで国府を北に移したと考えるのです。その頃は大隅国も穏やかになっていますから。大隅国は多嶽国よりも11年後に国が出来るのです。薩摩国と多嶽国が一足先に国になるのです。これは朝廷の政策です。大隅国は後で日向国から独立したわけです。そういうわけで後には大隅が目の前に見える西之表に国府が北上している、移転していると考えられるわけです。何故なれば多嶽国・大隅国全体を統轄するためには地形的・地政的によい場所になります。図11を見ますと、実線で書いた曲った線は現在の道路です。現在の道路もよく見ると、方形になっています。そこで、その地域に敢えて真四角の都城：国府を想定してみたのです。想定したのが図12です。多嶽国府および周辺の復元図になります。国庁は、現在、榕城中学校となっています。これは面白いことに、現在でも東西南北に門があった跡があるのです。土手が少し色が違うのです。南門が正門と思われまますが、これはずーっと南

下し城(しもしろ)という所に連絡しています。城という所、これは郡衙の跡と考えられます。後の熊毛郡衙です。そして、その下は港なんです。そこまで船がのぼって来たといわれています。江戸時代までのぼったのです。

そこで地名を眺めてみます。国府のちょっと下の方に納所(のぞ)の跡ではないか。これは納租倉の跡ではないか。その下の雲之城。これは公文所ではなかろうか。これらは中世的な名称でもあります。古代から尾を引いているのではないかと考えるわけです。それから小牧という所があります。駅家に関する地名ではないか。国分寺は北の方に矢倉という所にあった、という説が昔からあります。甲女川という川。現在は流れが違っていますが、甲女というのは国府前のこと。鹿児島県史もそのことに触れています。甲は国府、甲女は国府前だろう、と。そして国分寺は慈遠寺ではないか。慈遠寺という寺は中世から実在した寺で廃仏毀釈でなくなりますが、それ以前は多嶽国分寺であった可能性があると考えられています。

さて第12図、右下の方に点線で囲んであります。軍団と軍馬牧を考えております。第11図をみると、馬飼、馬飼屋敷、十二馬迫、埒(ら)は。これは馬場の周囲の柵を言いますが、埒。こういう馬に因む地名が多く見られます。

図14。多嶽国府および国分寺他要図。多嶽国分寺(2期)とあります。これは東海岸も視野に入れたわけです。多嶽国府がある頃は、一体どうなっておったのかという全体像です。国分寺は屋久田のところに、熊毛郡家が城のところ、さっき申しました。軍団の見張り所が城之内の柵です。これは現在も遺構が残っています。これも中世的なものでありますが、古代に遡ることが出来るのではなかろうかと想定するわけです。そして鶴の峰、これは国府の峰ということでしょうか。国分寺は1期と2期とが

考えられます。1期は慈遠寺。国庁から真東にあります。ここから平安時代の古鏡も出ています。ここは少し高い、国分寺設定にいい場所です。現在、鹿児島農事試験場があります。

今度は軍団の駐屯地。右上に軍場(ぬか)という所があります。多嶽軍団の見張所ではなかったか。というのは、そこにある山は天女ヶ倉(あまのむら)山と言いますが、種子島では一番高い山です。ここから見ますと、太平洋が一望であります。したがって、軍団の見張所として大変いい所です。さらに下の方を見ますと、後の大字現和(げんわ)があります。阿枚(あし)郷の中心ではなかったか。

図13。今の所を字絵図で見っていきます。多嶽国府西之表(国府格城中)説と字図。多嶽国府の想定地は、榕城、小田、石之峯、松下という字の所です。本城が少しかかります。本城(ほんじょう)というのは、『種子島家譜』にも載っています。中世の城です。山城的なもので、現在も遺構が残っています。さらに、豊山(とよさん)というのがあります。これがいろいろ考えさせられる山なんです。また下の方に城の内(うち)というのがあります。熊毛軍団の見張所ではないか。これは東シナ海の見張所。

さて、図10に参ります。図10、15、16、17、18と5つほど小さい種子島・屋久島の地図をまとめてあります。図10。702～714年頃、初期南部種子島開発時代と名付けてみたわけです。熊毛郡を現在の南種子町域をもって参ります。実際、野間というのは現在中種子町の中心であります。そして郡原という所も中種子にあるのです。しかも此処は昔は能満に入っておったといわれている所です。能満郡の軍団と郡衙がそこにあった、と。そして国府津(くに)としてさっき言った島間城があります。長谷の台地があり初期の開田地、西之・下中・莖永・平山の穀倉地帯の開発が進められ、条里制がしかれた所でもあります。その頃屋久島には益救郡があり、益救郡家が宮

之浦にあったと想定するわけです。702年以前に、田部連が朝廷から派遣されて屋久島をめざします。そして種子島にもやって来るのですが、そういう経緯も考えて、これは種子島にも坊津にも向いている宮之浦ではなかろうかとの想定をするわけです。

図15。714～824年、北部種子島開発安定時代。南部が開発された後、北部開発にとりかかります。この頃に鑑真一行が屋久島に到着したわけです。その頃、国府を移転したと考えるわけです。熊毛郡というのを北部においた、と考えるわけです。能満郡と逆転します。その頃屋久島には益救郡と馭謨郡があります。益救郡を宮之浦に、馭謨郡を現在の麦生(むぎ)に置いた。麦生という名称が馭謨という名称と反対の音(ぎょむ)であり音が近いということ、此処は水田地帯であるということ、鯛ノ川(たいのかわ)という港をもっている。さらに此処は気候が穏やかで住みやすい所です。しかも下屋久の中心にも当たります。そういう関係で此処ではなかったかと想定できるわけです。今でもいろいろな役所があります。そして郡明神を想定するわけです。種子島の郡明神とか国玉神社というのは史料によったものです。屋久島の場合は場所が特定できないので、此処に付けてみたわけです。

図16。824年以降。これは大隅国編入以降です。①4郡を2郡に合併し大隅国に編入、②大隅国との交通の便、③郡内管理と収税の便、④種子島・屋久島共、旧二郡に近い地点。こういう観点で眺めてみます。屋久島では宮之浦と安房が栄えますが、郡を合併するわけですから、益救郡と馭謨郡を合併したと考えます。

西之表の方に島分寺がずっと存在します。存在した記録があります。だが、どこであったか判らないのです。そして熊毛郡家が住吉にあった。住吉というのは海上交通の要地であります。ここは冬場に季節風を避ける所でもあります。ただ、後背地が山

ですので若干不便です。

図17に参ります。935年頃、倭名類聚鈔にみえる二郡五郷時代です。阿枚郷、現和の拠点化と発展。阿枚(あし)・幸毛(さき)・熊毛の三つの郷が熊毛郡にあるわけです。熊毛がまた南に帰ったと想定します。阿枚・幸毛・熊毛、現在の西之表・中種子・南種子の原型であります。そして中心地は住吉です。国分寺は依然として島分寺として存在します。それから馭謨郡は馭謨郷と信有(しんゆう)郷の二つに分かれます。信有と馭謨、それも場所は判らないのです。馭謨は安房が中心だろう、信有は宮之浦だろうとの想定です。

図18に参ります。12世紀の末頃、平安末から鎌倉初期です。①熊毛郡内は三郡入道の支配、②熊毛郡・馭謨郡の弱体化と入道支配。種子島をみますと、上之郡・中之郡・下之郡の三つになります。阿枚・幸毛・熊毛がそうなったと考えるわけです。そして屋久島は馭謨郡で平安前期と大体似ています。

さて、図19を見て頂きます。島間のところですよ。これは最初に話すべきでしたが、最初、初期的な試作的な国府が存在したのが島間であると考えております。島間に内城・仮屋・ミズガ上城という三つの山城があります。これは遺構がよく残っています。ミズガ上城というのは目で見えない上城。誰も此処に登ったことがなかったわけです。近年になって登り始めたのです。もっとも、現在、ゲートボール場になっています。全面壊そうという時に持主の河東さんという方が奇特な方でこれを守ったわけです。歴史の好きな方で幸いに真ん中を平地にただけで終わりました。その時にこういうものが出たのです。ミズガ上城出土の竈形積石遺構。ピラミッド型のあるのです。ピラミッドだけでしたら、これは石蒸し焼きの積石と考えられますが、下に三つ石が出たということにおいて事態は変わって参ります。竈の想定がなされているわけです。綺麗な石を敷いて上に

軽石を5個ほど置いてあったのです。地質学者も連れて行って見てもらったのですが、残念ながら掘った後でしたので地質面を確認できないのです。まあ、奈良時代より古いのではなかろうか、との説もあるのです。

さて、今度は下の図です。小字がいっぱいあるのです。これは面白い所ですが省略します。

以上鑑真一行がやって来た当時の多嶽国府の状況を中心にしてその前後の様相を多嶽国府の所在地もからめて申しあげたわけです。皆様方から多嶽国府の想定について御批判を頂きたいと思えます。

私は、初期は島間説をとります。南部を開田した後北上して多嶽国府を西之表に構える。時期は大隅国が安定した後と考えます。ところが、いろんな説があります。真所説があるし、現和説、国上説、中田説。その他にもこまかいのがありますが、それは省略します。

礎石も見付からなければ、瓦も見付からず、何も見付からない。ただ日本書紀にある多嶽国印がもしも見付ければこれは決定的なものなんです。なかなかそんなものは出て来ません。薩摩国府を探し当てた平田先生が此処におられますから、多嶽国府についてのコメントが後であろうと考えます。先生は真所説を発表されたことがあります。以上で発表を終わります。

(質疑応答)

平田 どうも有難うございました。まだ15分ありますから遠慮なく質問をお願いします。

下野 全国の国府で種子島だけ判らないのです。何とかこの地名研究会で多嶽国府を想定させたい。私の説も穴だらけです。

納 さっきの説明の中で西之表と南種子に牧場とか牧(か)がありました。確か日本書紀の後の方だったと思うのですが、多嶽国に馬飼部を遣わしたという記事がありますね。たまたま記憶している

のですが。

下野 それは配りました年表に入っておるはずですが。済みません、入っておりません。私が前の方を抜きました。

平田 えーと、今日配った資料の中に「遣唐使と南九州経略」というプリントがあります。それに年表があります。

下野 馬飼部。

平田 馬飼部連大倭という人物が派遣されているのですね。

納 あれは？

平田 あれは名前です。

納 馬飼部ということから何か馬に関係した職業の人ではなかったのか。

下野 大いに関係がある。

平田 それは考えられることです。

下野 以前からその説はあるわけです。それで、一番最初は田部連。新田開発者、新田技術者。次に牧場技術者：馬飼部を派遣している。最初は屋久島に入っている。

納 屋久に入っている？

平田 なかなか面白いご説明でした。今日のレポートの中に入っていますが、遣唐使と薩摩国・多婁国・大隅国の設置は密接な関係があるということ、今日配った会報に書いてあります。それから八幡神社というのが種子島に沢山あるのですか。

下野 2ヵ所。

平田 2ヵ所、どこに？

下野 西之表と南種子。

平田 九州諸国の一之宮には八幡神社が多いのです。宇佐八幡、大隅正八幡、千栗八幡、柞原八幡。他の地方では八幡を一之宮とする例はあまりないのです。それで九州では八幡のある処は国府と密接に結び付いていると想定していいと考えます。また、国府だけでなく郡家や駅家とも関係があるとみてい

ます。それは一つの仮説というより、そのように設定してよいと思います。したがって種子島でも八幡がある所は郡家に密接に結び付くという想定を立ててもいいと考えます。八幡の所在地は国府・郡家を探する場合の有力な一つの指標になると考えていますので、その意味でも非常に面白い所だと思います。

今、歴史の道調査というのを文化庁の仕事としてやっていますが、4年目のレポートとして書いたのは次のようなことです。「すべての道は国府に通ずる」とか「すべての道は郡衙に通ずる」という前提です。そうでなければ古代の道の意味がないはずで、そこで、大字単位に並べてみて道路がどういふふう結びついて来るかということを見ますと、国府とか郡衙のある所に集中して来ます。それを調べていけば大隅国の8郡、薩摩国の13郡の郡家も探せるのじゃないかと、今作業を進めています。

また、すべての道は国府または郡家に集中しますが、今一つ集中する所に「城」という地名が多く見られます。ということは中世においても重要な場所だったということ。島間に「城」の付く地名が多くあり、西之表にも「城」の地名が沢山ありました。その意味でも面白い展開になるのではないのでしょうか。それから、もう一つの作業として「坂」という地名を拾いあげています。坂之上とか坂口とか坂元とか、大字で普通一つか二つなんです。ところが、五つも六つも集る所はあちこちに通ずる道があったということですから、やっぱり交通の要所である。そういう意味において、小字地名「坂」というのも案外無視できない。

そのような補助的な手段を整理されたら、もっと種子島の国府・郡家の具体像が浮かびあがって来るのではないのでしょうか。私自身、種子島の具体的な作業を進めていません。すべての道は郡家に来て来たとか国府に集って来るとか、一つの前提として考えることが出来ます。一番大事なのは国府でしよ

うけども。

下野 種子島の場合は、船の便ということが別途あるわけで、これも重要ですね。

平田 そうですね。今話が出ましたから補足します。『鹿児島県地誌』は大隅国が残っていないので薩摩国の分しかないので、薩摩国だけでも各郷ごとに舟・車とかいうものが記録されています。あれを拾いあげていきますと主要な港がほとんど出て来ます。舟の大きさを五反帆以下・五反帆以上それから百石以下・百石以上の船に分けてありますが、薩摩国の場合読んで驚いたのが一番大きな船が京泊に集っていることでした。京泊は網津村ですから、古代の網津駅というのはやっぱり京泊近辺に見付なければならぬと考えた次第です。従来こまかい小字ばかり追いかけていましたが、そういう船が集まる所というのを注目すると、京泊・舟間島は重要な所になります。薩摩国の場合あそこが一番大きな船が集まっています。その次が羽嶋です。米之津なんかはほとんどないのです。出水の場合はむしろ福之江に大きな船がみられます。『鹿児島県地誌』の船の大きさ、集中度というのも経済的に見たら面白いのじゃないかと考えます。何か他に？

青柳 島分寺・国分寺ということですけど、財政的な手当という面では史料に全然現れていないと思うのです。想定でこういう扱いをされる寺があるにしても、国分寺という形で実在するものとして取りあげるの、ちょっとどうかなと思うんですけど。

下野 それも、あったか、なかったか、判らないのですが、国師・僧は着任してるのです。問題は建物がどの程度であったか。国庁内であれば国府寺ですね。詔が出てから出来るわけですからね。その辺はよく判りません。

平田 多婁国の場合は『続日本紀』に薩摩と多婁に国師僧を派遣したという記事があります(和銅2年6月の条)。いわゆる中央政府のお声がかりで官

寺が営まれたということは続日本紀の記事から推定できると思います。それから今思い出したのですが、大広寺・大光寺ですか、大興寺とか勝興寺という寺を国分寺の代りにしたのがあります。加賀国などに実例があります。もう一つ「興」の字のつく寺は隋・唐の頃、則天武后もだけどそれよりも古く隋の文帝が大興寺という官寺を建てている。それを遣唐使・遣唐使たちが見て来て、日本で国分寺を造りますから「大興」という寺の名前は国分寺に結び付く可能性があります。「大光」になってますけどどこかで変ったかも知れません。それは別としても鑑真がたどり着く屋久島・種子島からのこの図は面白いですね。

下野 さっき言わなかったのですが、点線のところは実線に修正しようかと考えているところです。というのは粟生にちょっと停泊した。しかし此処では風が強いので移動して安房に行ったと考えるからです。

平田 この点線は粟生からですか？またこの資料は『唐大和上東征伝』ですか？

下野 当時は、種子島にすぐ聞こえたと思うのです。狼火で何時間もしないうちに伝わったと思うのです。種子・屋久間は近世においても狼火を使っています。係官が12日間の間に必ず屋久島に渡っているはず。そうしないと後がこわいですからね。中央政府の使節ですから。派遣された役人たちは4年勤めたら転勤願いを出すわけですから。

平田 (功) さっき烽火台があるとかおっしゃった

下野 え、ノロシですね。

平田 (功) ノロシの跡は今もあるのですか？

下野 いや、山はあります。火合せ峰とか火立峰と言います。見晴らしのよい所です。今残っている地名は古代と直結しないと思います。まあ中世・近世だと思えます。だけど、そんないい場所はやはり古代もいい場所だったはず。> 大隅経略

上野 ノロシは、種子島全体と屋久島に向けての  
ものですか？

下野 大隅にも向けられます。

上野 あゝ、全部に見えるわけですね。

下野 大隅国府に離島からの合図がすぐ伝わるの  
です。何時間もかからんうちに。

平田 (功) そのノロシ台は相当高い所に？

下野 いえ、見晴らしのよい所。見晴らしがよけ  
ればいいのです。向こうが見ればいいのです。高い  
所とは限らない。

平田 (功) 海を隔てて、約3時間ぐらい。

下野 屋久・種子はそうですね。屋久島ではこう  
いうのですよ。「娘が、腰巻が見える、島間から」  
そういう歌があります。晴れた日にはそれくらい近  
くに見える。ノロシはいろいろと約束が決まってい  
ますから、どうすれば、こうと。トカラあたりでは  
近くは昭和まで使っている。それは船と船もあるし  
船と陸ともあります。島と島もあります。どうすれ  
ば何のしるしとか、どうか、こまかいことが決ま  
っています。

平田 (功) 敵が寄せて来たときは、どうか。  
中国では遠くから烽火台が北京まで続くと聞きます  
よね。

納 これとは直接関係ない話ですけど、昭和27  
・8年の頃、屋久島の電源開発のことで通産省から調  
査に来た時、屋久島の電気を安房から島間にあげて  
種子島を真っ直ぐ北にあがって、上場から佐多に連  
絡する、と。送電線をつける調査しとったですね。  
この話を聞けば昔も今も変らんとやなと思います。

平田 発想から言えば同じですね。種子島の北端  
から佐多は目と鼻。晴れた時はすぐそこに見えてい  
るわけですからね。先日、勘九郎がやって来た硫黄  
島だって、そうです。晴れた日には薩摩・大隅は並  
んでよく見えますからね。屋久島からだだと硫黄島や  
口永良部島がよく見えるし、少し沖に出て開聞岳が

こんなに小さくなくてもよく見えますからね。

下野 この本(『海南民俗研究』)の最初のとこ  
ろに佐多の古代史を考えることを掲載しています。  
これは多岐国の時代を想定して、佐多の郡に焦点を  
当ててみたのです。佐多側から見た種子島も書いて  
あります。ただ郡については、中世ならばその通り  
だと考えられるのですが、古代まで考えられるのか  
ということなんです。敢えて古代に想定して書いて  
みました。

平田 今、佐多の話が出て来ましたので、肝属郡  
の場合は高山に四十九所神社があります。それから  
佐多の郡には十三所神社というのがあります。四十  
九所の神様の名、十三所の神様の名が全部、旧記雑  
録の一番古い部分に出て来ます。平安時代の終り頃  
の史料です。四十九所は肝属郡ですが、十三所は  
馭謨郡なんです。だから佐多の郡に馭謨郡の郡家  
があった頃があるのかなという疑問をもっています。

下野 多岐国の場合、この十三の神社を使って想  
定してみたのです。

平田 ああ、そうですか。

下野 ところが、大隅国の方はあまり多くて。

平田 そうですね。ちょっと骨が折れますね。

下野 簡単にはいかなかったです。

平田 今日は非常に面白い話でした。何か質問は  
ありませんか。もう時間がなくなりましたけど。

青柳 地名のことではないのですが、多岐国府と  
南の方との関係ですね。もし種子島だけでなく南の  
方まで目指していたとしたら、目を向けていたとし  
たら、国府というのは南側にある、と。もし、南と  
いうのに目を向けていなければ便利な北の方にある  
という考え方もあると思うのですけれど。実際に、  
何というか、南嶋にどういうふうな影響を国府の存  
在が与えたのか、というようなこと。何か、事実的  
にありますか。

下野 史料でみる限りは武装集団を南嶋に派遣し

ています。奄美まで行ったと仮定します。日本書紀  
にちゃんと書いてあります。奄美のことは書いてな  
いけど、行っただろうと推定されます。多岐国から  
南嶋に行った。恐らくトカラ・奄美です。沖縄まで  
行ったかどうか、そこはさだかではありません。  
その後、奄美の人が朝貢するわけですから明らかに  
行っているわけです。

そしてもう一つは奄美・沖縄の言語・文化という  
ものが、やはり古代日本とつながっているのです。  
それは古墳時代から奈良時代の初期頃の文化であろ  
う、言語であろう、と言われていきますからね。そう  
すると、その頃の多岐国の影響が当然考えられるわ  
けです。ただ、実際に治めたのは屋久島までだろう  
と思います。三島村・口永良部島・トカラはそれを  
治めるには相当な航海技術と資金がないと出来な  
いのです。また、そういう記事もありませんので。

平田 今の問題。多岐国府の使命というのは、遣  
唐船の帰着を保護する役目だと考えられます。それ  
が一番大事な仕事だろうと思います。遣唐使がなくな  
ると多岐国府は廃止されて大隅国に隷属してしま  
った。遣唐船という国家的プロジェクトをどう遂行  
させるか、というのが多岐国の一番大切な任務だ  
と考えていいのじゃないですか。

上野 8世紀の遣唐船の場合は、南嶋路。

平田 そうですね。

上野 9世紀になって来ると、直接東シナ海を  
突っ切って行く方式になる。

青柳 そういうふう考えられるとしても、南進  
政策みたいな膨張主義みたいなものがあったのでは  
ないか、との気もするのですが。

平田 そこまでは冒険だと思うよ(笑い)。

下野 南進というよりも、むしろこれは大隅・  
薩摩を牽制するために育てた。

平田 はさみ打ちということね。

下野 大隅国を11年後に日向国から独立させる。  
これはよくやる手です。外の方より内に向いている  
ということ。

上野 その時に、北の方に国府を移している？

下野 そうです。最初は南、屋久島に近い、そし  
て水田地帯に近い所。後で北部を開発する。北部で  
開発した水田を合わせると総面積では南の水田より  
広いですから。なかなかですね、この分野は。

平田 どうも有難うございました。次回は米原先  
生にお願いしてあります。それから『甕藩名勝考』  
は後3回で読み終ると思っています。それ以後は吉田東  
伍『大日本地名辞書』の鹿児島県の分をコピーして  
読んでいこうかなと考えています。今日は、これで  
終わります。

図2 第十次遣唐船と多祿国

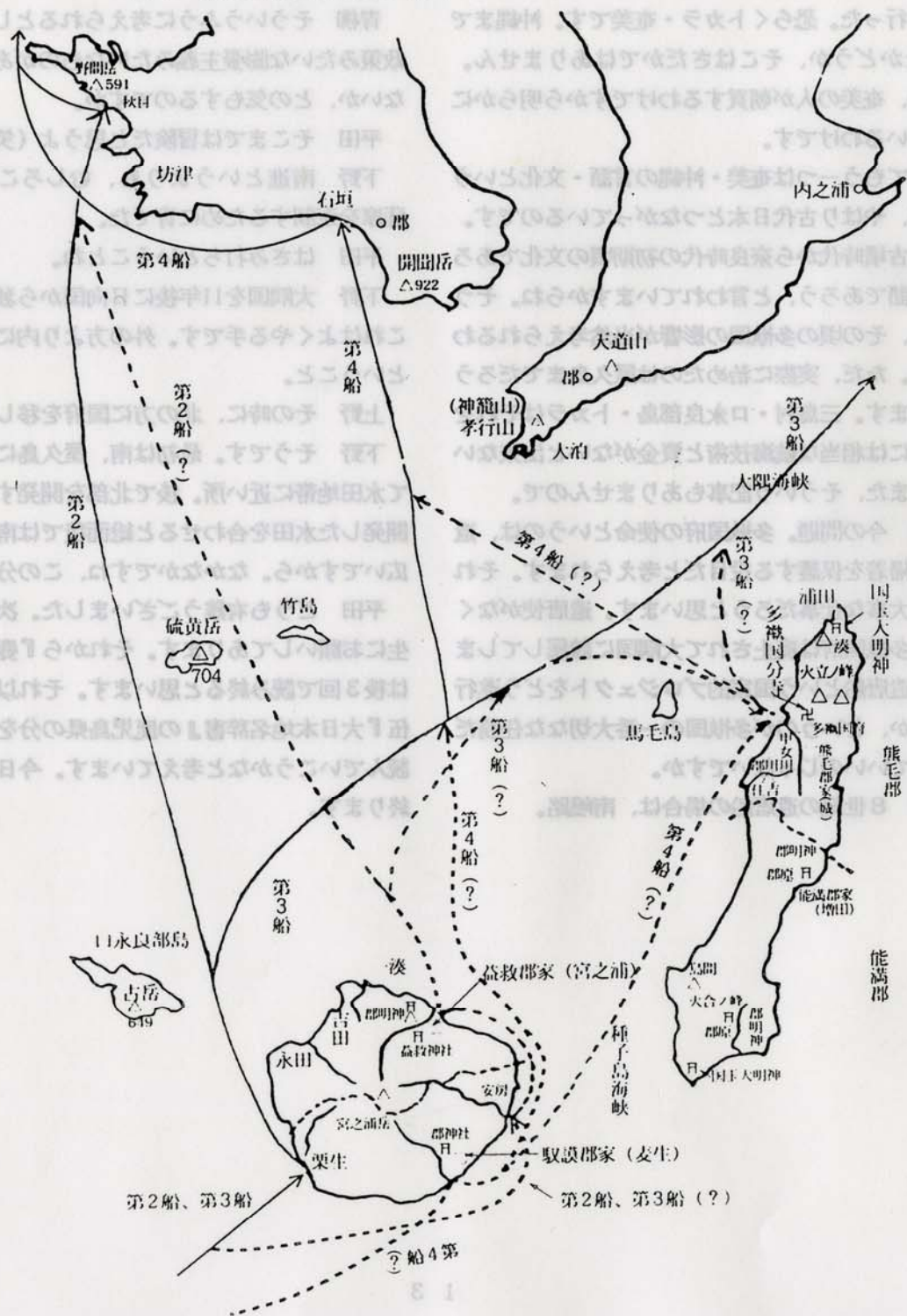




圖2:多祇國府國上説要圖

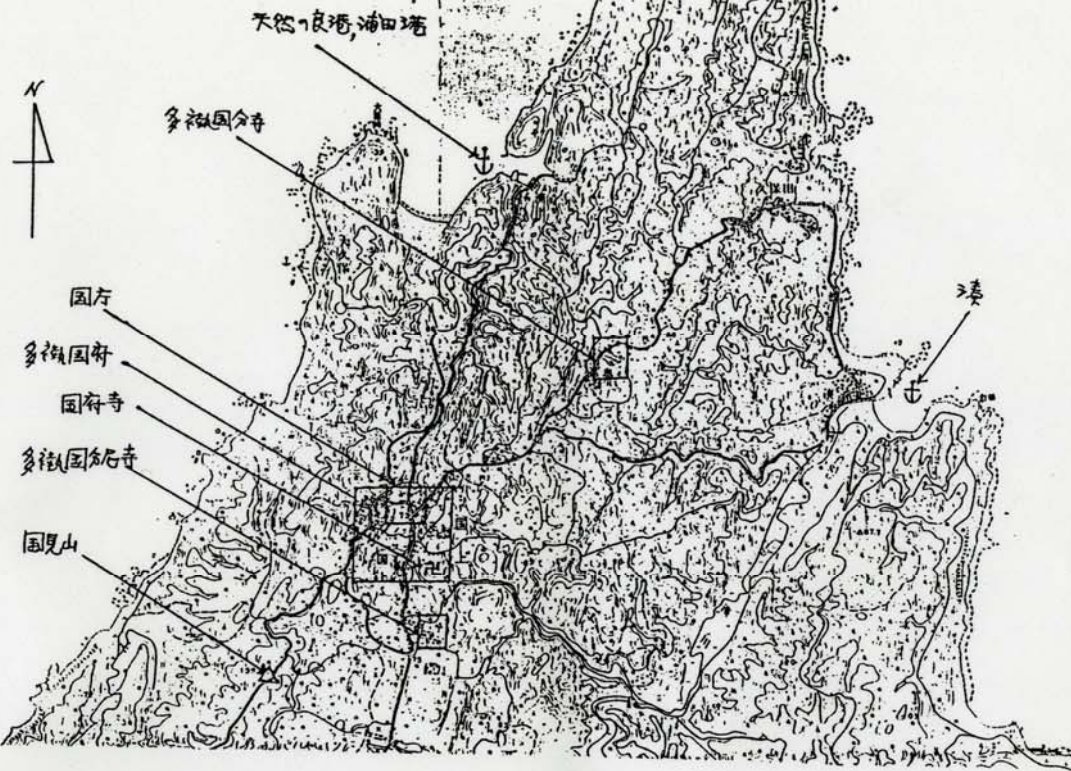


圖3:多祇國府現和説要圖

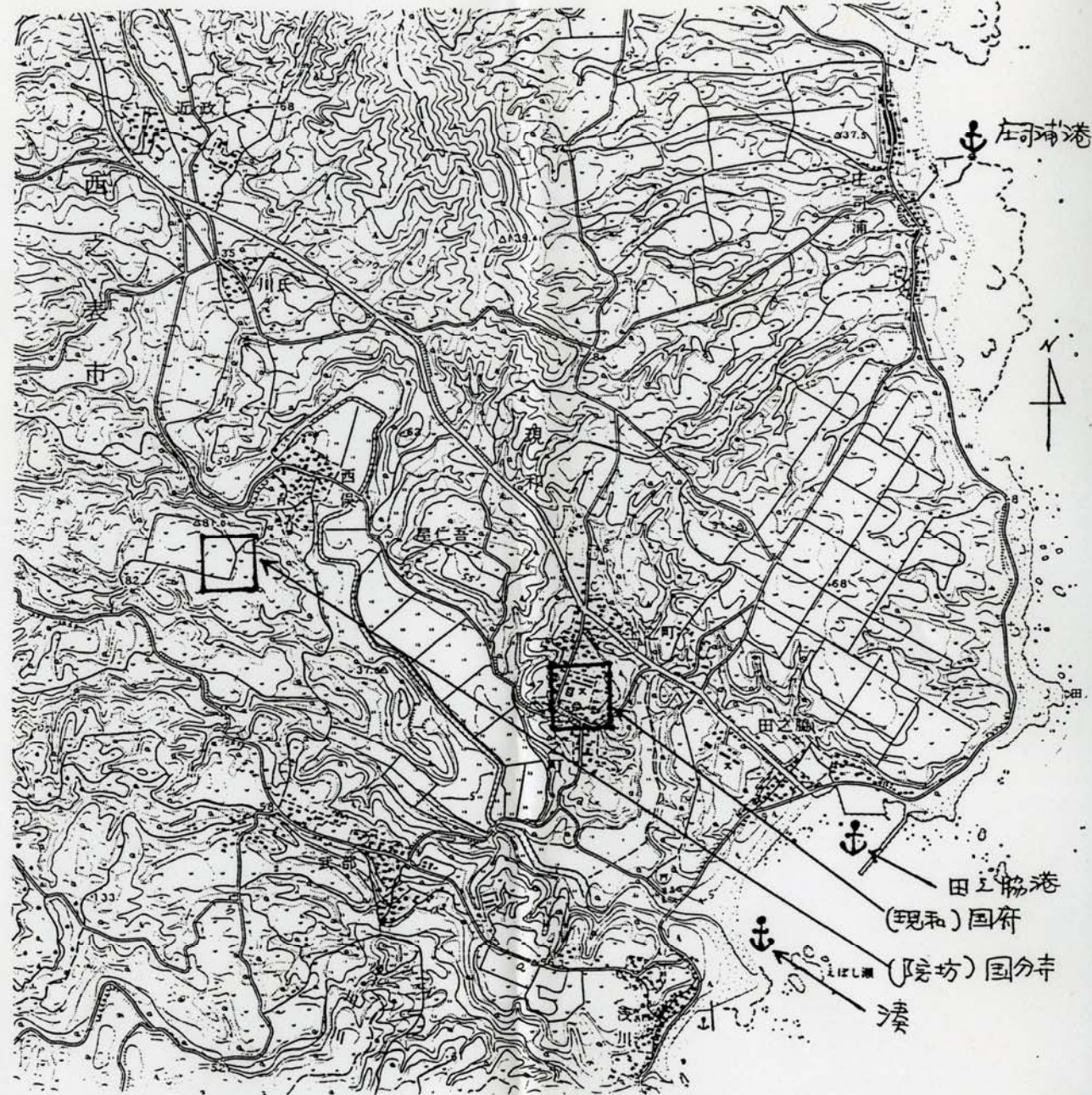


圖1:多祇國府國上説要圖

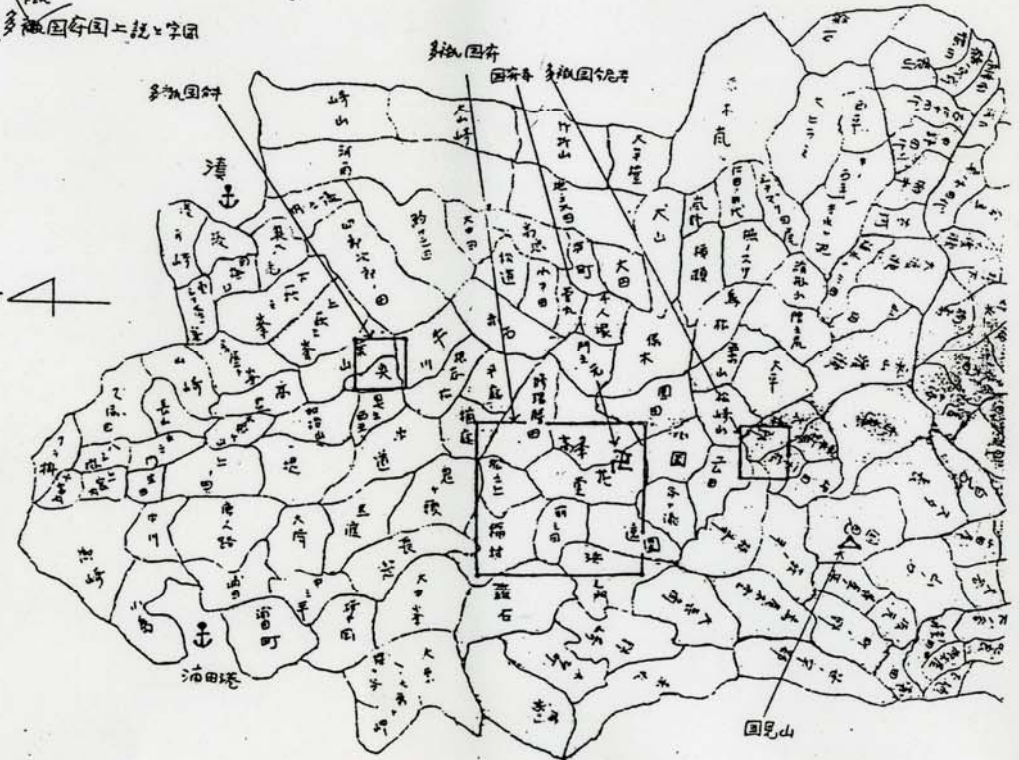
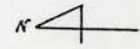




図1 多瀬国府中田説要図

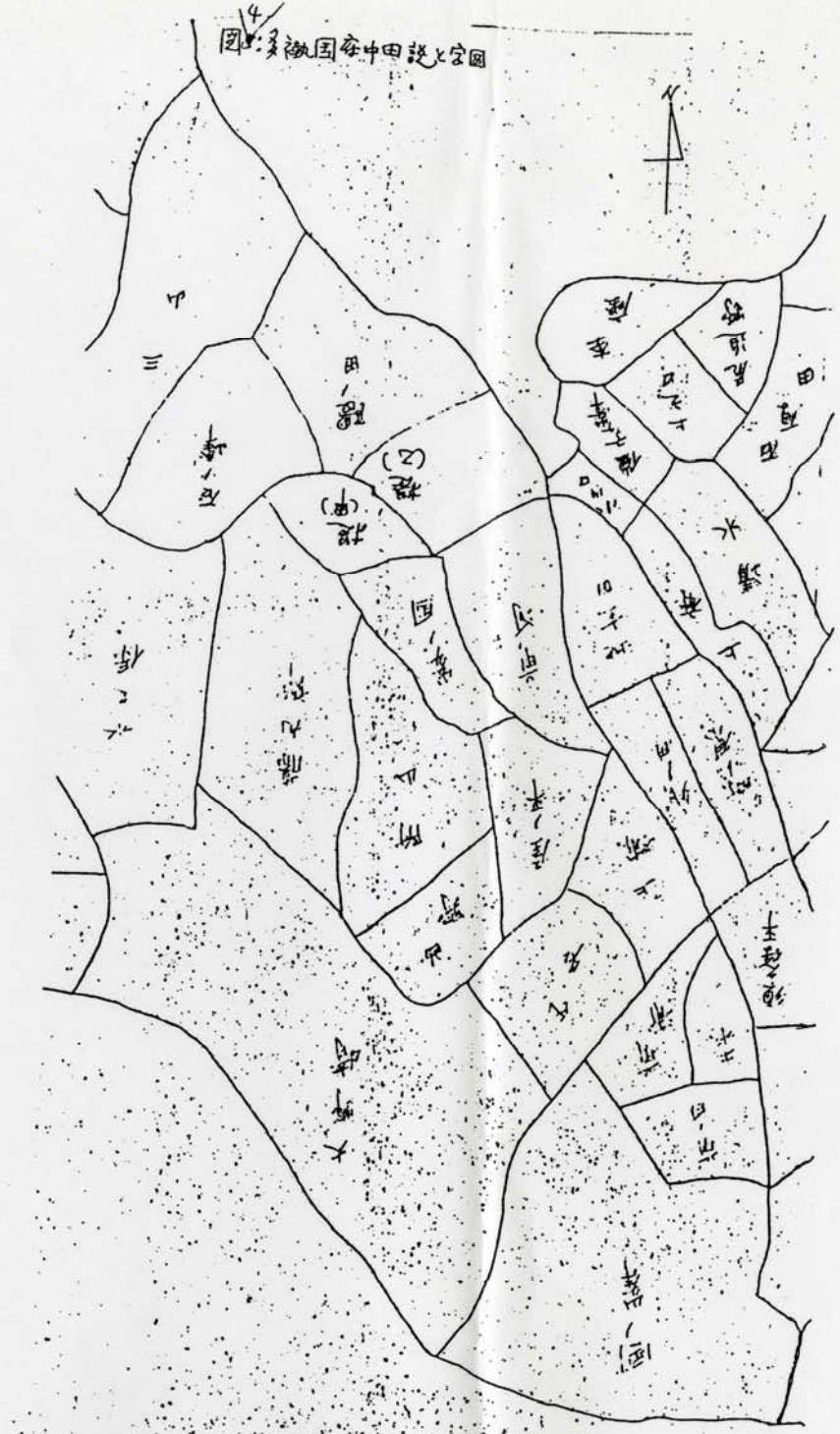


図2 多瀬国府中田説と空図

(F)

(印刷の場合、文字を上下逆にして印刷する)

图1: 多湖国府与附近之字图

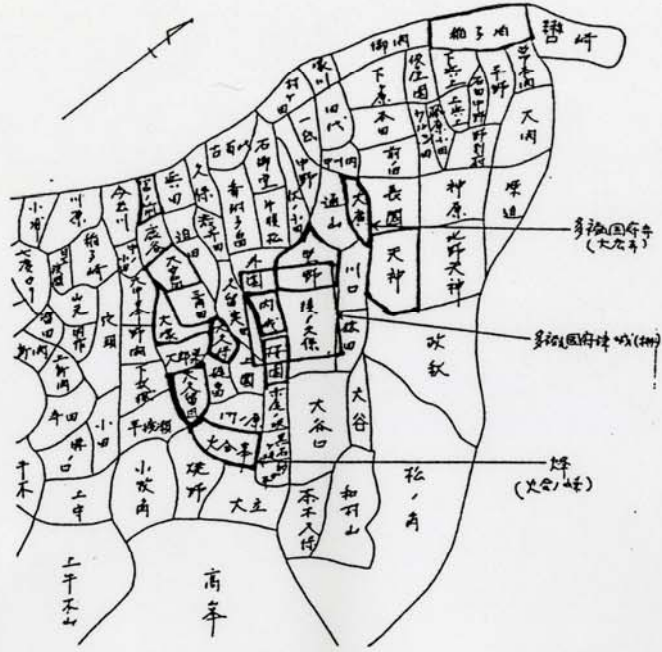


图2: 多湖国府重新规划之字图

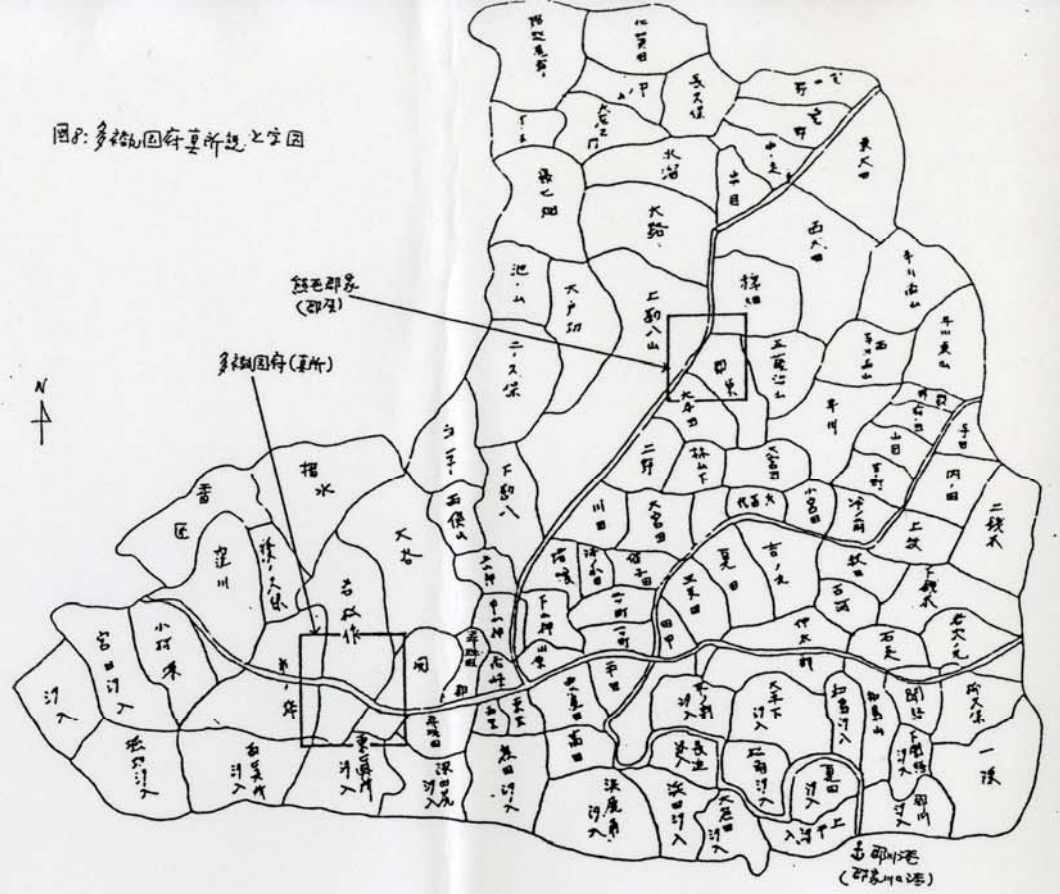


图3: 多湖国府重新规划之详细地形图



图4: 多湖国府重新规划之详细地形图

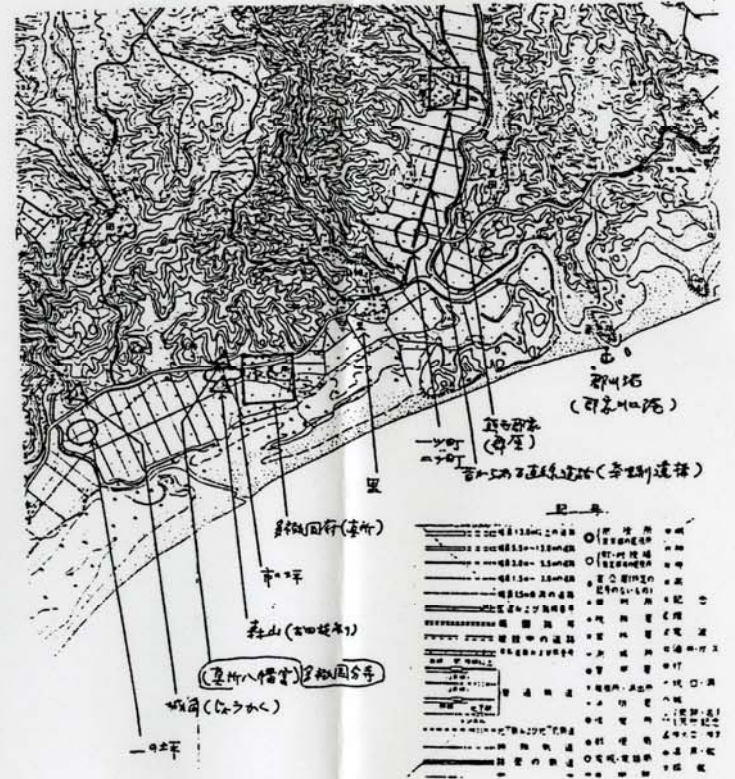


图11:多祿国府及其周边遺構圖

軍國城址  
古宇名群

東西に流れる川を  
境として、多祿国府城

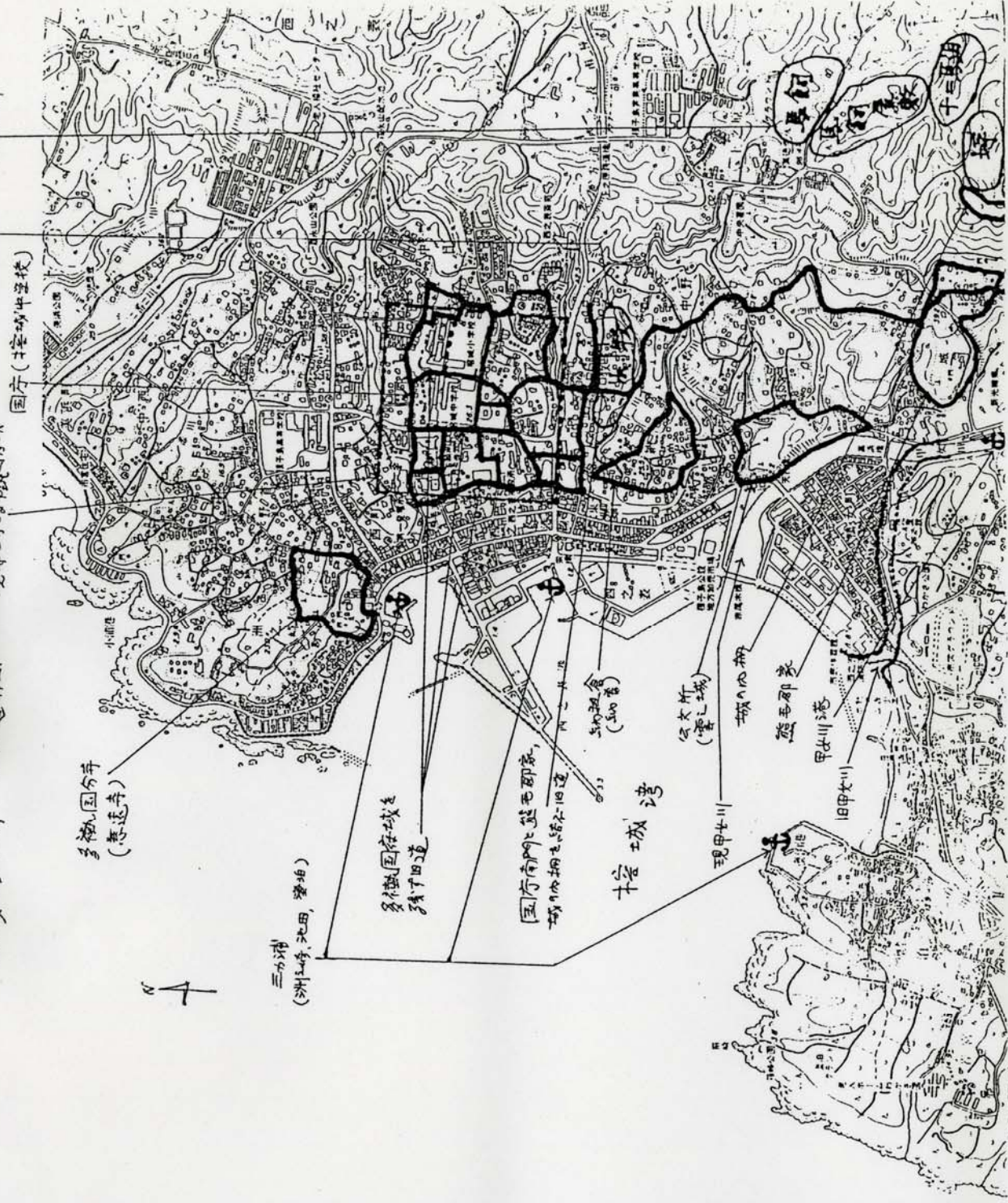


图12:多祿国府及其周边復元圖

軍國城址  
古宇名群

東西に流れる川を  
境として、多祿国府城



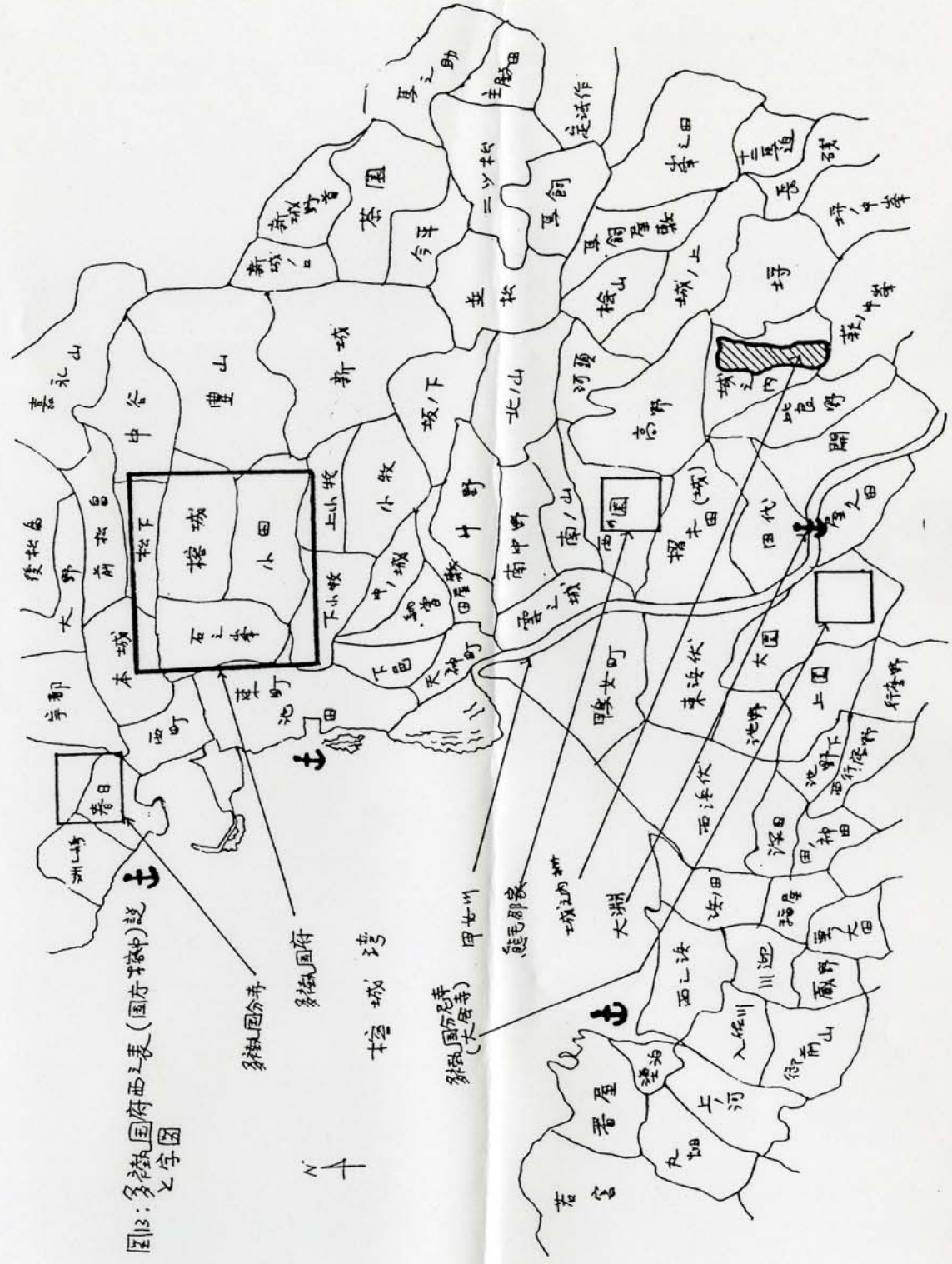
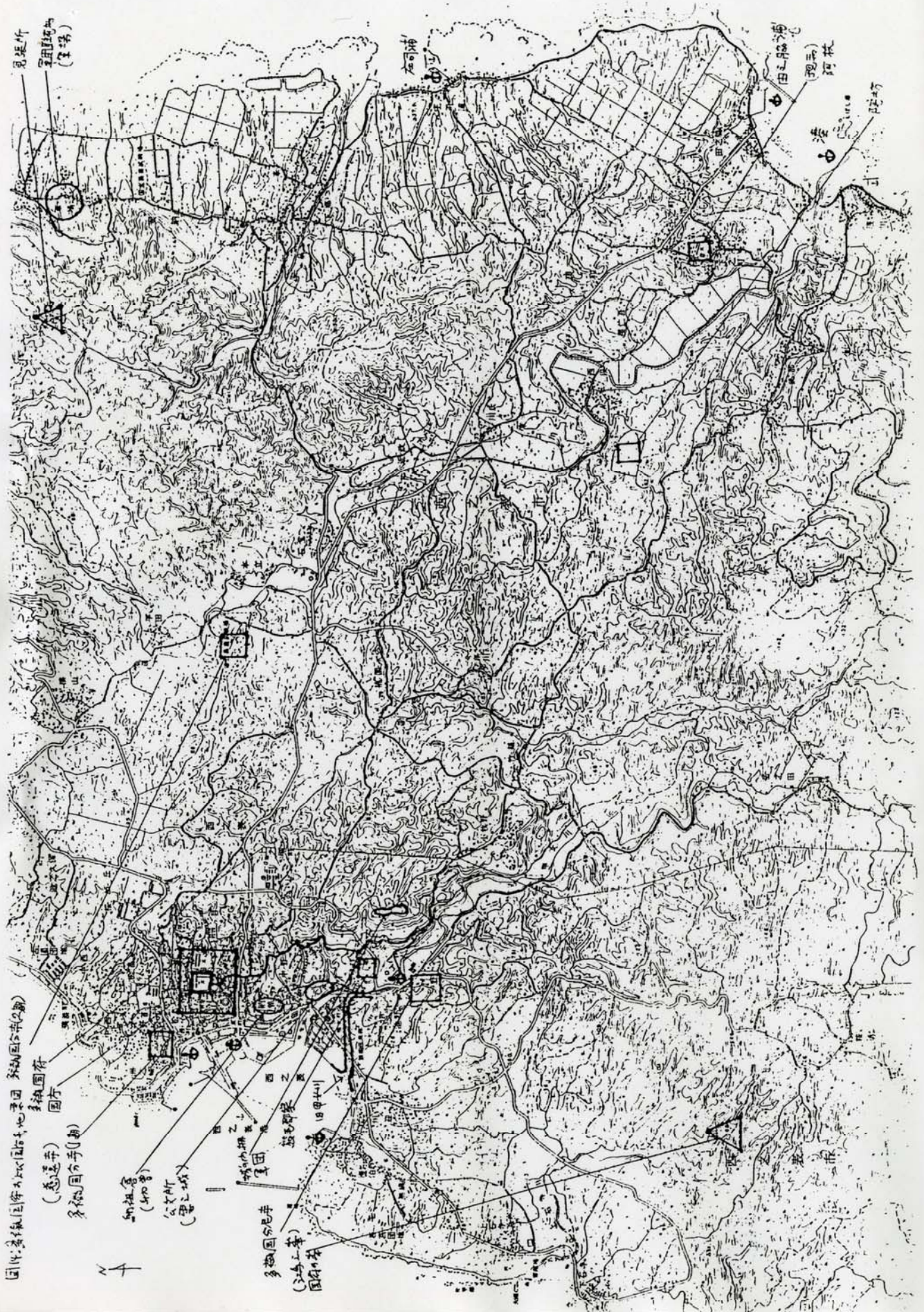


图13: 多賀野西之表 (国方) 中説  
七字图

图14: 多賀野西之表 (国方) 中説  
七字图

图10: 702年~714年(初期府郡设置时代)



图11: 714年頃~824年(大隅国成立前後)

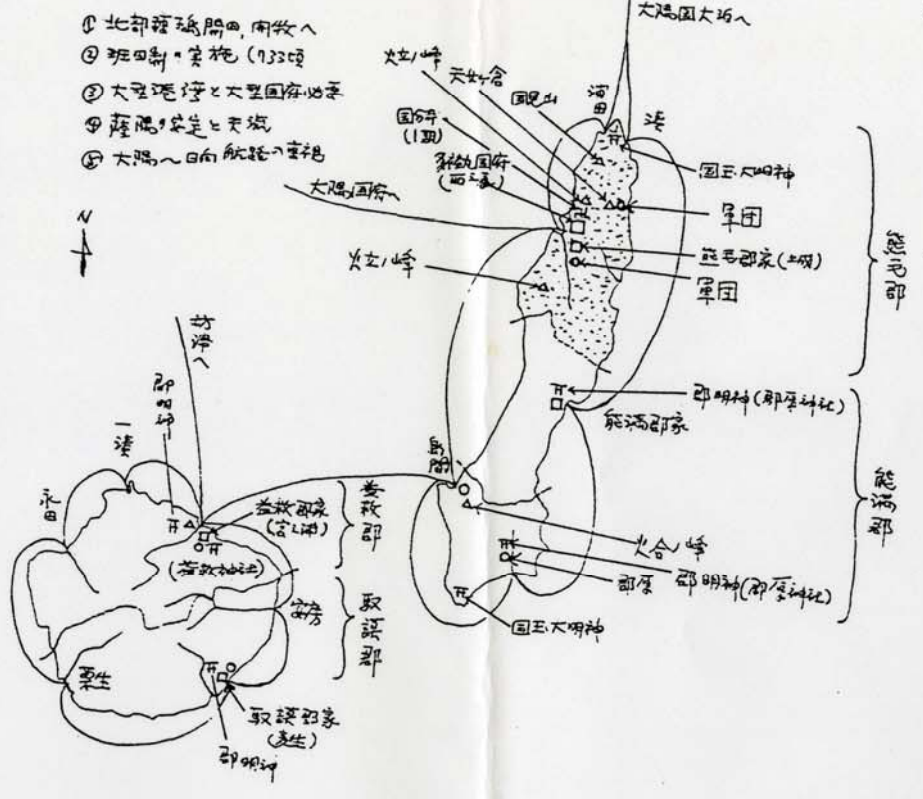


图16: 824年以后(大隅国输入後)

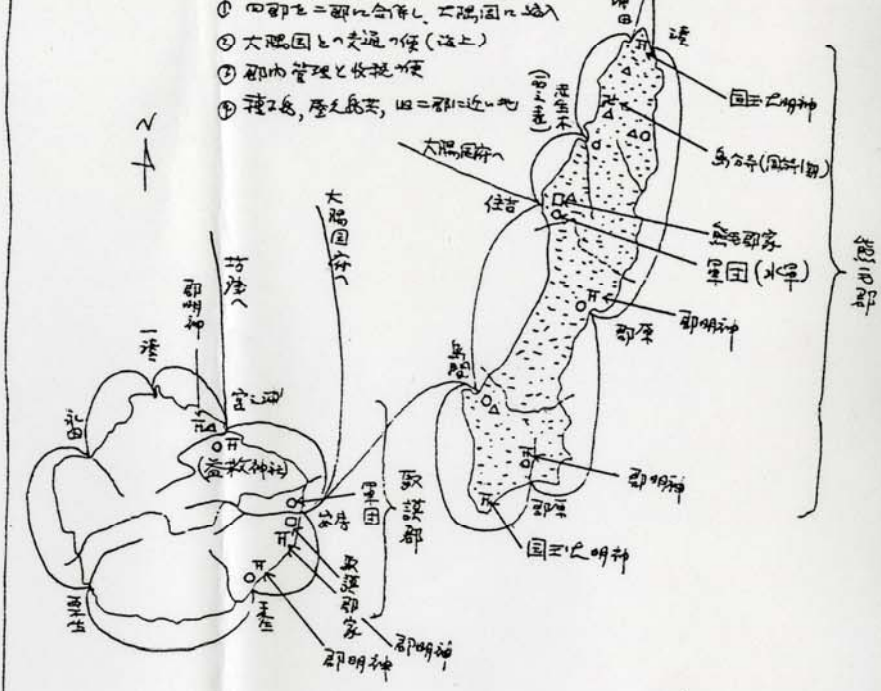


图17: 935年頃(保元平治乱)

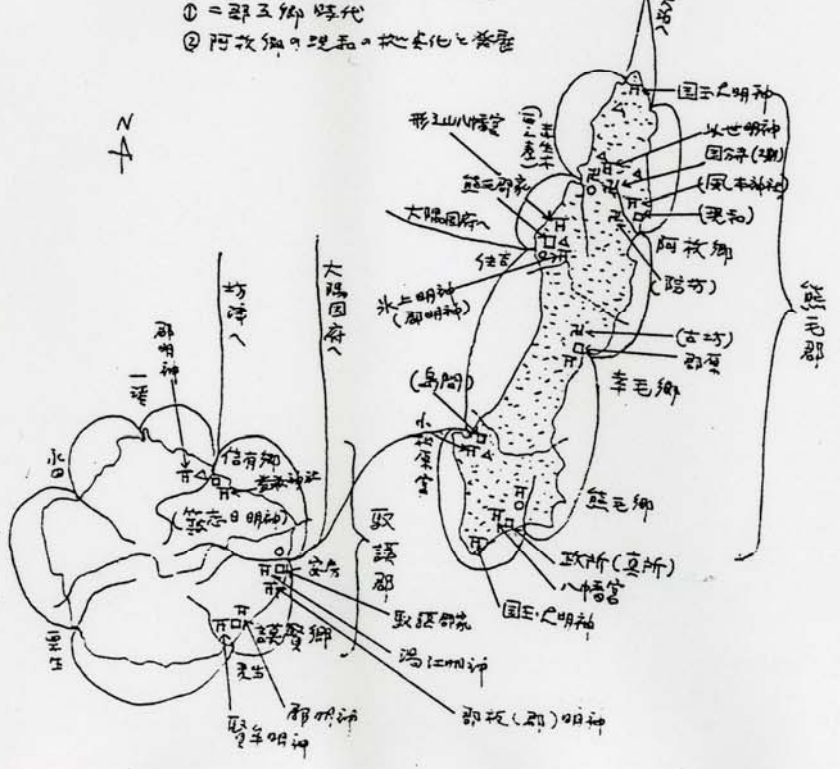


图18: 12世紀中葉(平安末~鎌倉初期)

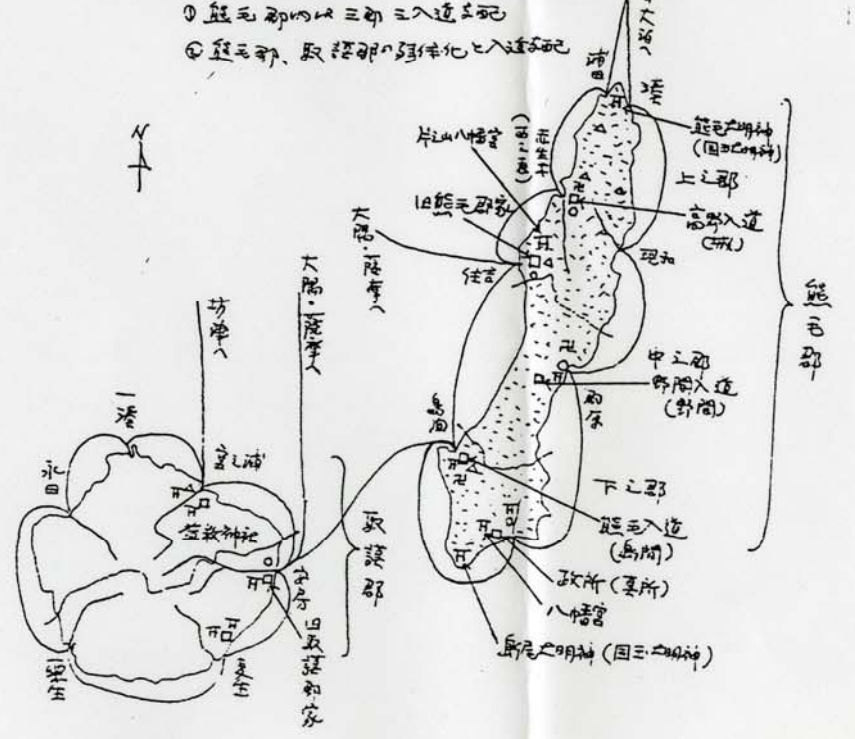
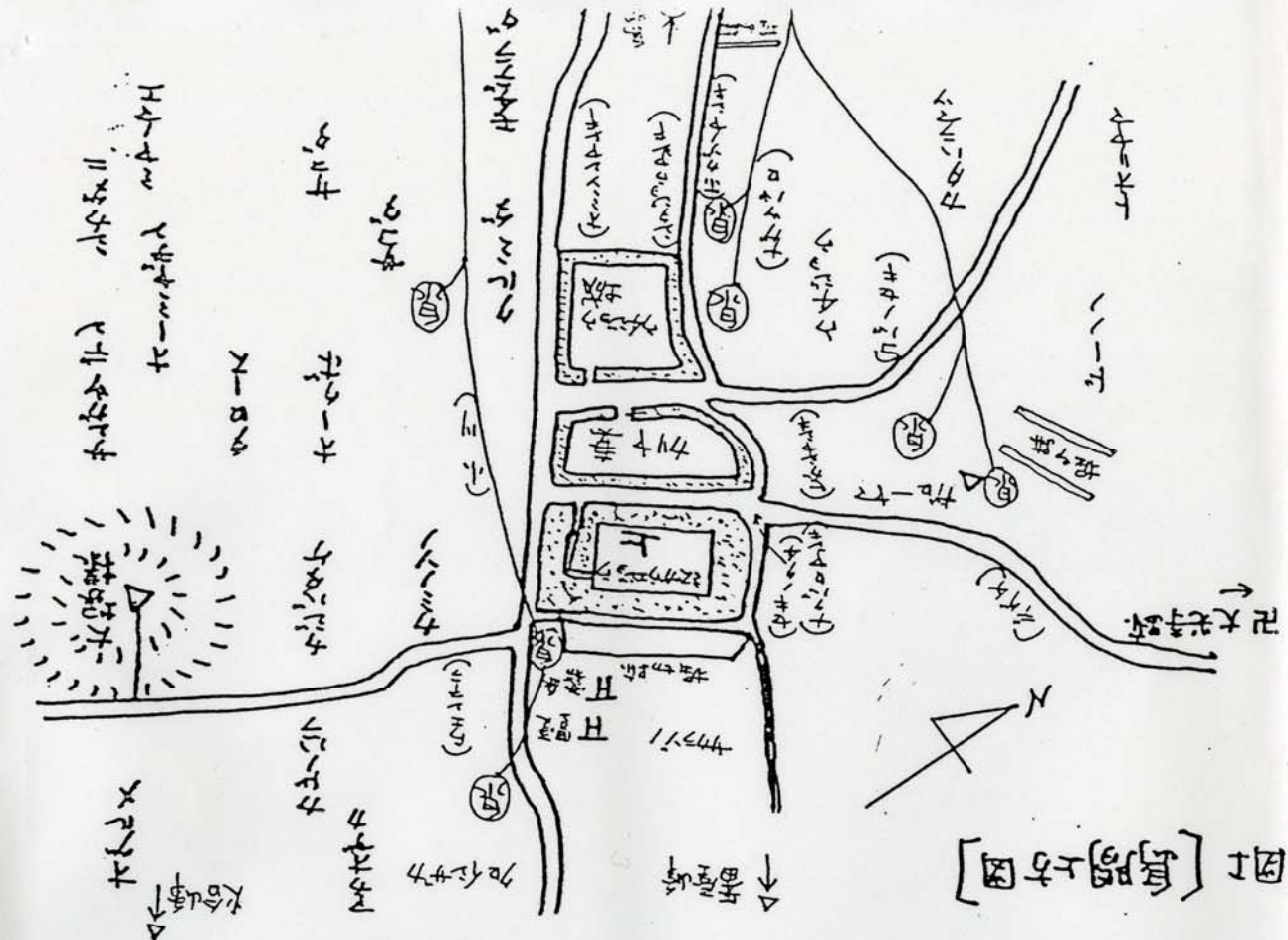
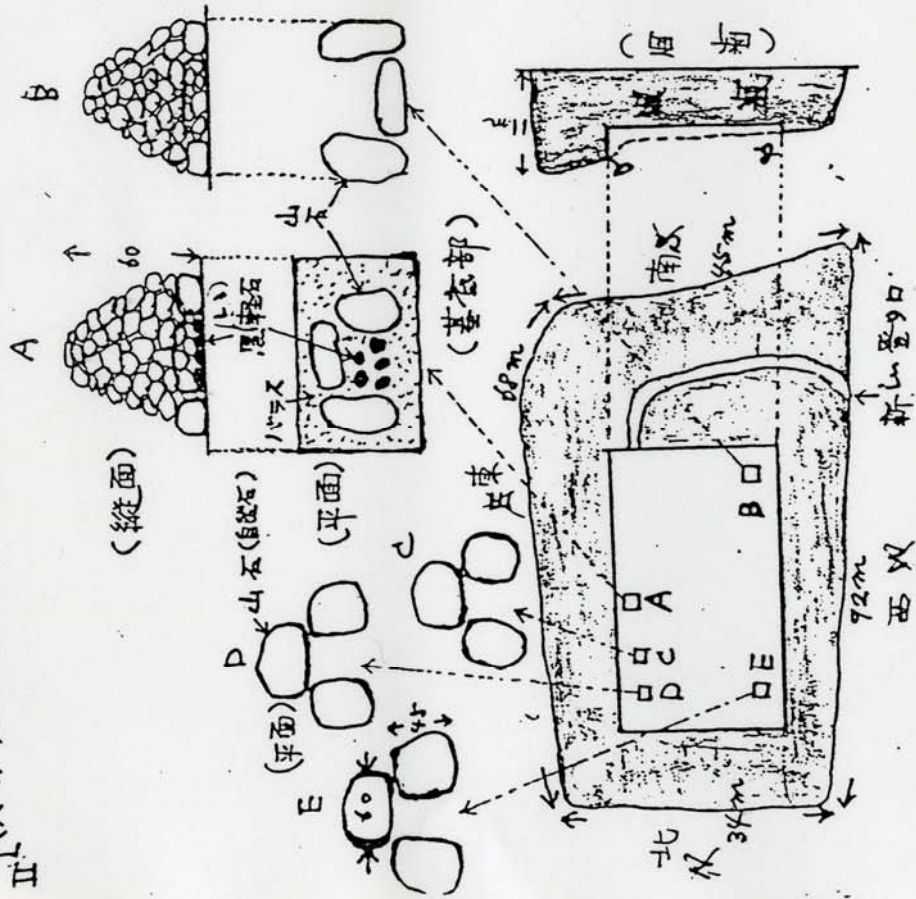


図19: 島間城(上妻城)

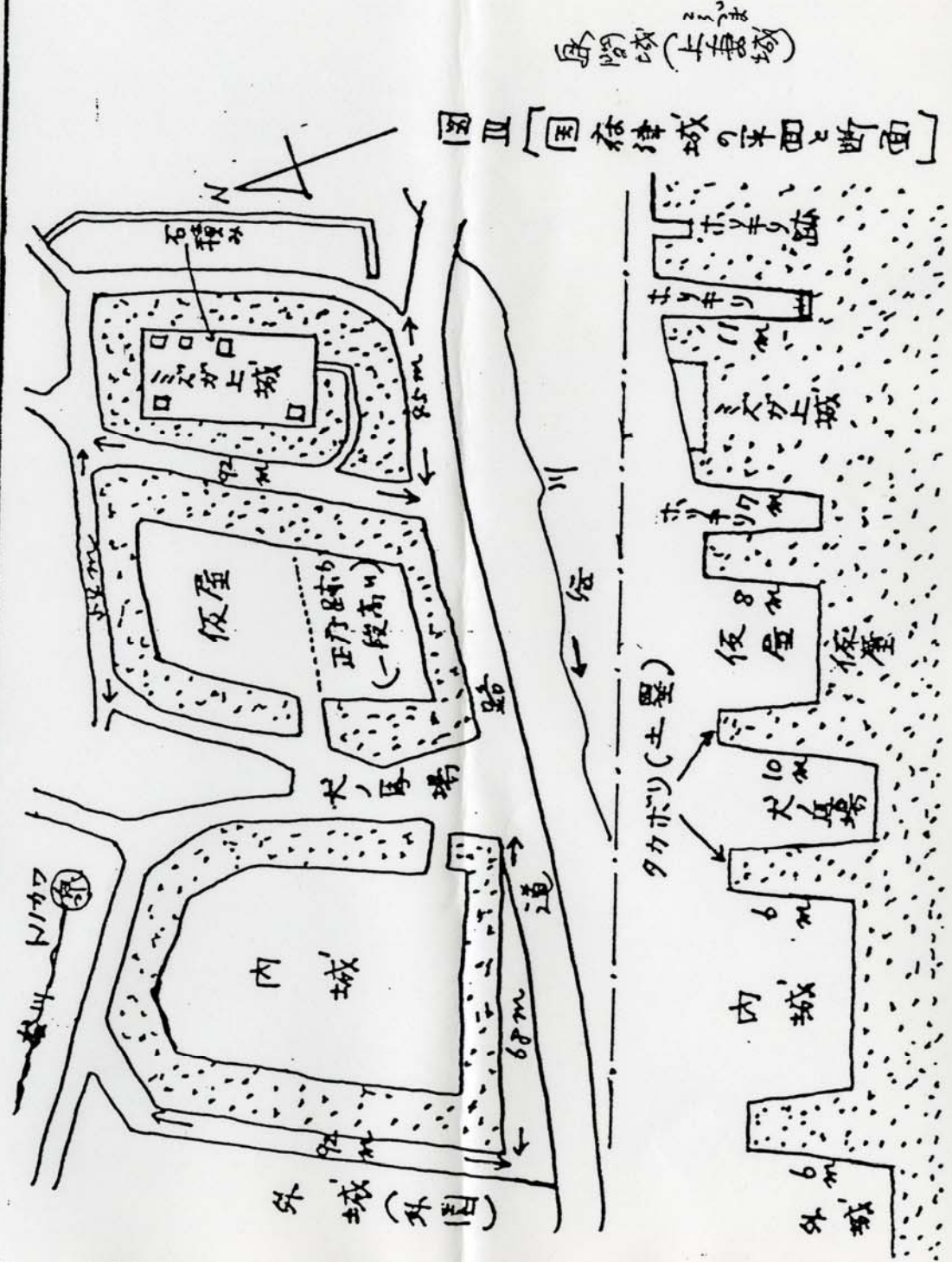
1990. 3. 12.

下野谷見

Ⅱ [スガウエシヨク出土窠形積石遺構]



Ⅰ [島間城] Ⅱ



Ⅲ [島間城(上妻城)の平面と断面]

島間城(上妻城)

# 地名研究会報

第54号

平成9年9月7日

鹿児島地名研究会

I. 第54回例会 平成8年9月1日(日) 於教職員互助組合会館和室

(出会者) 青柳俊二・池田 純・上野三善・大田照夫・納 栄蔵・小山田稔・木場武則・坂本 誠・  
染川一幸・永坂芳彦・永田典男・肥後芳尚・脇岡修一郎・平田信芳・福元忠良・  
藤浪三千尋・三善喜一郎・山下東洋・与倉辰夫・吉原林昭・米原正晃(21名)

II. 夔藩名勝考読会 P.187 ~ P.190

(問題となった地名および事項) 檜木・志布志・高千穂峰・檳榔島・高乳穂・天逆針

## 神武東征説話と景行西征説話

### 檜木

平田 檜ヶ原は前回も出て来ました。祝詞では必ず「日向の橋の小戸の檜ヶ原」と、常套文句です。檜木イコール青木というのは前回話が出ました。

青柳 前々回に、檜木とは何かということが平田先生から質問があり、それで青木のことだと思ってそのように説明しました。

平田 そのように理解しました。

青柳 これは檜木でしょう。緑色の木は青木なんです。だから私が云ったことは違っていました。国柱に担がれたのかなと思います。檜木ではないのです。青木は。

平田 あゝ、そうなの。

青柳 読み方が違うじゃないですか。これは檜木(ぬき)でしょう。青木とは違う。「は」と「お」は違う。

藤浪 隼人町に青木神社というのがあります。

平田 あおき。この字(檜木)を書くの?

藤浪 青い木。小田という所にあります。小田が小戸と音が通っている。それで祀ってあると聞いたのです。いわゆるみそぎ祓いの話から来ていると聞きましたが。

平田 それなら符合しとるね。

藤浪 ちゃんと、あるんですよ。

平田 最近、神社に行った時に気が付いているのだけど、大抵境内の隅っこにあるね。神社の附属品のように。

青柳 あゝ、そうですか。でも、「檜」というのは日本にある木ではなく中国にある木らしいです。日本に該当する木はないのじゃないですか。青木を檜木と思う人はちょっとそそっかしいというか、そういう感じで受けとめていたのですけど。

平田 しかし檜木という地名はそんなにはないでしょう。南九州でけじゃないかな。例がないと思う。

青柳 なんだか判らなくなりました。今までの発言は抹消して下さい。

平田 いやいや、なんでも自由に云えば(笑い)。

### 志布志

平田 志布志という地名も、難しく、判らない地名です。荒唐無稽なことを考えているのですが、一つの叩き台として出します。あすこに尻無川が流れておったと考えます。尻無(しなし)浜という地名が阿久根と川内の境にあります。これを「志無志」と書くことも可能ですね(笑い)。これ(無)を「な」と読むか「ぶ」と読むか、そこらの混同ぐらいはあり得るのかなと思ったりもするのです。これ



はこじつけです(笑い)。こじつけですが、志布志という地名は例がないわけですよ。他に似たようなものもない。こういう故事付けでもしなければ解釈できない。

問題は尻無川が海に注いでいたのかということですよ。志布志に尻無川があったのではないのでしょうか。阿久根と川内の間に尻無川がありますが、玉砂利が河口を塞いでしまって、流れは下に潜っています。海には流れているのですが、出口が見えない川になります。あまり故事付けはしたくないのですが、こういう故事付けもあるということです。

### 高千穂峰

平田 高千穂のことで、この前も鹿児島実業が甲子園で活躍しました。実業の校歌が流れると、「高千穂峰に雲涌きて」という文句が出て来ます。あれは鹿児島の人々が高千穂峰を鹿児島のものと思込んでいることを示す例になります。われわれも中学の時に「神さび立てる高千穂の」という校歌で育ったのですが、霧島連山で頂上が鹿児島県にあるのはほとんどない(新燃岳・中岳は鹿児島県)。高千穂峰の頂上は宮崎県なのです。そうであるのに、鹿児島県のもののような見方をするわけですよ。日向国も島津氏が支配していたわけですから、そういう云い方をするのは。

高千穂は天孫降臨の地といわれますが、高千穂という地名が3ヶ所あるのです。一つは高千穂神楽で有名な所。あちらの方が高千穂の本家のようにいわれたりします。日向の高千穂の地名説明は、多くの榎穀を積み上げた状態だと解釈します。榎穀を高く積み上げたら、いわゆるコニーデ型の山が出来る。沢山の稔りを示す表現だとみるのです。多くの穂を積みあげた状態というのは当然すぎる解釈ですが、もう一つ青森県の高乳穂山というのをみると、どうもグラマーな女性の乳房を連想させられます。乳房が高いのが高乳穂という表現になる。高千穂峰も

見ようによっては乳房の形に見えるわけですよ。乳房はやっぱり憧れの古里ですから、そのような発想の地名が自然だと思ふのです。いつの間にか征服した南九州に天孫降臨神話などが出来てしまった。

霧島の麓に天降川という川がありますが、三国名勝図会を見ると、この天降川というよび名を国府郷の人々は知らないと書いてあります。天孫降臨・天降川などの説話は、国学がさかんになって強調され特に天孫降臨の地ということ意識するようになったと思ふます。

昔の中等学校の校歌、鹿児島実業の校歌や二中の校歌に高千穂が登場しますが、全部で150ぐらいの歌を集めた七高の寮歌集をみると、その中で歌われているのは、ほとんどが桜島と城山。高千穂・霧島は10例もありません。七高生が身近なことだけを歌ったのかも知れませんが、雲峰高千穂という意識はあまりなかったようですよ。それがあつたら、もっと違った形で高千穂を寮歌などに歌ったと思ふます。ほとんど歌っていないということは昭和の初め国家神道が強調されてから雲峰高千穂というのが定着したと考えられます。明治・大正以来歌って来た「雲に聳ゆる高千穂」が定着し、それが鹿児島県の中学校的校歌に残っていると思ふのです。鹿児島実業の校歌を聞きながら、日本中の人が雲峰高千穂を意識するかなということを感じました。

### 檳榔島

平田 檳榔のことは、あれは誰だったかな、吉野裕子さんですね。彼女が檳榔のことを詳しく解釈しておつたと思ふます。学生社の『扇』という本だと思ふます。檳榔島産のものが日向国から太宰府に献上され、それがさらに都に送られて、檳榔を飾った車に京都の貴族たちが乗った。そういうことを檳榔島の記述は述べているのだらうと思ふます。1874の上段2行目、関白近衛領であつて島津庄の土産。島津庄は檳榔島まで支配していたということなんで

しよう。以上、叩き台として出してみました。何かありましたら出して下さい。なければ米原先生に時間をあげることにします。

### 高乳穂

平田 先程述べた日向の高千穂の話。榎穀を撒いたことによってこの名が生まれたというのは、風土記逸文にある地名説話です。稲がたくさんとれて榎穀を高く積みあげるといふことは望むべきことだったでしょうから。

藤浪 その高千穂峰のとらえ方だけど、私たちは毎日見ているのですけどね、高千穂峰を。国粋主義者でもなんでもないので、冬の姿・春の姿を見ていると非常に崇高なものを感じるのです。峰に雪が降ったりとか、秋晴れの空にそそり立つ峰とかですね、人間の心理の深いところにね、感銘を与えるといふか、そういう気がするのです。昔の人もそういう感じが強かったのじゃないかなと思ふのです。白尾国柱も書いていますが、この後に出て来ますけど、地形から云えばあそこは群山が集まって際立った山がないわけですよ。われわれがいつも見ている高千穂の山は主峰が一つ独立して立つが如く、くっきり天に聳えているわけですよ。神様が降りるとしても、見た時にまず人間が畏敬の念を感じる場所を、神様が降り立つ場所として定めたのではなかろうかという気がします。隼人・国分から見るとそんなに感じているわけですよ(笑い)。以前も平田先生のオッパイ説を聞いていますが、私には聖なる山という意識が強いのですよ。

平田 霧島で修業したのは何という上人ですか。  
肥後 性空。

平田 性空上人が立て籠った山として山岳仏教で知られて来るわけですよ。山岳仏教が起る頃は、一宮信仰もあったのですが、あれは別格すぎて一宮にならなかつたのか。あれだけの山だったら大隅国の一宮になつても当然ですし、日向国の一宮になつて

も当然ですよ。南九州の場合、阿蘇が肥後国一宮ですよ、薩摩国は開聞岳、大隅国は桜島ですよ。桜島の古名は鹿児島島でしょうから。そうすると、日向国が高千穂を採つてもよさそうだけど日向国は高千穂を選んでいないでしょう。何故かなと思ふのです。

藤浪 それを思ふと文句を云えないかな。

納 宮崎県の高千穂峽、あそこの場合クシフル神社というお宮があるのです。その裏側は山になつて居るのです。そこに書いてあるような「高乳秀」、ちょうど似ている。オッパイが盛りあがつたようななだらかな山があるのですよ。それで、あそこを高千穂といふのかなと思ふつたのですけど。

平田 クシフル神社の御神体として高千穂山があるのですか?

納 オッパイに似ているのですよ、今考えてみれば(笑い)。

平田 オッパイ説なんかを唱えたら日本では逆賊といふことで殺されかねませんけれども(笑い)。

### 天逆鋒

納 もう一つ。高千穂峰にある天逆鋒。あれはいつ頃どうして立てられたのか。

平田 坂本竜馬とおりが登つて引っこ抜いたといふ話は聞きますけどね。

藤浪 あれは手紙に書いてます。竜馬の手紙に。高千穂の上に銅で出来た云々と。

池田 あれは江戸時代に山伏がやったのではないか、といふ説があります。

平田 あゝ、そうですか。

池田 えゝ。

平田 山がこわかつたということから考えると、桜島の爆発、開聞岳の爆発、阿蘇の爆発。霧島はおとなしかつたから一宮にならなかつたと思ふせざるを得ないけど。日向国の人があれを一宮としてもいい山だけど。

池田 あそこは六所権現で分散して居る一つの力

じゃなかったみたいです。

藤浪 そうですね。

平田 南九州の場合、あゝいう山が一宮の御神体になっているのに、日向国が何故霧島を一宮にしなかったのかなと疑問に思うのです。こっちから見てものを云ってますけど、都城から見た眺めもいいですからね。都城の人たちが高千穂をもっと宣伝していいのですけど、宮崎県の人が高千穂を云いませんよね。

坂本 宮崎はどこですか？

藤浪 都濃神社。

平田 都濃神社はそういう山とは結びつきませんね。

池田 支配者との関係からはどうですか。

藤浪 それもあるね。

平田 昔は薩摩・大隅よりも日向の方が強いはずですからね。

藤浪 一宮は成立自体が若干おくれるのですね。

平田 11世紀でしょう。

藤浪 それ以前に古事記・日本書紀の説話が成立つとなると、例えば薩摩国が出来る、大隅国が出来る。その時、覓国使が来てるでしょう。その時に地形を見てから大隅国府を定める場合も、あそこから見た高千穂峰の景観が反映したということも考えられるのでは。

平田 別格として何もさせなかったということ？

藤浪 いや、説話自体が高千穂峰を盛り込んでいるということは神様自体が降りられた山を高千穂峰に設定するという事なんですけど。

平田 うーん。

藤浪 説話自体に立ち返ってみれば、例えば宮崎の高千穂峽一帯の山並みを見ると大体同じような群山が並んでいて、何というか、これはという感じの山じゃないのですよ。

平田 あゝ判った。

藤浪 私はよく云うのだけど、どこに神様が生まれ降ったというのか。みんな等しいような山じゃらいよ、と(笑い)。

平田 国分・隼人の住民として、絶対に天孫降臨の地でなきゃならないということだ(笑い)。

藤浪 地元人は(笑い)。

平田 判りました。しかし問題は天孫降臨が何かということだな。天孫降臨というのは天から降って来ることは考えられないので、海から入って来る事が考えられる。鹿児島湾に入って来た場合、高千穂はいゝ目標になる。

藤浪 鹿児島から帰る時、よく見えますよ。

平田 鹿児島湾の奥の方に入ったら、高千穂峰は格好の目標になる。それを目標として着いたという説話なら、合理的に解釈出来ますね。ただ宮崎県の話は、ほとんどが神武天皇を主体にしていますね。こっちでは神武天皇のことは云いませんけど、宮崎県は狭野神社にしても、耳津から船出したという説話もすべて神武天皇です。こちらではニギノミコトが降りて来たという話やコノハナサクヤヒメを見染めたという話、ウガヤフキアエズノミコトが乳餵で育てられたという話、それらがあるだけで宮崎県ほどは話がふくらんでいません。国分や霧島でどうやって高千穂を宣伝しますか。

神武東征説話と景行西征説話

青柳 思い付きだけど、宮崎に残る説話の内容は何というか、九州では風土記が多いでしょう、その風土記の内容が大体そのまま流れているのじゃないでしょうか。もし大隅国風土記というものがあってその内容が伝わっていたとしたら、研究の余地があるような気がするのだけど。

平田 伝ってないな。

青柳 豊後国風土記には景行天皇の話はだいぶ詳しく書かれていますが、神武東征については出て来ませんよね。もし日向国風土記にその東征の話が

書かれていたら、それがそのまま伝わっていることになりそうですね。だけど、そういう内容の風土記が作られたものかどうか。景行天皇が九州を征伐したという話はあっても、神武天皇が東征して行ったという話はまずないでしょう。

平田 昔はあった、という云い方は変だけれども昔は景行説話なんてものはほとんど言われなかったのです。神武東征説の方が常識としてまかり通っていたのです。ところが譚緯説によって日本の紀年に対して疑問が出され神武東征説話が否定されるようになります。神武東征説話は景行巡行の逆を行った

## 米(コメ・ヨネ)の付く地名

### 米原正晃

米原です。昨年この会に入会しました。その時、平田先生から「米(コメ・ヨネ)」に付いて調べたらと話がありました。自分の名前にも関係することだし、自分でも何故「米原(コメハラ)」という姓がないのかなと思ったりしていました。米原(コメハラ)という姓があってもよさそうだけど「コメハラ」は聞いたことがないのです。それに「コメ」と「ヨネ」の関係というのは、どういうことなんだろうと疑問に思っていました。

私の姓もそうなんだけれども、必ずしも「コメ」と関係があるような感じでない地名が沢山あります。その辺も調べてみようということで、テーマを与えて頂いたことを契機にして、先入観を持たずに小字とかいろんな資料を調べてみました。

さし当たり「米」の付く小字あるいは大字というのがどういう形であるのかということ、とに角、米が付けば全部出してみようということで小字を調べました。読み方が判らんのは何ヶ所かは地元にも出掛けました。地元でも判らん、何処にあるのかも判らん、というようなことで、役場に聞きました。ご覧の通りの結果です。これに脱けているのが

という解釈を歴史家がするようになったわけです。若い世代はそういう説を講義されているから、景行天皇の話は聞けけれども神武天皇の話は聞かない。昔は景行天皇の話は問題にされなかったわけです。神武天皇が前面に出ていたのです。そこに歴史解釈の無理があるし、ずれがある。九州の人たちが風土記から景行説話、神武説話を一つ一つ検証していかなくちゃいけない。そうでなければ、あれは後から中央政府が九州の人たちを納得させるために付け加えたものだということになってしまう。

他にありませんか。じゃー、休憩にしましょう。

だろうと思います。小字一覧に出ているものを拾い出してみました。

米山(ヨヤマ)というのが非常に多いのです。米山と書いてあるけれども本当は「ヨネノヤマ」とかいうような形で読むものもあります。用意した資料は役場で聞いたもの、それから地名辞典に載っているものを整理して出しています。

土地によって「ヨネ」と読む所、「コメ」と読む所があったりします。笠沙町片浦に、下から5行目ぐらいですかね、米山(ヨヤマ)と米島(ヨヤマ)があります。同じ所でも「ヨネ」と「コメ」とを分けて読んでいますが、これが何故かなというのが一つあると思います。米山も「ヨネヤマ」と読む所と「コメヤマ」と読む所があります。どうしてこうなるのかなと思ったりします。

宮崎県の地名も眺めましたが、宮崎には「米」の付く地名が非常に少ないのです。(不明)と書いてあるのは、役場で聞いても役場でも判らるので適当に読んでください(笑い)と言われたものです。1枚目の右の方、次米田と書いて「ヒトッデン」・「ジメタ」というもの。この地名が沢山あるのです

けれども、これは一体どういうことなのか。米田に次という字が付くのか、このあたりの意味がちょっと判りませんでした。読み方自体もですね、ヒトッデンと云ったりジメタと云ったり。ヒトッデンというのは角川の小字一覧に出て来ます。役場でジメタと読んでいた所もあったりしました。この読み方の違いが、どういう形で出て来たのかと思いました。

ヨネとコメに関しては、柳田国男先生の『瑞穂国について』の中に既に出て来ておりますし、いろいろな古語辞典を見ても「ヨネ」の形で出て来ます。柳田先生も云ってるように「ヨネ」というものがもともと古い、と。「ヨネ」というのは何かというと、それは「イネ」から出て来た。「イネ」から分化して粒のところ、穂のところ、穀のところ、いろいろな呼び名が分化していく、と。そのようなことが書かれております。

もう一つ、「コメ」というのは、柳田国男先生はコモルとかコムルとか、そういうことと非常に音声に近いところを見ると、そのものだけではなく稲の神との関係、そう云ったことと関係がある言葉として出て来たのじゃないか、と云っておられます。

「イネ」が「ヨネ」になったとすると、「稲」の付くのは地名として多いのじゃないかと調べてみましたが「稲」の付く地名は非常に少ないようです。何故なのかなと思ったりしました。

いろいろな文献をみると、「米」の付く地名は大体「ヨネ」の形で出て来ます。米寿の祝いも「ヨネの祝い」「ヨネの餅」「ヨネをやりとりした」という形で言われます。太鼓踊りの歌「高橋殿が世が世の時、白金伸ばしてたすきにして、黄金の升でヨネはかる」と、太鼓踊りでも米(ヰ)という形で出て来ます。

2枚目に移ります。米山(ヰマ)というのが非常に多いわけですが一体これは何なのかということ。米山というのはどんな所にあるかと聞くと、

山の中なんです。今は草ぼうぼうで何も作っていないとかいう所もあるようです。一つ一つを調べるのが出来ませんでしたので、米山(ヰマ)というのが一体どういうことで付いているのか、何故これ程、米山だけが多いのか、このあたりがよく判りませんでした。『地名の語源』の中では飯盛山・飯塚などと同じく「飯を盛りあげたようなまるい山」だということなんですけども、果たしてどういうことなのかなと思います。

それから「コメカミ」という地名があります。米嶺、これは字そのものを書いてある所です。北米神(吹上町)と南米神。上米神、吉野の場合は上と下で違った書き方をしています。下は片仮名になっています。仙田(開聞町)では米カミ石。

宮崎県の南郷町にも「米上(コカ)」があって『日向地誌』では「米嶺村」という形で出て来ます。『日本地名語源辞典』には「自然に放置した籠山という意味」と書いてありますけども、よく判りません。米嶺、米神、米上は当て字だろうと思います。『日本地名語源辞典』の解釈であれば、他の所もそういう形で解釈が出来るかどうか、と思ったりします。

米原、ヨネハラ・ヨナバル・ヨネバル。横川町に「ヨネバル」があります。熊本県には「ヨナバル」があります。菊池氏の居城、中世の山城の跡、あのあたり一体を「ヨナバル」と云います。熊本県では阿蘇の火山灰が降って来るのを「ヨナが降った」と云いますが、ただそれだけなのかなと思ったりします。あのあたりは阿蘇外輪山のはずれのところになりますので確かに「ヨナバル」は火山灰に由来すると解釈出来るのですけれども、あの辺は水田地帯でもあります。

ヨナ・ヨネは、沖縄のヨナ(砂)とも関係するとも言われています。宮良当壮さんは、与那国は米島(ヨマ)、粟国島はアワグニと関係する解釈しておら

れますけども、それはどうなのでしょう。これも後で討論して頂ければと思います。

「ヨナ」の付く地名というのは沖縄だけでなくまだあったかも知れません。まだ詳しく見てませんので何とも云えませんが、知名町・天城町にもあるのではないかと。また南島のそう云った砂地地名で解釈出来るのかどうか。そのあたりも判りません。

米原の問題で、いつも出て来るのが米原(ミハ)。最近では「マイハラ」と読むようになっていようです。これも解釈がいろいろあるようです。舞原(ミハ)の転化で「丘陵地に沿って原野が大きくめぐっている所」という解釈、「前(マ)原(ハ)」という解釈もあります。これは滋賀県米原のことです。

横川町の米原(ヰハ)。どういう解釈になるのかなと考えます。火山灰のヨナでは解釈出来ませんのでこの「ヨネ」はやはり米ということなのか、あるいは米が沢山とれるようにと念じた地名の命名法なのか、そういうことが考えられます。

熊本県には「米(ヰ)」の付く地名が目立ちます。しかも合併した時、「米」の付く地名を付けているようです。米生村(ヰミ)、現在人形浄瑠璃で有名な清和村の大字になってますが、これも米がよく収穫出来るようにという願いで米の生じる地名とした。米富村(ヰミ)、現在は玉田市南関町になっています。これも米がよくとれるようにいうことで合併時に米富村と付けた。米山村(ヰヤマ)、小国町の大字になっています。水田から米が山のようにとれることを願った地名です。これは『日本歴史地名辞典』に出ています。米塚村(ヰカミ)、国道3号線沿いにある所、山鹿に行く途中です。何か塚に関係があるのかなと思って、そのあたりで聞きました。合併時に、米が山を築くようにというように名付けた、と。現在は大字になっています。植木町米塚です。米迫村(ヰシマ)は、米山村と大迫村の組み合わせです。

鹿児島にはこういう地名の付け方があるのかなと気を付けて見たのですがど気が付きませんでした。米に関しての地名というのは、鹿児島の場合ほとんどがヨネ・ヨナで瑞祥地名ということでしょうか。笠沙町に米島(ミマ)というのがあります。地図にも出ています。これがヨネジマなのかコメジマなのかと聞いてみれば、コメジマだということです。何故、コメジマ。米の形をしている感じでもないのです。地名辞典をみると、鷗島→久米島→米島となったと地元の識者は説明するとあるのです。そういうことなのかなどうか、私には判りません。

それから米の流通に関係する地名では、米之津。北薩米の集散地と言われています。生見の米倉。これは給黎院の倉庫ということで『喜入町郷土誌』に書かれています。米屋町(ミヤマ)。鹿児島にも米屋町というのがあったのでしょうか。熊本のこれは熊本駅から熊本の繁華街に行く途中に商人町が沢山ありますが、その一画に米屋町というのが現在もあります。此処はそう云った空気をまだ持っている町です。

伝説・俗信に関係する地名ですが、阿蘇の中岳に登る途中に米塚(ミカミ)というのがあります。小さな火山で、上がくぼんで可愛らしい山ですけど、これが米塚です。阿蘇の開闢神話で、米を作ってくぼみが出来たと云われていますけれども、これなどは米を盛ったようなきれいな形をしています。そう云ったところから出て来たのだらうなと思っています。

それから先程出ました米原(ヰハ)。ここには有名な伝説があります。昔、米原長者というのが住んでいた。その物語は此処に一人の貧しい若者がいた。京都から姫が尋ねて来た。神のお告げによると探し求めていた夫は貴方です。どうかそばに置いて下さい、ということで黄金千両をさずかったというのです。菊池の米原の話です。そこで沢山の者を使って耕作をさせるのです。その長者が三千町をたったの一日で田植えをしろとさせるのだけでも、一日では

終らなかった。太陽が沈むと暗くなるのでたき火を燃やして明か明かとした、と。そういうような伝説なんです。地元では菊池氏の居城が火事で燃えているので米原長者の伝説が出来たと言われていました。

米山薬師が始良町鍋倉にあります、これは越後の米山薬師の霊場に似ているということで此処に祀ったと三国名勝図会に出ています。祭祀に関係して米山という地名が出来たのだらうと思います。

それから米搗峠(コメツツ)というのが、熊本県の植木にあります。ここでは米を搗くような音が聞こえるという話が伝わっています。

一応、問題提起でよいという指示でしたので、米の付く地名を鹿児島県を中心に宮崎県・熊本県の主なものをいくつか出してみました。その中でどうしても判らないのが、次米田(ツメ)というものでした。この地名がどういうことなのか、ジメジメしているジメで湿田のことかなと思ったりしましたが、よく判りませんでした。後で教えてください。

(質疑応答)

平田 ご苦労さまでした。そうですね、今出て来た次米田から説明します。(板書して)「桑(ツメ)」です。

米原 あゝ字の通りですね。なるほど。

平田 シトギデン・ヒトッデンになる。

米原 それで、ヒトッですね。判りました。

平田 これは桑をまかなう祭礼田です。

米原 そうすると次米田は、この意味が判らなくなって読んだのですね。

平田 文字を離してしまっただけだから次米田(ツメ)と読んでしまった。

米原 文字を離して意味が判らなくなった。ヒトッはシトギですね。

平田 米次田(コメツツ)は、ひっくり返った形かも知れないですね。米搗は以前説明したことがあるのですが、鎌倉時代の『塵袋』という本の中に大隅国

風土記逸文が入っていますが、それに隼人たちが、とくに娘たちが米を搗んで酒槽(カサ)の中に吐き出すのです。米を搗んで貯めておくと、それが自然醸酵して酒になるということが書いてある。隼人たちにそういう習俗があったことが記録ににありますから「米搗」はそういう酒造りをやった場所に由来する地名だと考えられます。私も以前から注目していました。栗野町稲葉崎の米搗だけが正しい形で残っているだけです。他はその通り音を写したものだと思います。川内にもありはしませんか。あゝ、そうだ。中郷の下池に、米カミ池という別名がありはしませんか、上池か下池どちらかに米カミ池という別名があることを川内郷土誌でみたような気がするのですが(上池の別名が米加美池)。

米原 宝島では昭和30年代まで神祭りの時は米搗をしていた。

平田 宝島で?

米原 そういう風習もあるのですね。

永田 それと、米田(ツメ)というのがある。地名と苗字は密接に関係して字名とも関連するのですが、垂水の海潟に米田(ツメ)という苗字があるのです。

池田 宮崎には米良(ツメ)があります。

米原 そうですね、米良がありますね。

平田 国分に米田(ツメ)という苗字があります。

永田 それと焼米田(ツメ)というのがあります。

平田 焼米田ですか。

永田 先日太宰府に行きましたが、大野城に登る途中に岩屋城というのがあります。島津忠長と伊集院忠棟が攻めて、高橋紹運と立花鑑連(宗茂の父)を此処で373名全滅させたのです。攻めた連合軍も五千名ぐらい死んだと云います。その時の古戦場の跡に、焼米ヶ原(ツメ)という所があります。大野城跡の近くです。

平田 はい、ここで読みを確認しましょう。1枚目の左側、ルビは皆ありますね。右側のルビのない

もので読みを知ってるのがあったら教えてください。まず米当、米浜は?ご存知ないですか。宇検村阿室の久米田。これはクメダ。宮之城町の八女は、ヤメでしょうね。

米原 これはヤメですね。

平田 〈不明〉の最初、働米木迫。これは「ドウメキサコ」です。ドウメキというのは、トドロキと云ったような意味です。その次、川辺町清水、ヨネヤマですかね。右側に行って笠沙町赤生木、山米、京米ノ尻、焼米田、真米。マゴメだったら馬籠・馬込が考えられますね。下に行くと、稲村、その次はイナゴ(稲子)。

米原 これは稲子(イナゴ)ですね。

平田 飛んで来るイナゴ。稲倉、イネクラか、イナクラか。

米原 二つ上の〈不明〉のところに、東町山門野の久留米迫(カサ)は「久」の字が脱けています。

平田 あゝ、はい。何なりと意見を言って下さい。この中では確かに「コメ」が少ないな。

? ちょっと質問ですが役場で地名が判らんとするのは、どんなことなんですか。役場自身が判らんとするのは。

米原 私は時間がなかったものですから判らない部分のいくつかは役場の税務課の固定資産係に電話したんです。土地を税金の対象にするでしょう。だから聞いたのですけれども、読み方は自分たちも判らない、と。何と読むかは地元にお問い合わせくれた所もあります。しかし判らないというようなことでした。とくに川辺町の場合はだいたい調べてはくれたのですが、判りませんでしたというような返事でした。

平田 えーと、明治22年に市制・町村制というのがスタートします。いわゆる近代的な行政が動き始めるのです。その時、日本全国、市町村役場の税務課が字絵図;土地台帳を作ります。字絵図というの

は1寸がいくらか、60分の1にするのかな。とに角そういう地図を作るのです(1間の長さを1分で表す:600分の1図)。小字ごとに絵図:台帳を作ったのです。小字名が漢字で書いてあっても振り仮名までは付けなかったのです。長く経ってしまって読み方が判らなくなってしまったというわけです。地名というのをなかなか研究しませんからね。税務課の仕事として代々申し送られて来て、台帳を保管して来たのです。現在は日本全国で、地籍再調査ということで千分之一図を作成しつつあります。あゝ、そうか、さっきの台帳の縮尺は六百分之一です。千分之一図で小字も復元されつつありますが、完全に出来た市町村というのは数少ないのです。市町村で判らないということは、そういうことなのです。判らないものだから、例えば桑田なんて字は上・下に分かれてしまって、次米田と読んで一覧表に「ジメデン」と振り仮名を付ける始末になるのです。

納 そうなのは角川の地名辞典を見ても感じます。仮名で書いた部落名があるかと思うと、次は漢字で書いて、その漢字も当て字だなというようなものに振り仮名が付けてあるのです。おっしゃるように、そういうことは、そういうふうにして、そういうふうになって、判らなくなったのじゃないかと地名辞典からも感じられます。

一つお聞きしますがね。あれは田上の五ヶ別府(カサ)ですか。土地の人は別府(ヒリ)と言いますね。五ヶ別府(カサ)、下別府(サヒリ)。「ベップ」がどうして「ビュウ」になったのか。それと、此処に「オヤシツケバ」というのがある。

米原 オヤシツケバは多いですね。

納 その分は仮名で書いてあるのですね。そんなふうにして、とに角判らなくなったのじゃないかと思えます。それから私が(住んで)居る所にしてもですね、ブタが瀬戸というのです。

平田 ブタ?

納 はい、ブタ。図書館にある古い地図にですね。いわゆる動物の豚を書いてそのまゝ豚の瀬戸。それから武田ですが、武と田上の境界、ちょうどの所。それで武田。

平田 あゝ武と田上の境。

納 昔はバス停留所があったのです、市営バスの。それに豚ヶ瀬戸停留所か。そういう名前が付いてあったのです。それを後でですね、「田上入口」という名前に変えとるのです。ブタ、ブタと、あの豚を皆想像していたのですが、そういうことがあってやっぱり判らなくなったのじゃないですか。

平田 地名とか小字は大切なものだと柳田国男が言い始めて『地名の研究』を書いたのですが、柳田自身が匙を投げています。学問として成立たんのじゃないか、と。それでも地名は大事だということで全国各地で地名研究をしている現状ですが、皆それぞれ自分勝手な解釈をしてしまい勝ちの状況です。地名研究というのはとっ付き易いわけです。どんな解釈でも自己満足しとれば済むわけですから(笑い)。早くから字絵図・土地台帳に当て一つずつ三千分の一地図ぐらいに小字を落とす作業をしておれば、もっと研究が進んだのだろうと思います。

私が地名研究を本格的に始めたのは、実は川内高校に居た時です。文化祭で川内市の史跡地図を生徒に作らせようと思って、町の境界を付けることから始めたのです。市役所で町の境界をきちんと描いた地図はないかと聞くと、ないというのです。川内市です。今から30年ぐらい前の話です。きちんと描きたければ字絵図を見なさいというのです。その時初めて字絵図なるものを知りました。それで川内高校周辺の字絵図を全部写真(接写)にとって現地を回り、番地を聞きながら小字図を復元して行きました。その時に兵庫原という地名が出て来ました。これは兵庫の跡だと見当を付けて動き始め、六町四方の薩摩国府を復元したのです。小字復元図から

始めると歴史が解明できるということを知ったのです。中世史を専門にする歴史家たちも大字についての小字は復元しますが、市町村全体の小字復元はやりません。川内市郷土史研究会が川内市の大字単位で小字復元をされたのは県下の郷土史研究では先駆的なことです。他の市町村はそうですね、輝北町がありますね。一番大がかりなことをやっているのは屋久町です。えーと、永里岡(城、外、外)という方がされたのですが、屋久町郷土誌に部落ごとの小字復元をきちんとしてあります。その他の市町村では、地名はあまり調べられていません。(阿久根市と加治木町には地名の本がある)

坂本 ちょっと前の話に戻りますが、米という字がつく地名ということで、必ずあそこにあるだろうと思っていたのが出なかったものだから。苗字に米というのが沢山村く場所があるのです。郡山に行くとき米永(三ツカ)という姓の人が何人か居て、伊敷の方に来ると米満という人たちが何人か居られます。米丸、米盛。米盛は小野に石工を先祖にもつ人たちです。谷山でも慈眼寺(谷山育ちの人だが無意識の中で「ジガンジ」と発音)の近くに米盛という人たちが居て伊敷とつながりがあると言います。また米山(三ツマ)という県議員が居りました、伊敷から出た人が。だから伊敷から小山田にかけて「米」の付く地名があるのじゃなかろうかと、それを思いながら今日は来たのですが、それが無いようだから苗字は沢山あるのに地名につながらないのだなあと感じたのだけだ。

平田 今云われた米永とか米満、米丸、米盛(米森)。この米原先生の表では、米益、米重ですね。こういうのはやはり人の名前を付けたもの。それともう一つ瑞祥地名ですから米が沢山出来るようにという門名があると思うのです。米満門とか米重門とか。その門名が苗字になる可能性は大きい。ところが、門名を小字名に採らなかった所もあるのです。

伊敷から小山田にかけては、そういう門名があったと思うのです。小字名に採用されなかったから地名には残っていないという錯覚を起こすのではないのでしょうか。

坂本 それとこの門とは関係ないけれども、小字などの地名を表現するのが時代・時代で違ったのではないのでしょうか。例えば谷山に新入(シユウ)という所があります。そこを薬師堂と波之平の二つに分けたのが門名じゃないかと思うのです。ある時期、汐入という書き方がしてあったり、そして今は新入という使い方をよくするようです。新入というのは最近の表現であって大字・小字もちょっと違ったのではないのでしょうか。

平田 あゝそうでしょうね。

坂本 例えば市町村の税務課なんかに行って大字・小字を調べたいのでコピーをとりますと、何年のですかと、よく聞かれます。昭和30年頃でいいと言うたら、そういうことで台帳を出してくる。年度によって違うのかなと思ったり、変化して来たのかなと思うのですけど。

平田 それはこういうことじゃないのでしょうか。例えば戦争中に隣組というのを作りましたね。それから戦後は公民館。隣組のよび名とか公民館のよび名が新しく創られて来たりするわけです。土地台帳にある公簿上の名前と別の組織から出来て来るよび名は、一致しないものが多いのです。そういうものあるのじゃないですか。

納 そのことは長く感じています。草牟田にある城西公民館。あそこは、どうしても草牟田なんですね。川のこっちは城西でしょう。城西というのは新しく出来た団地なんですけどね。城西公民館というのは初めはどうしても理解出来なかった。

もう一つ、音というものはですね、耳で聞いた場合と実際の音とは違う。いわゆる訛り、音の変化が相当昔からあったらしい。というのは、どの風土記

だったか憶えてませんが、以前はこう言っていたけど訛ってこうなった(よこなまれる)というのがよく出て来るのです。音の聞き方からそういうふうに変ったのじゃないか。それから今日の資料にも出ていますが沖縄県の久米島。久米島は元々米島ではなかったか、と云われています。沖縄では「オ」の音が「ウ」に変化する。それでコがクになって、メがミに変化して「クミ」になる。メがミに変化するの東北地方にもありますね。音の変化や訛りで、こういうふうに変化したのじゃないかなと、私なりの考えを持っているのですが。

坂本 話は余談になりますが、今のことにも関連が出て来ると思うのだけど、例えば先程話に出て来た草牟田。草牟田というのは手話でこうします。(手話を実演)。これは「鶴・尾」ということ。鶴です。聴覚障害者の方々に60~70年配の方々は草牟田という手話がないのです。それで全部鶴・尾とします。もう一つ、騎射場という手話はこうします。汽車と踏切かなんかで遮断機があったということです。草の手話は、これです。しかしこうしないで、鶴尾とします。だから時代・時代で地名も変わる、と

平田 他にありませんか。それでは今日の締めくくりとして米の話に関連して私が今考えていることを話します。(大ざっぱな図を板書して)これが海で山奥から川が流れます。米は田圃で作るわけですから、川の流域に出来るわけです。川の利用の仕方を考えてみると、河口に近い、大きな帆船が泊れる所には、京泊のような港が出来ます。それから満潮時に遡れる所まで、例えば川内でいうと渡唐口(トクケ)あたりまで昔は遡っていたわけですが、帆船が。それから上流は荷舟に積み替えて漕いで行く。それがどこまで、宮之城あたりまで行ったか、入来の舟瀬橋あたりまで行ったか。そして帆船が往来する所それから漕いで行くような舟が遡る所に「町」

が出来るはずだ、と。そういう所には「市」という地名が出て来るはずである。

それから米を作るためには川の水を引いて来なければならないから、必ず堰が造られる。「井手」という地名が出て来る。一つの川の流域に一つの大字とか村が出来ていく。そこに、いくつかの井手が造られていく。上流の方から順番に井手を確認して、水神碑などを見ていけば、その地域の開かれて来た歴史の見当が付く。そして、田圃とか米(珍)という地名と結び付けて考えたら面白い考察が出来るのではないか。上流から中流にかけて、灌漑と水田と稲作、そういう見地で流域の歴史をみていけるのではないか。

上流は山道をあがって行けますが、昔は下流域ではそう簡単に渡れなかったはずですから、渡り易い所だけ道が通っていた。そうすると、上流の方に、尾根に出易い所に、古い時代の道が出て来るのではないかと。そんなことを最近考えております。

大きな地域、例えば国分市というような膨大な地域を歴史の調査対象とするのではなくて、国分市の川内(加分)とか川原(加川)とか、小さな範囲で突込んでいけば、どこまで舟が遡って来たとか、どこに堰があって田圃が開かれて来たとか、上流には古い道がどう通っていたか、と。そういうことが浮き彫り出来るのではないかなと思います。「米」の付く地名をそういうものにまで結び付けられたら面白くなると思います。

下流域の広い田圃が開かれるのは、排水の水路が十分出来る土木技術がなければ海岸平野は開けないわけですから、江戸時代後半以降の歴史展開になるのじゃないかと考えます。それぞれの場所によって結び付いた地名もあるのだらうと考えますが、「米」の付く地名は上流・中流域に多いのではないかなと思います。そういうふうに見ていけば、地名研究というのは面白いのではないのでしょうか。

時間が参りましたので、これで終わります。

米のつく地名—ヨネとコメについて

(1) 小字名

<ヨネ>		<コメ>	
米山	ヨネヤマ	米ノ津	コメノツ 出水市
米置	ヨネオキ	米山	コメヤマ 高尾野町柴引
米増	ヨネマス	米ノ山	コメノヤマ 高尾野町江内
米山	ヨネヤマ	米ノ山	コメノヤマ 阿久根市脇本
米ヶ迫	ヨネガサコ	米次	コメツギ 阿久根市山下
米丸	ヨネマル	米之山	コメノヤマ 東町川床
米山	ヨネヤマ	米山	コメヤマ 東町鷹巣
米永	ヨネナガ	米山	コメヤマ 東町獅子島
米山	ヨネヤマ	米山平	コメヤマピラ長島町指江
米原	ヨネバル	米ヶ野	コメガノ 栗野町恒次
米迫	ヨネサコ	米山	コメヤマ 入来町浦之名
米山口	ヨネヤマグチ	米山	コメヤマ 宮之城町二渡
米山	ヨネヤマ	米山	コメヤマ 宮之城町久富木
米重	ヨネシゲ	米ノ山	コメノヤマ 鶴田町鶴田
米山	ヨネヤマ	米ノ山	コメノヤマ 祁答院町黒木
米石原	ヨネイシバイ	米山	コメヤマ 祁答院町上手
米山	ヨネヤマ	米山段	コメヤマダン大隅町中之内
米山平	ヨネヤマ	米ノ山	コメノヤマ 郡山町厚地
米山	ヨネヤマ	米山片	コメヤマカタ吹上町和田
前(後)	米楠ヨネクス	米山	コメヤマ 金峰町白川
米山平	ヨネヤマヒラ	米山	コメヤマ 知覧町東別府
米山	ヨネヤマ	米山	コメヤマ 大浦町大浦
米山	ヨネヤマ	米山	コメヤマ 加世田市武田
米山西(東)	ヨネヤマ	米山	コメヤマ 加世田市津貫
米山	ヨネヤマ	米山	コメヤマ 加世田市小湊
米山	ヨネヤマ	米島	コメジマ 笠沙町片浦
米山谷	ヨネヤマ	米山	コメヤマ 笠沙町赤生木
西米山	ヨネヤマ	米山	コメヤマ 笠沙町赤生木
米満	ヨネミツ	米山谷	ヨネヤマ 枕崎市別府
米満山野西	ヨネミツ	西米山	ヨネヤマ 枕崎市別府
		米満	ヨネミツ 大崎町野方
		米満山野西	ヨネミツ 額娃町上別府
		米ノ山	コメノヤマ 喜入町前之浜

米倉	ヨネクラ	喜入町生見
米ヶ岡	ヨネガオカ	中種子町坂井
米川滝	ヨネカワタキ	徳之島町神之嶺
米当	ヨネアタリ	徳之島町母間
米浜		天城町与名間
米当	ヨネアタリ	徳之島町母間
米浜		天城町与名間
米田	ヨネダ	(宮) 国富町須志田
米山	ヨネヤマ	(宮) 日南市犬窪

<メ>	
久米田	宇検村阿室
須米田	スメデン 大口市青木
八女	マメ 宮之城町屋地
八女	マメ 薩摩町求名
留米迫	クルメサコ 東町山門野
久留米迫	クルメザコ 日吉町日置

<不明>	
働米木迫	指宿市西方
米山	川辺町清水
米山	川辺町野間
米山	川辺町神殿
米山	川辺町上山田
米永	川辺町平山
米ヶ野	川辺町高田
米花	(宮) 北郷町宇納間

(2) イネ、タネ、ヨネ、コメ

ア、柳田国男「瑞穂の国について」

・イネーヨネーコメ

・コメはコモル、コムル等との語と音との構成が近く、稲の神の祭と関係があったか。

イ、・稲村 鹿児島市小山田、大隅町岩川 ・稲子 輝北町市成

稲倉 大隅町中之内

(3) よね(米)

・「高橋殿が世が世の時は、白金伸ばしてたすきにして、黄金の升でヨネはか

米窪	コメクボ	天城町天城
井米	イゴメ	宇検村湯湾
小米	フグミ	知名町知名
阿美川米通	アミゴコメ	オドリ和泊町大城
山米		笠沙町赤生木
京米ノ尻(崎)		知覧町西元
焼米田		宮之城町時吉
真米		牧園町宿窪田
真米		(宮) 高鍋町持田

<メ>	
大次米田	オオヒトツデン 始良町北山
次米田	ヒトツデン 始良町下名
次米田	ヒトツデン 始良町寺師
次米田	ヒトツデン 蒲生町白男
次米田(頭)	ジメタ 牧園町持松
次米田	ジメタ 加治木町西別府
次米田	ツギメタ 樋脇町塔ノ原
次米田	ジメタ 宮之城町二渡
次米田	？ 末吉町諏訪方
次米田	ジメダ (宮) 南郷町榎原乙
米次田	コメツキデン (宮) えびの市浦

米下  
米丸  
米

る。」(金峰町高橋の太鼓踊り)

(4) ヨネヤマ (米山) 「一説に、飯盛山、飯塚などと同じく『飯盛り上げたような丸い山』」 (「地名の語源」角川小辞典)

(5) コメカミ

- ア、・米 嚙 コメカミ 栗野町稲葉崎
- ・北(南)米神 コメカミ 吹上町中之里
- ・上米神 コメカン 鹿児島市吉野
- ・下米カン 鹿児島市吉野
- ・米カミ石 開聞町仙田
- イ、・米 上 コメカミ (宮)南郷町

「日向地誌」では、米嚙村。

「小丸川の谷に面し、自然に放置した意の『コメヤマ(籠山)』の上に立地して『コメカミ(籠上)』と思われる。」

(「日本地名語源事典」吉田茂樹著)

(6) 米原

- ア、・米 原 ヨネバル 横川町下ノ
- イ、・米 原 ヨナバル (熊)菊池市、菊鹿村

「ヨナバル(米原・与那原) 熊本県から沖縄県にかけて散見され、『ヨナハラ(砂原)』で、砂地の平坦な土地を言うのであろう。」「与那、与奈、米」 (「日本地名語源事典」吉田茂樹著)

「ヨネ(与根、米)・ヨナ(砂、灰)の転化した地名。

(「日本地名語源事典」吉田茂樹著)

「ヨナは日本海側に広く分布する地名で砂地のこと」

(「古代地名語源辞典」東京堂)

「宮良当壮はいう。ヨナグニとは米島(ヨナジマ)の意。粟国島のアワグニの意。」 (民族学研究18巻4号)

- ・与名波、与名原・・・知名町赤嶺
- ・ヨナハ・・・知名町余多
- ・与名間・・・天城町天城

ウ、・米 原 マイバラ(ハラ) 滋賀県米原市

「『マエハラ(舞原)』の転化。丘陵地に沿って原野が大きくめぐっている所」 (「日本地名語源事典」吉田茂樹著)

「マエ(前)・ハラ(原)の転か。あるいは瑞祥地名か。」

(「市町村名語源辞典」東京堂)

(7) 合併時の新村名 (「熊本県の地名」日本歴史地名大系)

- ア、・米生村 ヨネオムラ 明治8~明治22年 (熊)清和村(現在)

「地名の由来は、合併による新村名決定の際、米がよく収穫できることを願い、米の生じる地の意を地名とした。」

・米富村 ヨネトミムラ 明治22~30年 (熊)玉名市・南関町(現在) 「村名は郡内一の良米の産地であることにちなむ。」

・米山村 コメノヤマムラ (熊)阿蘇郡南小国町(現在) 「水田から多くの米が山のようにとれるためと伝える。」

・米塚村 ヨネツカムラ (熊)鹿本郡植木町米塚

明治7年加村と慈恩寺村と合併時の新村名。米の山を築くという瑞祥地名

イ、・米迫村 ヨネサコムラ (熊)阿蘇郡蘇陽町米迫(現在)

米山村と大迫村が合併

(8) 米島 コメジマ 笠沙町片浦

「古くは鷗島と呼ばれ鷗が多く鳥糞が白く積むことがあったと伝えられる。米島の由来は「鷗島」、「久米島」、「米島」と音の類似性から文字が変化したものと地元識者は説明する。」(鹿児島県地名大辞典)

(9) 米の流通等

ア、米ノ津 コメノツ 出水市 北薩米の集散地

イ、米倉 ヨネクラ 喜入町生見 (喜入町郷土誌)

「給黎院の倉庫・・・地名から推して米倉にあったのではないか。」

ウ、米屋町 コメヤマチ (熊)熊本市米屋町

加藤清正の城下町建設による。米穀問屋・米小売商が軒を連ねる。

(10) 伝説、俗信

ア、米塚 コメツカ (熊)阿蘇郡 火口丘の山

頂上のくぼみは、阿蘇開拓の神・建磐竜命が米塚の米を手ですくったためにできたという。

イ、米原 ヨナバル (熊)菊池市、菊鹿村

米原長者・・・貧しい一人の若者の所に京から姫が訪ねてきた。「神のお告げによると、捜し求めていた夫はあなたです。どうかそばに。」と黄金千両を差し出す。二人は広い土地を求めてここに住む。長者の楽しみは三千町の田植えをたったの一日ですませることだったが。」

ウ、米山 ヨネヤマ 始良町東餅田

米山薬師 「越後米山は薬師の霊場。此岩岡、宛も越後の米山に似たりとて此像を安置す」 疱瘡水 (三国名勝図会)

エ、米搗峠 コメツキトウゲ (熊)鹿本郡植木町

「此所ニテ地ニ臥シテ耳ヲ傾ケテ聞クニ土中ニ米ヲ舂ク音アリ所以ヲ知ラス 土俗異事也トス」 (肥後国誌)

(11) 次米田について



### 瑞穂國について

本日のお祝ひに、何かめでたく且つ珍らしい話題をと心がけたが、どれも是もまだ半分で、長たらしい割りに纏まりが悪い。他日もう一度補足をするつもりで、この稲の話をして見る。つい数日前に、群馬縣の一青年から、斯ういふ葉書を受取つた。曰く、麥粟黍稗等の穀物は、草も其實も共に一つの語で呼ばれるのに、どうして稲ばかりは、特に穀粒をヨメと申しますかといふ一質問である。

之に對して自分は考へ込んでしまつた。日本には古い言葉が色々残つて居て、誰がどうして其語を用ひ始めたか、わからぬといふものは幾らでもある。稲米二つの名があるなども、たゞ偶然であらうと言つてもすむ。この答へが出来なくても、少しもさかしいことは無い。たゞ私も青年の頃から、日本の農業史を知らうと思ひ、殊にこの二三年は米作の方面より、日本人の精神生活の變遷を尋ねて行かうと心がけて居りながら、斯んなありふれた一つの事實、それも或は何か隠れた意味が有るかも知れないものを、丸々氣が付かずに過ぎて居たのはどうしたことであらうか。やつと今頃になつて知つたのは遅過ぎだが、つまり人間の知らずに居ることは存外に多くあり、又手近かに在り、従つて吾々の新たに學び得ることが、つい眼のまきにも在るのだつたといふことが、少なからず老後の業しみを豊かにする。それで其通りを返信に書き、自分も是から改めて考へて見るが、そちらでも是を時々思ひ出して、注意して行くやう

にしたまへと答へて置いた。小さな何でもない問題のやうではあるが、ともかくも今まで蓋をあけたことの無い稲が私には一種の強感がある。本日の聴取諸君にも、共に考へて貰つて貰ふ価値があるかと思ふ。

### 二

普通に斯ういふ言葉の問題を考へるには、先づ用法の變化を跡づけるのが頭苦であらうが、ヨメが今日の如く稻を指すに使はれることになつたのは、ヨメ・ヨネ・ヨネの二つには無い。いつきりと境は立上られぬ迄、ともかくも中古の或時代以前は、歌文にも口語にも、ヨネ・ヨネといふ語を用ひ居たことは證明し得られる。ヨネは明かにイネと同じ系の語であつて、少しく形がさかへてヨネといふ語を用ひ居たことは證明し得られる。ヨネは明かにイネと同じヨメが其代りに、寸刻も我々の念頭を離れぬ日常語になつてしまつた。新たに日本に流行して來た言葉ならば、斯ういふ例を決して珍らしくはないが、是が又上古以來、日本によく知られて居た語で、現に推古天皇記の或語の

といふ一語(ヨネ)の意味はヨネ(ヨネ)といふきりと汲み取れぬながら、既にあの頃の語り草だつたとさへ傳へられて居る。つと多くの實例を比へて見た上でないに斷定は許されないが、ヨメ・ヨネ二つの語が併存して居た時代には、一方のみあまり使はれないヨメといふ語に、何か隠れた特殊の意味が伴なう一居たのを、後世の人はずう忘れてしまつて、やたらにヨメばかりを口にするやうになつたのは無いかと、先づ私は想像して見るのである。

ヨネ(ヨネ)本土と同じ様に稲を作り、同じ言葉、同じ感じを以て、神を祭つて居たかと思はれる南方の島々、今日不幸にも琉球群島の各島を以て、隔離せられ一語の海上の隣人たちが、果してどういふ頃にこの問題に對處して居たらうか

を先づ尋ねて見る。島々は其位置交通のちがひに由つて、言語状態にそれらの異同はあるけれども、大體に於て水

6画〔米〕

- |                                  |  |
|----------------------------------|--|
| 竹谷川 たけだにがわ 岡山県・旭川水系 (1級)         | 川水系                                    |
| 竹谷川 たけたにがわ 愛媛県・澁川水系 (1級)         | 04646 米之川 こめのがわ 三重県・淀川水系 (1級)          |
| 竹谷川 たけたにがわ 愛媛県・関川水系 (2級)         | 米之津川 こめのつがわ 鹿児島県・米之津川水系 (2級)           |
| 04635 竹松川 たけまつがわ 長野県・天竜川水系 (1級)  | 04647 米内川 よないがわ 岩手県・北上川水系 (1級)         |
| 04636 竹林川 たけばやしがわ 宮城県・鳴瀬川水系 (1級) | 04648 米代川 よねしろがわ 岩手県・秋田県・米代川水系 (1級)    |
| 04637 竹迫川 たけさこがわ 熊本県・竹迫川水系       | 04649 米田川 まいたがわ 岩手県・米田川水系 (2級)         |
| 04638 竹保川 たけやすがわ 広島県・黒瀬川水系 (2級)  | 米田川 まいたがわ 岩手県・新井田川水系                   |
| 04639 竹原川 たけはらがわ 岐阜県・木曾川水系 (1級)  | 米田川 よねだがわ 京都府・伊佐津川水系 (2級)              |
| 竹原川 たけわらがわ 兵庫県・洲本川水系 (2級)        | 米田川 よねだがわ 岡山県・旭川水系                     |
| 竹原川 たけはらがわ 高知県・澁川水系 (1級)         | 米田川 よねだがわ 熊本県・湯の浦川水系 (2級)              |
| 04640 竹島川 たけしまがわ 高知県・澁川水系 (1級)   | 04650 米白川 (柳) よねしろがわ 岩手県・秋田県・米代川水系の米代川 |
| 竹島川 たけしまがわ 高知県・竹島川水系 (2級)        | 04651 米地川 めじがわ 兵庫県・円山川水系 (1級)          |
| 04641 竹馬川 ちくまがわ 福岡県・竹馬川水系 (2級)   | 04652 米多比川 めたびがわ 福岡県・大根川水系 (2級)        |
| 04642 竹野川 たけのがわ 京都府・竹野川水系 (2級)   | 04653 米々谷下谷川 めめたにしもだにがわ 京都府・澁川水系       |
| 竹野川 たけのがわ 兵庫県・竹野川水系 (2級)         | 04654 米沢川 よねざわがわ 山形県・最上川水系 (1級)        |
| 04643 竹森川 たけもりがわ 山梨県・富士川水系 (1級)  | 米沢川 よねざわがわ 新潟県・信濃川水系 (1級)              |
|                                  | 米沢川 よねざわがわ 静岡県・天竜川水系 (1級)              |
|                                  | 04655 米町川 こんまちがわ 石川県・米町川水系 (2級)        |
| 【米】                              | 04656 米良川 めらがわ 大分県・大分川水系 (1級)          |
| 04644 米山川 よねやまがわ 新潟県・柿崎川水系 (2級)  | 04657 米里川 よねさとがわ 北海道・石狩川水系 (1級)        |
| 米山川 こめやまがわ 広島県・沼田川水系             | 04658 米津川 よねずがわ 愛媛県・駄川水系 (1級)          |
| 米山川 よねやまがわ 大分県・大野川水系 (1級)        | 04659 米倉の沢川 よねくらのさわがわ 北海道・布止川水系        |
| 米山寺川 よねやまでらがわ 新潟県・柿崎川水系 (2級)     | 04660 米原川 よなばるがわ 熊本県・菊池川水系             |
| 04645 米川 よねがわ 福島県・阿武隈川水系 (1級)    | 米原川 よなばるがわ 沖縄県・天願川水系                   |
| 米川 よねがわ 長野県・天竜川水系 (1級)           | 04661 米通川 こめどおりがわ 岩手県・北上川水系            |
| 米川 よねがわ 滋賀県・澁川水系 (1級)            | 04662 米野川 よねのがわ 千葉県・利根川水系              |
| 米川 よねがわ 奈良県・大和川水系 (1級)           | 04663 米渡尾川 めぐおがわ 熊本県・菊池川水系             |
| 米川 よねがわ 鳥取県・斐伊川水系 (1級)           |  |
| 米川内川 よねかわちがわ 宮崎県・大淀川水系           | 04664 米無川 こめなしがわ 山梨県・富士川水系             |



り、然るに朝鮮の君臣始て金光の説を詳に聞て和議成ると見れば和議の成れる事は全く吾藩生捕の者に由れり、兩國通信の成るは大事なり其成りがたき和議の本藩生捕の者より成りたるは奇なりといふべし、因て其事跡を具さに載す。

米山藥師堂 劉倉村にあり、官岡の上に堂宇を構へたり、此岡平地より、突然として起り、其路羊腸として登るを二町餘なるべし、岡頂に平地一畦あり、岡頂より眺望すれば、山野より海上に至り、數十里の間、一眸の内、歸して、風景絶勝なり、此堂總禪寺の南に隣近して、總禪寺より管轄す、總禪寺所藏の藥師由緒記に曰、此藥師は總禪寺開山起宗和尚の發願にて建立なり、起宗和尚諸國遍参の時、越後米山は、藥師の靈場なる故、百日參籠ありしが、時に白髮の一老翁あり、同じく參籠す、一日起宗に謂て曰、我は是佛匠なり、師藥師に歸仰す、因て藥師像を造て是を與へんと、起宗大に喜びて、是を請ふ、不日にして、其老翁藥師の像を捧げ來て、起宗に與ふ、六寸六分の座像なり、且告て曰、他日師故郷へ歸らば、速に一山を建立して、諸人の苦惱を救へと、起宗其像の凡ならざるを知て、老人の姓名を問ふに、終に答へずして去る、其行處を知らず、起宗是を異とし、晝夜其身を離さずして、是を敬禮す、其後起宗京師に至り、其像を佛工に示す、佛工驚て曰、此像人作に非ず、去存の末頃、一老人あり、此像を捧げて、此三條衢に來りて、我に見せしなりと、起宗其去存の末頃といへる、月日を考ふに、老人の藥師を捧て米山に來りし時なり、起宗まなす、是を異とす、起宗本藩に歸る、此岩岡、宛も越後の米山に似たりとて、此像を安置す、呼て米山藥師と號せり、爾來種

# 地名研究会報

第55号

平成9年12月7日

鹿児島地名研究会

於教職員互助組合会館和室

I. 第55回例会 平成8年12月1日(日)

(出会者) 青柳俊二・池田 純・大田照夫・納 栄蔵・小山田稔・坂本 誠・平田信芳・与倉辰夫  
(8名)

II. 甕藩名勝考読会 P.190 ~ P.193

(問題となった地名および事項) 霧島の噴火、忍穂井、祓川・祓戸、高千穂、九重・久住・クジフル、逆鋒、バックナンバーなど、饒速日命と物部氏

## 霧島の噴火

平田 今日読んだところでは、臼杵の方の高千穂はちっほけな岡で、天孫降臨の高千穂はこちだと白尾国柱が力説しております。それと、狭野神社は神武天皇が生まれた所だ、と。それから霧島の噴火が三度ほどあげてあるようです。霧島の噴火などはきちっと年表で抑えて桜島の噴火と比較すれば法則性が見出せるかも知れませんね。霧島が噴くときは桜島がおとなしくて、桜島が噴くときには霧島がおとなしい、と。そういうことを繰り返している火山の歴史が明らかになるのじゃないでしょうか。

## 忍穂井川

平田 最初の忍穂井・忍穂井川ですが、塩井川・汐入川というのは沢山あるのですね。汐入(しほいり)、汐の入って来る川、それに接頭語「御」を付けて御汐入：忍穂井になっているだけのことだと思うのです。ニニギニミコトを祀ってある所には必ず忍穂井川があるという説明をしていますが、確か新田神社の前にも汐入川があります。汐入川のことを丁寧に忍穂井川と言ってるだけのことだと思うのです。鹿児島県には汐の入って来る川というのは、どこにもあるわけです。汐入・塩入という地名はそういう所です。

## 祓川・祓戸

納 汐入とは関係はないと思うんですけどね。祓川という川の名前があるのですね。お祓いをする川。あれは、その近所にお祓いをするための施設とか神社とか、そういう何かがあったのでしょうか。

平田 祓いをした所だから祓川なんでしょうね。

納 鹿児島県の中で私が気が付いたのは、鹿屋にありますね。他県にも、そういうのがあるんじゃないかね。

平田 あると思いますよ。

納 何か、祓いをした所かと思って。

平田 それはそうでしょうね。禊ぎとか祓いとかでしょうから。結局、全国の祓川を拾いあげることが先決でしょうね。(後記：山形・三重・福岡・宮崎県などにある)。それと、国分の守公神社が明治になってから「祓戸神社」になっています。祓う場所：祓戸という地名もわりと新しく付けられるのですね。

池田 祓戸は明治になってからの命名ですか。

平田 祓戸神社はそうです。

納 ノリトの中に、祓戸の、というのが。

小山田 祓戸大神たち。

納 櫛ヶ原は、この前やったな。

小山田 それ(櫛ヶ原)に続いて祓戸大神です。

平田 そうですね。

## 高千穂

納 宮崎県の高千穂、あそこは平たい畑です。下の方に行くと、クシフル神社があります。神社の裏側は、まんまるい形をした丸味をおびた山になります。土を盛ったような山です。下から上って行くのは、坂が急です。しかし、ごつごつした山があるということから言えば、白尾国柱のいうように鹿児島の高千穂が該当するだろうとは思いますが。

平田 高千穂の人は、そのように言ってるのでしょうけど。宮崎の場合、智舗郷というのが風土記逸文にあるのです。ニニギノミコトが霧にまきこまれて道に迷った時、杖を撒いたら霧がはれた、と。そして、穂を積みあげたら山のようになって沢山の種が積もった。それで千穂(智舗)という地名が付いたという解説なのです。確かに、杖や穂を積みあげたらオッパイ型になりますからね。沢山の穂を積みあげたという意味が千穂だと思えるのです。また高乳穂山という地名が青森県にあるのです。高乳穂。グラマーなオッパイを連想したのです。昔の人は、母親の乳房で子供は育ったのでしょから、オッパイを神聖視したと思うのです。

## 九重・久住・クジフル

青柳 大分県に九重山というのがあるでしょう。九重というのは、どういう形をもとに名前が付くのですか。また九重は、クジフルと関係があるような気はするのですけど。

坂本 九重のことじゃないのですか。

小山田 二通りあるのです。町名も九重と――

平田 あゝ、九重と久住ですか。

小山田 九重と久住との両方。

青柳 あゝ、二つ。

与倉 久住というのは？

小山田 普通、登山する人が使う場合は九重岳。町名は九重町と書いて「ココノエマチ」と仮名を振ってあります。九重町の方がいろいろと観光宣伝

をしとるようです。普通はクジュウと言えば九重を指すのですけど、もともとは久住。久住の方が名前としては古いらしいです。クジュウサンと言えば久住山です。九重連山はココノエ。

平田 九重連山(くじゅうれんざん)、なるほどね。

小山田 そういうふう聞いておりますけど。

平田 川内にも、久住という地名がありますね。

小山田 漢字を当てているかも知れんのです。かつて連山の所を天孫降臨の地というか、神聖な場所というか、そんな考え方はどこでもあったのじゃないですか。

平田 九重は宮中の懸詞ですからね。神聖な場所を意味するのでしょうか。

与倉 「クシフル」というのは朝鮮語に由来している、と。

平田 それは、よく云われますね。

## 逆鋒

与倉 この前の地名研究会でも出たのですが、高千穂峰の穂先ですね。

平田 あゝ、逆鋒。

与倉 えゝ、逆鋒。私は鹿商出身なんですけど、国漢の先生に川畑という方が居られました。40才になっていましたかね。私たちが若かったし、あれは俺の祖父さんが作ったのだ、という。戦時中だったので、言うなと口止めをして話をされたことがあるのです。

平田 ほう。

与倉 そうかも知れないけど、その時はびっくりしたことをまだ憶えています。

平田 あれはよく引っこ抜かれますね。坂本竜馬とおりが登って引っこ抜いたのは有名です。これは七高の話、東京七高会の会報25号に七高に高千穂会というのがあったと書いてあります。どうということかという、寮で新入生を歓迎するために高千穂登山をするのです。七高生のことですから、

頂上でストームをやるわけですよ。その時に元気のよい1年生が調子に乗って逆鋒を引っこ抜き、担いでストームをやった。そしてその男は落第した。七高はよく落第させていましたから。毎年の登山で元気よく逆鋒を引っこ抜いて担いだのは、必ず落第したのだそうです(笑い)。それから落第生のグループを高千穂会というようになったのだそうです。よく引き抜かれたのではないですか。何代も作り替えるというのは、あり得るわけでしょう。持って帰る者も居たでしょうからね。

坂本 その可能性があるのでしょうか。単人町の人でしたが、祖父さんが作ったという人もいた。

小山田 やっぱり伝承があるんですね。

坂本 初めて作ったとか、あったのを作り替えたとか。祖父さんといえば、相当古い時代になりますけど。

平田 作り替えているんでしょうね、何回も。

与倉 びっくりしたんですよ、子供でしたから。

平田 そうでしょう。神様だと思込んでいましたからね。

与倉 授業中に、言うなというて、国語の先生でした。しかも昭和17年の頃でした。

平田 昔の先生というのは大正デモクラシーの洗礼を受けていますから、わりに自由な批判的なことを言っていましたよね。そうですね、五・一五、二・二六以後、だいぶ厳しくなって皆言わなくなったのですよ。私が中学に入ったのは昭和18年ですが、まだ自由なことをいう先生がいました。しかし戦雲急を告げて皆に赤紙が来るようになって、皆、黙り出したのです。昔の人はわりに自由にものを言っていたのじゃないですか。

## バックナンバーのことなど

平田 他にありませんか。なければ今日配ったプリントのことを説明ときましよう。いつもの通り「動物に由来する地名」を3枚入れてあります。

それから例会でどんなテーマを扱ったか、1回から50回まで整理しました。第26表と書いてありますがこれは実は明けて3月、春苑堂が出している「かごしま文庫」で、私の本が出て来ます。タイトルは『地名が語る鹿児島県の歴史』というものです。鹿児島県の歴史と名乗って書いたのは私より以前には原口虎雄さんぐらいだと思います。高等学校の教師とか多くの人間が分担して鹿児島県の歴史を書いたのはありますが、一人で書いて鹿児島県の歴史と称したのは原口先生の次は私で二番目だと思います。その本のために作成した表です。鹿児島地名研究会の地名研究の流れを紹介するためにまとめた表です。それをコピーして来ました。

今日、お渡ししたのは会報51号です。本来は、今日しゃべったのは次の例会でプリントして渡すということで始めたのですが、途中で2回、私が入院したために3回おくれになっています。暇になったら追いつこうと思っているのですが、なかなか暇になりません。なんとか頑張るって追いつきたいと思えます。

バックナンバーも1号から残っております。私は車を持ちませんので、暖かくなったら誰かに加勢をもらってここに並べようと思えます。またすぐでも欲しい方は私の家に来られた差しあげます。

50回例会までのテーマを一覧表にしました。50回のうち12回、私がしゃべっています。結局¼ぐらい年に一回はしゃべった形になっています。私が説明するのは発表予定者に故障が起きた場合に飛び込みです。今日は肥後先生にお願いしてあったのですが、体調が悪いとのことで急拠代った次第です。私が話す時は、誰かが故障だと思って下さい。

この会も老人が自然と増え、多くの方が亡くなりつつあります。若手を育てなければいけないのですが、また早く若手に引き継ぎたいのですが、なかなか見つかりません。

## 饒速日命・物部氏

平田 192ページの上段の真ん中あたりに「クシフル峯、亦速日別」とあります。熊襲が速日別だったかな？青柳さん。（後記：熊曾国は建日別）

青柳 速日というのは神武天皇が東征して行く時に畿内を占領していた人に関係するのじゃないですか。速日峰に天降っていた人。何という人ですか？

平田 饒速日命（ニハヤヒノミコ）。

青柳 その関係じゃないですか。

平田 なるほどね。

青柳 「速日」も伝承があるのではないですか。この歌では、皇孫に入っているでしょう。速日というのは人の名前ですか？建速日という人がいたのですか？

平田 建速日、聞いたことがないな。

青柳 そうですか。物部氏の祖先というか、そういう話を谷川健一さんの本で取扱ったのがあったでしょう。（後記：饒速日命が物部氏の祖）

平田 谷川さんの本はあまり読んでいないので知りません。今、物部氏の話が出ましたが、物部と

## 稲荷川流域の地名

### 鹿児島郡・谿山郡

私は上町や鹿児島市内のことをテーマに話をした時は、プリントをノートに貼っておくのです。そうしたらプリントを紛失することがないわけです。今日のテーマも実は8月に清水町の老人たちに説明したプリントを、日付を変えたら今日の話のプリントになります。発表予定者に故障があった時、すぐプリントを準備することが出来ます。こういうやり方をされると資料がなくなりませんし、またこれを見ながらまとめることも出来ます。郷土史の勉強はこういうことの積み上げなのです。

今日は、稲荷川だけでなく、鹿児島市にどうい

いう地名を全国で探すと、いくつか出て来ると思います。それと、鹿児島県の神社の中で、桜島とか志布志とか長島に十五社神社というのがありますが、これが物部氏と関係があるようなことが書いてあります。十五社神社というのを全国的に調べるのも、物部氏を追求する一つの方法だと思います。それとこの前から問題になっている住吉神社は大伴氏と結び付くのではないかと思います。神社の整理というのはおこなわれています。神道の方ばかりが強調されて神社の性格がどんなものであったかという歴史的な分析が足りないような気がします。興味を持たれた方は、住吉神社とか十五社神社の全国分布と大伴・物部とのつながりを求められたら、何か面白いことが見付かるのではないかと思います。これは私の直感です。

物部から「もののふ」という武士の呼び名が出て来るわけです。軍人に賜わりたる勅諭には「大伴・物部の強者共を率い」というのが昔ありましたから（笑い）。大伴と物部は全国的に広がっていると思います。前半はこれくらいにして休みましょう。

### 平田信芳

地名があったのかという話から入っていきます。

10世紀の中頃に『和名抄』が出来ます。源順が書いた本です。それに鹿児島郡には、都万(つま)郷と読むのでしょうか。その次、在次郷は何と読むのかわかりません。その次の安薩郷、アサトと読むのでしょうか。読み方が分からないというものが正しいと思います。

「在」というのを「有」という字に変えたら、ウと読めるわけです。「次」という字は、スキと読む場合がありますから、そのように操作すると「ウスキ」という読み方が出て来るのですが、それはちょっと先走り。宇宿(うすき)は、近世までは谿山郡です

から、鹿児島郡の範囲ではないのです。しかし、古代では宇宿あたりまで谿山郡であったのか、鹿児島郡であったのか、そこまではちょっと確信が持てません。在次郷が有次郷の誤記であれば、宇宿と解釈し易くなるのです。今後の考古資料の登場をまたねばなりません。

谿山郡には二郷あります。谷山郷と恐らく久佐郷(くさう)と読むのでしょうか。草野貝塚が近くにありませんから。それから『三国名勝図会』の解説では、山田郷と伊佐智佐郷というのがあります。伊佐智佐神社というのが谷山郷の惣廟ですから、久佐郷というのは智佐郷の間違いかという説も出て来るとおもいます。

それは置いておきまして、これら五つの郷に対応する川を数えあげてみると精木川(おきき)、現在は稲荷川という。それから甲突川、田上川、永田川、和田川。五つの川の流域があるわけです。従って、五つの川の流域に上記の五つの郷に対応するのではないか、ということまでは考えられます。それぞれの地域で住居址群などが出たり、墨書土器が出て来ると、どの流域が何郷であるということが明らかになって来るだろうと思います。

しかし鹿児島市の方々は、開発・都会づくりに一生懸命で、地面の下のことはほとんどお考えではありません。そういう歴史を明らかにすることも大事だと思うのです。鹿児島は七十七万石の城下町ですから、とくに上町の地下はすべて遺跡だと思わなきゃいけないのですけれども、ほとんど調査されません。鹿児島に来た人たちは気の毒そうな顔をしながら此処は調査したのですかとすぐ聞きます。

### 惣廟(総廟)

『三国名勝図会』を見ますと、郷ごとに神社が解説してあります。その最初に必ず惣廟というのがあげてあります。最も大事な神社ですね。惣廟の一覧というのも今度出て来る「かごしま文庫」に掲載

しておきました。今日配ったのはそのコピーです。鹿児島県の惣廟の中で一番多いのは八幡神社です。八幡神社のある所は古代の官衙があった所だと見込を付けることが出来る。例えば大隅正八幡は大隅国府の所在地にあるし、新田八幡のある川内に薩摩国府があります。蒲生八幡は蒲生駅に結びつきます。有名な八幡は、そういうものと関係があると考えてよいと考えます。

鹿児島県の惣廟を『三国名勝図会』から拾いあげると、荒田八幡が鹿児島県の惣廟、いや失礼、いにしへの惣廟が荒田八幡で、江戸時代の惣廟は諏訪神社：清水町にある諏訪神社になります。これは島津氏が入って来てから第一の地位についたものであって、それ以前は荒田八幡だったわけです。

それから一条神社。一之宮神社とも言います。一之宮も各地にある由緒の深い神社です。八幡神社が歴史に登場して来るのは、国分寺の鎮守神すなわち国分八幡という形で出て来るのが、大体9世紀の前半だと思えます。一之宮が各地に登場するのは11世紀ですから八幡の方が歴史的に古いわけです。鹿児島市の一之宮に「いにしへの惣廟」と言ったような説明はしてありません。

伊佐智佐神社は、谷山の惣廟です。これは和田にあります。その他に鹿児島市の神社で由緒深いのは草牟田の鹿児島工業高校の裏になりますが、鹿児島神社というのがあります。宇治瀬神社。あの神社は風格があります。『三国名勝図会』ではあまり注目されていません。しかし一之宮神社とか諏訪神社に比べると構えは堂々たるものです。荒田八幡は先程述べました。

現在神社で立派な建物をもっているのは、新車のお祓いをする神社と幼稚園や結婚式場などを経営する神社が収入があるだけで、あとは過疎が進んでいくと神社はさびれる一方じゃないかと思えます。護国神社系統：靖国系統の神社は氏子が多いと思

ますが田舎に行くと神社の姿はみじめなものです。

さて、先程述べた「郷」は確実な場所は判りませんが、そういう神社の近辺に求めればよいということです。荒田八幡から郡元一帯にかけて鹿児島郡の中心があったとみてよく、伊佐智佐神社の近辺に谿山郡の中心があったと考えてよいと思います。

#### 上町・下町

次に、明治12年に制定された鹿児島の範囲を眺めてみます。上町(かみまち)と下町(しもまち)。読みあげてみます。下町は、山下町(やまのまち)、易居町(やすいぢやう)それから生産町(せんだんぢやう)、六日町(むかしのまち)、築町(つきまち)、汐見町(しほみまち)、和泉町(わいづみまち)、金生町(かみうぢやう)、現在は「きんせいぢやう」と読んでいます。それから仲町(なかつまち)、呉服町(くれふくまち)、大黒町(おほくろまち)、堀江町(ほりえまち)、住吉町(すまきちやう)、船津町(ふねつまち)新町(しんまち)、松原通町(まつはらどおろまち)、これらを下町と言っています。上町は小川町(おがわまち)、和泉屋町(わいづみやちやう)、恵美須町(えみすまち)、ちょうど鹿児島駅付近の踏切あたりになります。車町(くるまぢやう)もそうですね。栄町(さかまち)もあの辺。栄町は鹿児島駅の向い側ですか。柳町(やなぎまち)、浜町(はままち)は鹿児島機関区があった所です。向江町(むかえまち)も同じ一帯です。

その他に新照院(しんしょういん)、薬師馬場(やくしりば)、鷹師馬場(たかしりば)、西田(にしだ)、平之馬場(ひらのば)、西千石町(にしせんごくちやう)、東千石町(ひがしせんごくちやう)、鍛冶屋町(かじやちやう)、山之口馬場(やまのくちば)、樋之口通(ひぎのくちどおろ)「たいくち」ですね。新屋敷(しんやしき)、下荒田(しもあはた)、高麗町(こままち)、上之園(うえのぞん)、冷水(ひやみず)、長田(ながた)、下竜尾(しもりゅうび)、上竜尾(かみりゅうび)、池之上(いけのうえ)鼓川(つづみがわ)、稲荷馬場(いなば)、清水馬場(しみずば)、春日小路町(かすがじちやう)、これらのおお半は下級武士が住んでいた所でしょうか。

上町・下町はいわゆる浦町が発展したものです。昔は野町・浦町とあって、町人たちの居住地、浦人

たちの居住地があったわけです。野町が発展して近代的な都市になったのは少なく、鹿児島県の場合はほとんど浦町が中心になって近代的都市に成長しています。その他は、下級武士たちが住んで居た所だと理解すればよろしいでしょう。

それから字地というのがあります。鹿児島の字地と称するものは、まず内之丸(うちのみり)。上竜尾町のどの辺になりますかね。催馬楽(せまがく)への登り口あたり。上之原(うへのはら)は鹿児島商業高校の下の方。岩崎は岩崎谷(いわさきや)一帯です。豎野(たての)は南風病院の裏に豎野窯がありました。城ヶ谷(しろがや)は五代友厚誕生地のある所です。冷水(ひやみず)、中福良(なかつくら)、中福良は天文館一帯です。堀之内馬場(ほりうちまば)は岩崎谷の北側になります。後迫(おごご)、これは現在の稲荷町になります。田之浦、どうして田之浦と付いたのか、まだ確証は得ていません。大門口(かどぐち)、中洲(なかつ洲)、三角門(みすみかど)。これは上之園町のどこになるのか知りません。築地(つきぢ)さっき述べたその他のところ。鶴江崎(つるさき)は祇園之洲の対岸です。町口(まちぐち)は、上町の入口があった所。堂之前(どうのまえ)は福昌寺の門前です。それから都曇答臘(ふとんど)。こんな難しい字を書いています。こんな難しい字を書いたのは坊さんたちでなければ書けません。16世紀頃の坊主たちが考えついた文字だと思えます。同様に「ふんど」と読む地名が坊津にあります。大乘院と一乗院は結びつきがありますから坊さんたちが考えついた文字だと思えます。いわゆる擬音です。川の水の音の擬音と考えてもよいし、石切りの擬音と考えてもよい。

坂元村では、催馬楽(せまがく)。古くから催馬楽城という文字を当てているようですが、平安時代の雅楽の催馬楽と結びつけるのは、ちょっと無理なような気がします。坂元の人たちは単人舞発祥之地ということを宣伝しておりますが、宣伝している「おんまは」は、江戸時代は琉球寺があった所です。琉球の

人たちを葬る寺があった所ですから、それ以前のことである単人舞の源流を求めるのは無理だと思います。

その次、実方(じつた)は平安時代の中頃に、宮中で藤原行成と歌の批評で争い、法皇の機嫌を損じて「歌枕見て参れ」と陸奥守に左遷される藤原実方という歌人がいるのですが、その実方の名前をとったものです。その理由はその下に雀ヶ宮とあります。以前に「動物に由来する地名」で雀ヶ宮を書きました。栃木県宇都宮の一つ手前に「雀の宮」という駅があります。何だろうと関心をもって調べてみました。左遷された藤原実方の奥方が、夫の後を追って陸奥国に向かう途中、そこで亡くなるのです。既に実方は死んでしまっていたのですが、奥方はそれを知らなかったのです。奥方が亡くなった所に雀が沢山現われたそうです。実方の亡霊だろうということで藤原実方夫妻を祀った神社が出来ます。それを雀の宮と名付けたわけですね。鹿児島の場合、雀ヶ宮と実方は隣り合わせの地です。雀ヶ宮も実方も、恐らく島津義久・家久などが歌に熱心で細川幽斎から古今伝授を受ける程ですから、この人たちが付けた地名だと思えます。三船もそうでしょうし、吉野・滝之上なども古歌から採った地名と考えられます。殿様が歌を尊とぶ意味からそのような地名を付けた、ということを考えなければ、このような地名があつたに付く動機がないわけです。民衆の間から生まれて来た地名じゃなさそうです。

次は川添(かわぞえ)。川添は現在もあります。国料(くにりょう)、これは以前に話したことがあります。反田土石(たんどいし)の石切場あたりが国の領地として重要な財源すなわち薩摩国司の直轄領だったので国料という地名が付いたのだらうと思えます。その次の勝浦山は、山に生えている葛が原形です。

吉野の菖蒲谷(しやぶや)。菖蒲が生えていたのでしょう。帯迫(おびご)というのは、迫が带状に取り巻い

ております。雀ヶ宮はさっき説明しました。中ノ町(なかつまち)、七社(ななしろ)、上ノ原(かみのはら)。塩ヶ水(しほみず)は塩の産地です。平松(ひらまつ)、花倉(はなくら)、磯、実方。実方は吉野村と坂元村に分かれるようです。

ここに塩ヶ水というのが出て来ます。見当が付くと思いますが、竜ヶ水(りゅうがみず)がこれから派生したと思われまます。竜ヶ水が塩ヶ水であったとういうことですね。古くは塩ヶ水という地名。竜ヶ水を名乗るのは、竜水小学校というのが明治の初めにあります。これは『鹿児島県地誌』よりも古く、小学校の名称に「竜」の字を採ったと思えます。何故「竜」というのを考えついたかという、心岳寺が「滝山」という山号を持っていますから、そのサンズイをとって「竜ヶ水」という地名を考え出したと思われまます。古くは塩を作っていた所で、此処には塩屋という苗字の人が多いようです。

#### 稲荷市

(4) 番目。『三国名勝図会』に「稲荷市」というのが出て来ます。これは以前話したことがあるかも知れませんが。したような、しないようなことなんです。『三国名勝図会』に次のような文句があります「毎年十一月、当社祭礼より連旬、近地通衢、数町に亘り浮舖(うきせ)を出す、是を稲荷市といふ」稲荷神社の前から現在の清水中学校の前あたりまで稲荷市が出ていたという。「都鄙の男女、日に集り、求るに有らざるものなし、他国に於て此市と豊後国府内の浜之市と肥後国天草の本戸之市とを以て、九州の三の大市と称するとかや、かくて此稲荷市、最も大なりとぞ」

稲荷市と大分府内の市と天草本渡の市が九州三大市であったという記事があるわけです。今は稲荷市はありませんが、こういわれるのはいつ頃かということですね。これは事実かということを考えてみると、稲荷神社の隣にある現在の清水中学校。あそこは大乗院があった所ですが、その前は清水城の館が

あった所です。それで清水城に住んでいた時代というのは、配りました島津氏の系図の真ん中の右側のところにメモしておきました。東福寺城に住むのが1341年から、5代貞久以降です。清水城が1387年7代元久以降になります。内城、大竜小学校の所ですが、此処に移るのが1550年、貴久以降。鶴丸城が1602年、家久以降になります。

問題は清水城の門前で稲荷市があったという時代ということです。鹿児島、府内、天草、これらが栄える背景というのは、倭寇よりも少しくだって南蛮貿易でなければならないということです。内城に移るのが1550年ですから、それ以前でなければならないわけです。16世紀の前半もしくは中頃でなければ稲荷市が九州の三大市といわれるように栄えたことは考えられないのじゃないか。種子島に鉄砲が伝わって来るのが1543年、1549年にはザビエルがやって来ますから、時期をしぼればその頃です。その頃に稲荷市が栄えたことが考えられる。天草については調べておりませんが、豊後府内の市というのはそれと同じ頃に南蛮貿易で栄えたのだらうと思います。

これは大分の沖になるのですか、瓜生島という慶長の大地震で沈んだ島があるのですが、その沈んだ島に島津の館があったのです。島津の14代勝久はどうもそこに逃れて死んでいるようです。そして、15代貴久に替って行くわけです。貴久の子孫が現在の島津氏につながっています。勝久の子孫というのが本来の直系なんだろうが、その子孫は遠慮して島津を名乗っていません。藤野という姓と亀山という姓を名乗っています。藤野どん、亀山どんといえば鹿児島では名門になるのでしょうか、黙っておられるようです。また、詮索する人もいません。

それはとも角としても、瓜生島にも一つの貿易拠点があったということです。フランシスコ＝ザビエルも瓜生島に泊ったような記録があるというのを、何かで読んだことがあります。豊後府内の浜之市は

その近くなんでしょう。16世紀の中頃の南蛮貿易を背景に稲荷市が栄えたのであろうと推定出来ます。総州家と奥州家

清水山本立寺。本立而道生（本立ちて道生ず）という論語の句から、本立寺と名付けられます。此処に島津初代から5代までの墓があります。プリントの方に入りましょう。右側に系図が書いてあるプリントです。6代目から総州家と奥州家とに分かれます。6代師久が上総介を称したので総州家とよばれます。氏久が陸奥守を称したので奥州家にとよばれます。貞久の長男は川内の向田で落馬して若死します。その跡に称名寺を建て菩提を弔ったのです。次男はどうなったのか知りませんが、三男の師久、四男の氏久から二つの系統に分かれます。

兄の系統：総州家が野田の木牟礼城に、弟の方の奥州家が鹿児島の東福寺城に拠ります。5代までの墓というのは総州家が祀った野田の感応寺にあり、奥州家が祀ったものが本立寺の墓になります。両方を見比べると、野田の感応寺の方は小さいのですが貞久とか忠宗あたりは葬られたと思いますから、墓としては本物でしょう。こちらの方は墓石は大きいのですが、参り墓・祭り墓と考えざるを得ません。本立寺の場合は建てたまゝでしょうから年代は古いのですが、野田感応寺はその後何回か作り変えているようですから墓石そのものは新しく、小さい。どちらが本物かということになると、一長一短ありで、それぞれ言い分があらうかと思えます。

今日配った藤浪さんの時宗関係の名号とも関連しますが、5代までは道阿弥陀仏とか仁阿弥陀仏、義阿弥陀仏という時宗の法名が本来のもので、ところが現在は禅宗の得仏大禪定門とか道仏大禪定門などに書き替えられ、時宗の名号の説明は観光案内板から削られています。これもちょっとおかしいなと思います。さらに何と読むのか判りませんが、瑞主常照彦命というような神道にもとづく神号に皆書き

替えられています。いわゆる幕末から明治初めの廃仏毀釈の結果です。福昌寺の墓もみな、こんな神号になっていますから、仏教の法名は根こそぎ削られてしまったのです。

系図の中でも、6代以下、四角に囲ったものが福昌寺墓地に墓があるものです。点線で囲った氏久、21代吉貴は少々異なるということです。氏久の墓はもともとは志布志にあったのですが、最近福昌寺に移されました。吉貴の墓はもともとは浄光明寺にあったのです。西郷さんの墓のうしろの方ですね。浄光明寺の本堂のあった所に西郷さんは座っているわけです。浄光明寺にあった吉貴の墓を鹿児島市が追い払ったというか、島津家もだらしなかったのですけれども、あすこをつぶしてしまって竹の公園とかにしてしまいました。そのようなことで吉貴の墓も福昌寺墓地に移されています。

福昌寺墓地にあるのは斉彬・久光までです。29代忠義、30代忠重、31代は半年ほど前に亡くなりましたが、これらは常安峯の島津家墓地にあります。厳重に囲ってあって入れません。そこをのぞいて見ると、上円下方墳という明治に流行した土まんじゅうの墓がわんさと並んでいます。殿様たちの墓だけでなく5・6才で亡くなった若君・姫君の墓がずらーと並んでいます。殿様の子供たちも生存率はよくなかったことを常安峯は示しています。

系図に戻ってその真ん中辺、8代久豊。この人が総州家を滅ぼします。忠国、忠昌、忠治、これらの人たちの墓がどこにあるのか、よく判りません。忠国の墓は深固院にあったとか。久豊の墓も福昌寺の山とか福昌寺の中にあっただけでしょうが、どうしたことなんだろう、残っていません。勝久以前の墓はあまり大事にされず消えてしまっています。

小山田 宮崎県の高城。あすこにあります。島津忠国の墓が。小学校の裏山に、忠国が生まれた時に植えた杉の木とかいわれています。

平田 生まれた所に葬っているのですか？  
小山田 あすこに杉とですね、檜。すぐ隣の小さな丘の上にあります。

池田 昔は穆佐と言いましたからね。  
小山田 そう、穆佐。

平田 加世田でも誰か亡くなってますね。忠国かな。島津の殿様が坊津で亡くなって、加世田に葬られた方がいますよ。久豊の墓は福昌寺の中の恵燈院にあったという記録がありますが、恵燈院も残っていません。忠国の深固院というのは、深固院の説明にあったのですが、位牌だけだったのですかね。深固院というのは、玉竜高枝の裏山の上です。現在削られつゝあるのですが、中腹に寺が見えます。その寺の一角が深固院だったと言います。15代以下は福昌寺墓地にありますが、14代以前はあちこちに散らばっているようです。5代までは五道院に祀られております。

池田 今はほとんどが福昌寺に集められているのではないですか。

平田 そんなことは聞きませんが。来ているのは氏久と吉貴だけじゃないですか。

小山田 あの方が穆佐にあった。

平田 誰？

小山田 久豊ですね。

池田 それも福昌寺に移してあるはずですよ。

小山田 福昌寺に移したという看板はあります。

平田 あゝ、そうですか。

池田 だから、ほとんど移してありますよ。

平田 福昌寺墓地によく行くのだけど、説明を書いたのは気付かないな。

小山田 福昌寺には立っていないですか。ただ移しただけ？

池田 地図があります。これにはちゃんと書いてあります。

平田 いや、ないですよ。

池田 そうですか。私はほとんどあったような気がしてたけど。

小山田 久豊の墓というのは穆佐にありました。一ヵ月ぐらい前に見ました。福昌寺に移したと看板に書いてあった。

平田 福昌寺墓地入口の看板にあるのを確かめてこの四角を囲ったのですがね。そのうち、も一度確認しておきます。

#### 稲荷川流域の地名

平田 稲荷川流域の地名に入ります。河川番号を打ってあります。この地図は鹿児島市の河川水路図を縮小しました。番号①が牟礼谷川(むれがやがわ)です。牟礼ヶ岡から始まります。牟礼というのは朝鮮語で「山という意味」だとする説があります。倉谷川(くらたにがわ)。クランタイというのは、クラは崖の意。クラタニ、クラガタイなど鹿児島県には沢山あります。そういう険しい所から始まる川だと思います。吉水川(よしみづがわ)。岩の間からどどん水が湧き出て来る所が水源です。良い水という意味で、吉水の名が付いたと思います。国分にも吉水という地名があります。西牟田(にしむた)は西の牟田です。⑤が花棚(はなだ)を流れる川です。⑥は川上地域を流れる川ですね。その次が馬口場川。博奕をやった所でしょう。野呂迫川(のろしづがわ)。野呂というのは国語学的な問題になるのですが、野良仕事の「ノラ」とかオノコロ・オノコロ。古事記にオノコロ島というのがありますが、そういう語尾の一つだと思います。野の迫を流れている川、それが野呂迫川でしょうね。

大石様川(おおいしさまがわ)はオイシ様の前を流れています。オイシ様には島津金吾歳久を祀ってあります。鹿児島では親の仇などを討つ時には、この大石様に参ってから仇討ちに出かけたと言います。そして、仇討ちということから忠臣蔵の大石内蔵助と結び付けてこういう表現になったのだらうと思います。

旗門坂は、ハタモン取り、ヒエモン取りとも云わ

れる死骸の肝とり由来する地名です。死刑が済んだ夜、二才(若者)たちの肝試しとしてやらせたハタモン取りに因むもの。どんな字だったかな、磔(むち)という字ですね。磔物坂。処刑場があった所でしょう。

大明ヶ丘水路。大明ヶ丘団地に伴う排水路に名付けられたのですが、元々は自然の川もあったのじゃないかと思えます。坂元川。坂元を流れる川です。鼓川は鼓のような音、撻鞞々(たぼぼ)という擬音につながって来る地名です。

アヒル川は内城の北側にあります。アヒルを放していたのだらうと思えます。大田道観が江戸城の堀に水鳥を放して敵襲をあらかじめ知ろうとしたとの故事があり、それにもとづいてアヒルを放し飼いにしたことから生じた地名だと思います。このことは「動物由来する地名」の最初に書きました。

春日水路。本来の稲荷川の下流になります。名山堀あたりまで流れていたと思われる写真が残っています。多賀山から写したもので、稲荷川が真っ直ぐ進んだ写真を見られたことがあると思えます。

#### 川が果たした歴史的役割

川の名前はそれぐらいにして、次は川が果たした歴史的役割を考えてみます。最初に説明しましたが川の流域に五つの郷があるということですね。鹿児島郡に三郷、谿山郡に二郷。川の流域に「郷」が出来るといことは、川の流域を母胎として歴史が展開されるということです。郡とか郷の境域を見ると自然地形で大体、範囲が決まっています。山に囲まれ海に囲まれたところに一つの郡があって、その中に川がいくつか流れている。その川の数に応じて郷が出来て来る。すなわち川によって「郷」が規定されるとまず言えます。それが第一の役割です。

鹿児島県のほとんどはシラス台地と山ですから、交通路の中では海上交通が一番重要な意味をもっています。そして港が発達するのは河口、すなわち河

口港になります。京泊は川内川河口、市来の湊は大里川・八房川の河口、根占の港も雄川の河口です。志布志その他もすべて河口港で栄えました。また川を帆船がどこまで遡るかによっても港の位置が決まります。川内川の場合、向田の渡唐口(とらぢ)まで遡ったので、大小路・向田に浦町が発達し、領主の御飯屋まで出来ました。そこに川内の町が栄えたのです。帆船で遡れない所は槽で漕いで行きますから槽で漕ぐ川舟がどこまで行けるかが大事な地点になります。上流にある舟津という地名のある所までは行けたと思うのです。それが入来とか市比野とか山崎、宮之城あたりになると思うのです。そこも交通の拠点となって町が栄える。交通の拠点と川は切り離すことは出来ません。交通道路としての川、それが第二の役割です。

古代の水田は山田とか迫田などから開けた、すなわち水が得易い所に小規模な水田を営んだと思うのです。下流に大規模な水田が開発されるようになるのは相当な土木技術が必要で、用水路とか井堰などを作る技術がなれば出来ませんし、初めのうちは上流で小さな井堰を設けて水を引き、田を作ったと思えます。江戸時代以降、溜池や用水路などの大規模な開発が可能になります。川の今一つの役割は、溜池や用水路を作り井堰を設ける時代の水田開発と結びついているということです。そのことに注目しなければなりません。それが第三の役割です。

もう一つは上流の役割です。昔は川を容易に渡れなかったと思うのです。江戸時代でも川内の渡し、東郷の渡しは、記録を見ると舟が一艘です。旅人がひっきりなしに来るわけではありませんし、集っただけ渡すとか、暇な時は一人でも渡したのですが、渡し場は多くはなかった。普通は上流のわりと浅い瀬がある所を渡っていたと考えます。また上流の谷川伝い・沢伝いに尾根に登る道は古代から利用されて来た道になります。上流は古代の道として

見直してよく、川伝いに古道を探すことが出来ると思えます。それが第四の役割です。

そのように一つの川を単位に整理して、じっくり眺めていけば集落の歴史もはっきりして来ると考えます。集落の歴史の手がかりになるのは、井堰を作った時の水神になるでしょうし、上流では谷川沿いに尾根を越す道があり、そこには峠の神を祀る花立とか柴立とか、そう言った地名がありますから、川に焦点をせばれば新しい郷土史が開拓出来るのじゃないかと思えます。

稲荷川の川筋で言いますと、④のアヒル川沿いに登って行くのが坂元の道になります。②の川沿いに鼓川から坂元に抜ける道があります。②の川と④の川の接点が催馬楽です。そこに日枝神社があります。その上に鹿児島商業高校があります。②と④の接点から③の川の方に向かって行く道が下田・川上街道になります。磔物坂は⑥、これを通して牟礼ヶ岡の方に抜ける道があり、そして白銀坂(しろぎんざか)に下る道が実方街道・旧大隅街道になります。

「川と古道は結び付く」というのが今日の主題であったわけです。しゃべることばかりが多くて質問の時間がなくなりましたが、何なりと質問して下さい。以上で説明を終わります。

#### (質疑応答)

#### 上町・下町の区分

池田 上町と下町の分け方として私たちが聞いたのは、お堀の所から水路が通っている。ちょうど市役所の新館と旧館の間から。

平田 そうです。

池田 名山堀の方へ。そこから右と左に分けると聞いているのですが。これで行きますと、易居町は下町に入ったりして、何かおかしいのじゃないかな、という気もするのですけど。

平田 これは何で見たかな。明治12年制定というのは『鹿児島県地誌』に記載されているものです。



池田 明治になってからだから、そうなんです  
平田 これは行政がやった区分でしょうから。

納 易居町は、天保年間：1830年代は下町に入っていた、と思っているのですが。易居町に居た人が「おいげーは上町じゃっどね」と言っていました。また宝暦年間、下町は11ヶ町でしたが、天保年間には15町に増えています。そして、その次が明治12年ですか。それで明治12年に山下町が出ているのですが天保図を見ると山下町は出ていないのです。

平田 それはないですね。お城ですから。

納 山下町は明治になってから出来たとじゃんなさあ。

平田 上町・下町の区分は時代によって若干変わるということですね。

納 あれは確か明治12年頃ですね、吉田書店で発行した市内地図があるのです。『鹿児島市史Ⅱ』の付録に付いています。あの中に上方限(おんりき)・下(しも)方限というのが出て来ます。そして西田町。

平田 西田町(にしだ)と横井町A(よこい)ですね。野町は横井町です。

納 私が小さい時は、上町と言えば、池之上町とか鼓川とか、あの辺からずーっと海岸までを上町と考えとったのですよ。

平田 そうですよ。

納 これを見ていたら違うなと思うてですね。上町というのは昔のいわゆる浦町ですか。

平田 それを町と言っています。私は清水町に住んでいますが、清水町の人々は上町だと思込んでいます。天文館あたりが下町で、上町は城の北。そういう分け方の感覚です。

納 今まで私は昔でいう上方限が上町だと思とったのですよ。上方限の中に上町がある、と。

平田 明治12年に行政的に決めても、人々は慣習的な分け方をしているわけで、上町・下町の区分は一筋縄ではいかないようです。

向江町

池田 浜町・向江町というのは？

納 鹿児島駅よりも浜側ですよ。

池田 だから、浜。

納 浜町とか向江町という。

池田 向江町を聞いているのですけど。

平田 どこになるだろう。

池田 加治木に向江町とありますが。

平田 川の向うにあるものね。

池田 何かお迎えに来たとか、そういう由来から来ているのですか。

平田 川の向うにあるから。

池田 あゝ、そういう意味になるのですか。

平田 鹿児島の場合も川の向うという意味だと思います。さっきも言いましたが、元の稲荷川が鹿児島駅の方にまで流れていましたから、その川の向うにあったということです。浜町と向江町というのは並んでいたのじゃないかな。向江町は滑川寄り。そこらあたりは古い地図で見られたらと思います。かごしま文庫の『かごしまの町』に鹿児島の古い地図が多く引用されています。

池田 豊増さん？(豊増哲雄『かごしまの町』)和名抄の郷名

青柳 和名抄記載の郷名ですけど、先程の説明によると、流域ごとに郷が分かれるということ。都万というのは同じ字ではないけど、建久図田帳の伊集院の中に「十万」というのがあります。それが川の上流にあるものすると、その地域は伊敷に該当します。その次が精木川：稲荷川の順になってしまうような気がするのです。

平田 一之宮とか郡元とか、そして荒田八幡などがあるからね。一番遺物が出ているのはあの辺だしね。考古学的な遺物からいうと。

青柳 それは田上川流域です。

平田 そうです。

池田 伊爾色神社というのも非常に古い神社です  
青柳 伊敷は甲突川の流域。もう一つは稲荷川の流域という形で理解してしまえばいいのじゃないですか。

平田 稲荷川流域、甲突川流域、田上川流域の三つを考えてるわけです。

青柳 だから三郷あるんですよ。

平田 その三郷を考えてるわけです。

青柳 その通りに理解する以外にないのでは。

平田 そうです。僕もそう言ってるわけ。

青柳 だけど、宇宿がどうだこうだと云われると迷ってしまう。

平田 宇宿が田上川流域になってしまうのです。

青柳 宇宿はもう郷名とは関係がないのではないですか。宇宿という郷名があろう、と。宇宿が何か  
在次と関係があると。

平田 そう読めるかな、ということ。

青柳 そう言い出すと迷ってしまっ。

平田 田上川流域がそれに結び付く、ということ  
ことです。

青柳 田上川流域に結びつく郷名はどれですか。

平田 在次郷。宇宿が一番近い(笑い)。

青柳 伊敷に結びつくと思えば、都万郷か安薩郷か、どっちかだ。

平田 そういうこと。都万、在次、安薩。精木川・甲突川・田上川のどれかに該当するだろう、と。それで墨書土器とか木簡など、そういうものが出来たら解決するだろう、と言ってるわけです。

青柳 三つの郷が名がどれに結びつくかは、今の段階では説明できない。

平田 そういうことです。

青柳 とも角、三つの川に結びついています。そのことだけは言える・

平田 はい、共通してますね。じゃー、これで終りにします。どうも有難うございました。

# 箱荷川流域の地名

平成8年12月1日

## (1) 和名抄記載の郷名

1. 慶島郡 — 都石・在次・安薩

谷山郡 — 谷山・久佐

## 2. 対応する河川の流域

楢木川(箱荷川)・神月川(甲突川)・田上川(新川)

永田川・和田川

## 3. 惣廟 — 荒田八中番・一条神社(一之宮神社)・

諏訪神社(南方神社)・伊佐智佐神社

## (2) 慶見島の区域 — 明治12年11月制定

1. 下町 — 山下町(県庁所在地)・易居町・生産町

六日町・築町・汐見町・泉町・金生町・中町

吳服町・大黒町・堀江町・住吉町・船津町

新町・松原通町

2. 上町 — 小川町・和泉屋町・恵美須町

車町・染町・柳町・浜町・向江町

3. その他 — 新照院通町・葉師馬場町・鷹師

馬場町・西田町・平馬場町・西千石町・東千石町

加治屋町・山口馬場町・樋口通町・新屋敷通町

下荒田町・高腰町・上園通町

冷水通町・長田町・下龍尾町・上龍尾町

池上町・鼓川町・箱荷馬場町・清水馬場町

春日小路町

## (3) 字地 (慶見島果地誌記載)

1. 慶見島 — 内丸(上龍尾町)・上原(下龍尾町)

岩崎(山下町)・堅野(下龍尾町)・城ヶ谷(長田町)・冷水(冷水町)・中福良(東千石町)・堀ノ内(長田町)・後迫(箱荷町)・田ノ浦(田ノ浦町)・大門口(松原町)・中洲(上園町)・三角門(上園町)・築地(向江町・浜町)・鶴江崎(春日町)・町口(春日町)・堂前(池上町)・都曇客臘(鼓川町)

## 2. 坂元村

催馬梁・上原・実方・川添・園料・勝浦山

## 3. 吉野村

葛蒲谷・帯迫・雀ヶ宮・中町・七社・上原

塩ヶ水・平松・花倉・磯・実方

## (4) 箱荷の市

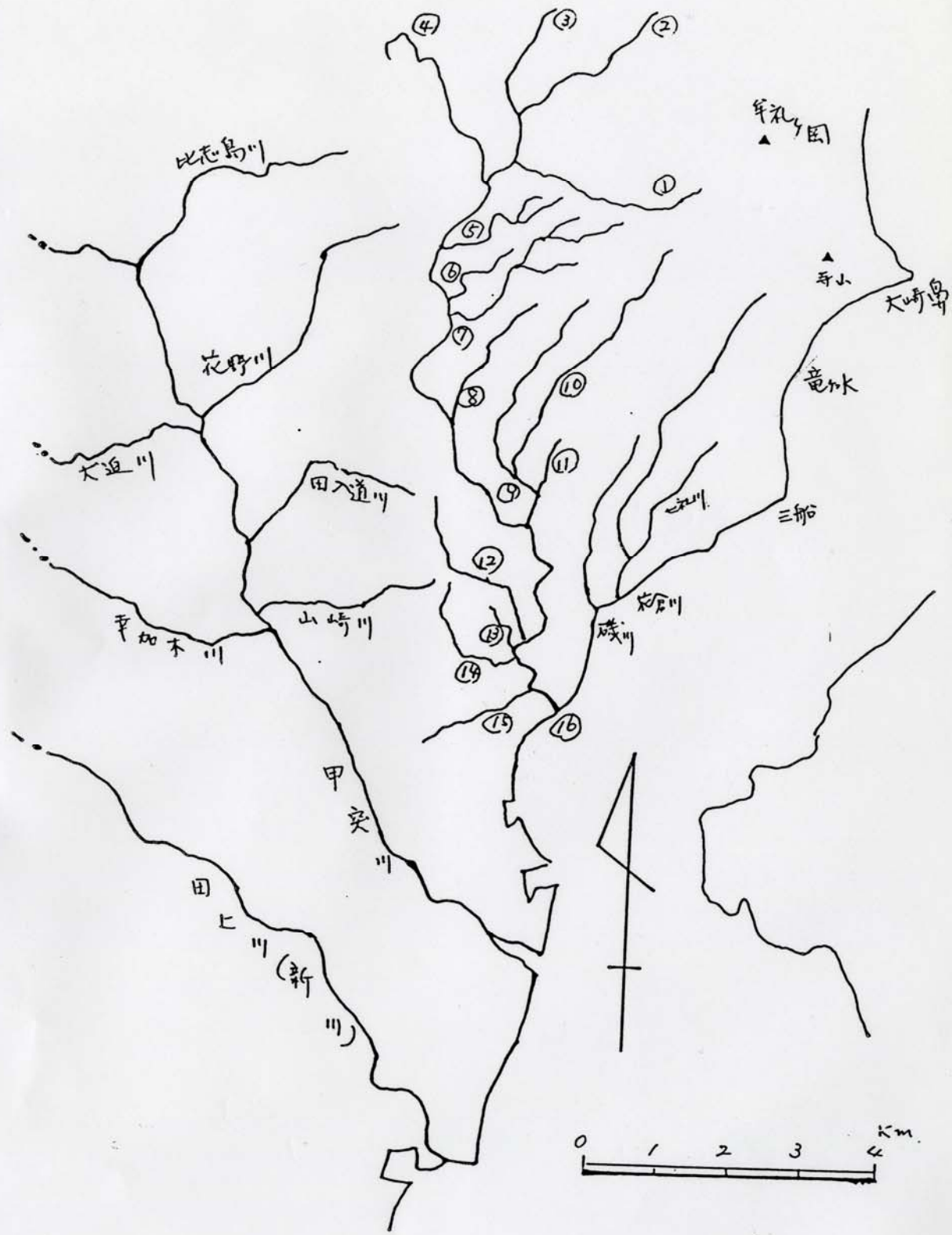
「毎年十一月、当社祭日巧連句、近地通衢数町に亘り、浮鋪に出ず。是を箱荷の市といふ。都鄙の男女、日に集り、求るに有らざるものなし。他國に於て此市と豊後國府内の浜市と、肥後國天草の本戸之市とを以て、九州三の大市と稱するとか。かくて此箱荷の市、最も大なりとぞ」

(三國名勝同会、卷之三)

## (5) 清水山本立寺(五道院)

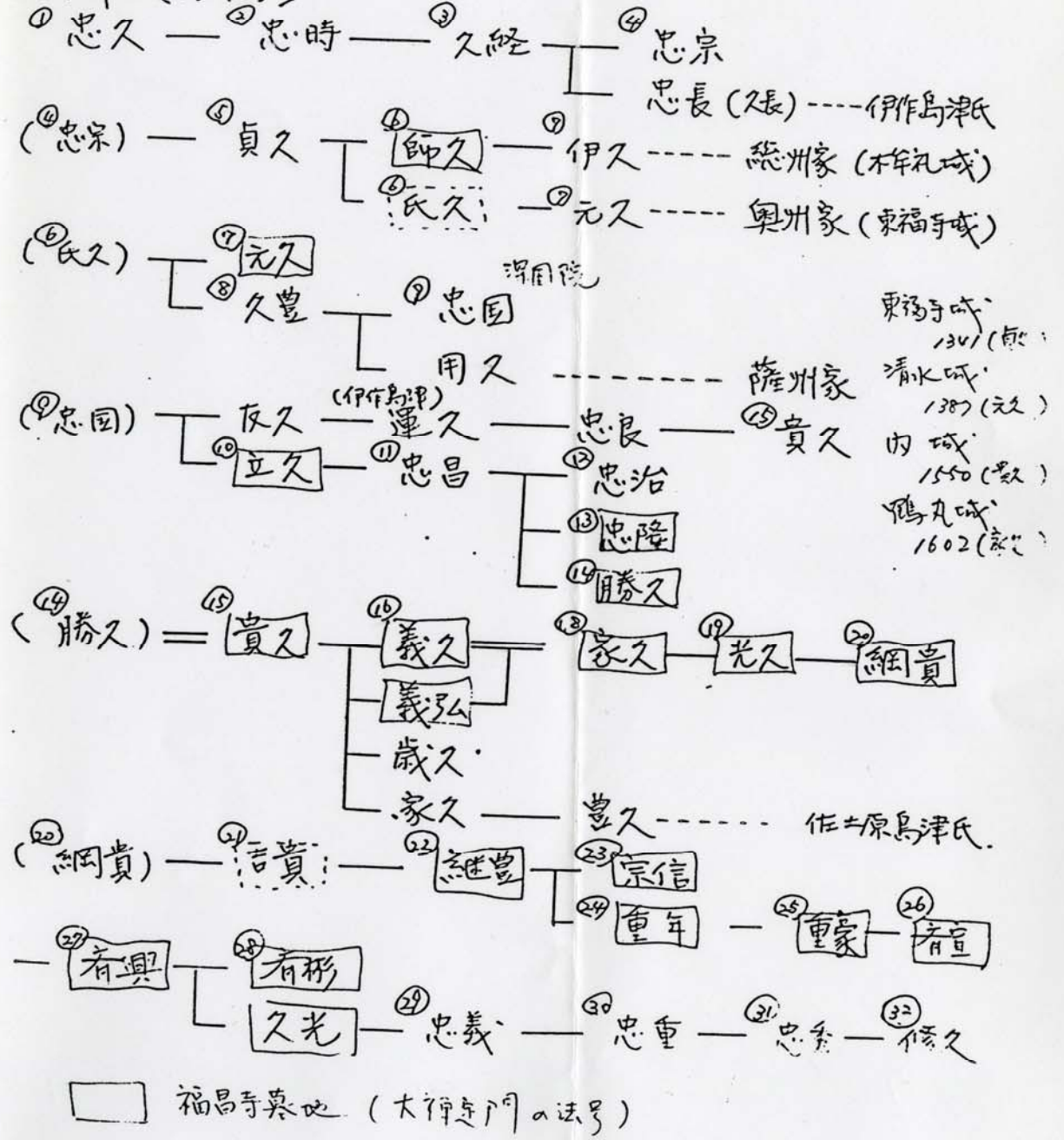
本立而道生(論語)

- |       |         |                  |
|-------|---------|------------------|
| 1. 忠久 | 得仏道阿弥陀仏 | 瑞宝常照彦命 (得仏大禪定門)  |
| 2. 忠時 | 道仏仁阿弥陀仏 | 余太刀聡心雄命 (道仏大禪定門) |
| 3. 久經 | 道忍義阿弥陀仏 | 真明飛道男命 (道忍大禪定門)  |
| 4. 忠宗 | 道義仲阿弥陀仏 | 傳錦風雅士命 (道義大禪定門)  |
| 5. 貞久 | 道鑑道阿弥陀仏 | 上寿豊福彦命 (道鑑大禪定門)  |



- ① 牟礼谷川    ② 倉谷川    ③ 吉水川    ④ 西牟田川
- ⑤ 花棚川    ⑥ 川上川    ⑦ 馬口場川    ⑧ 野呂迫川
- ⑨ 大石様川    ⑩ 旗門坂水路    ⑪ 大明社水路    ⑫ 坂元川
- ⑬ 鼓川    ⑭ アヒル川    ⑮ 春日水路    ⑯ 箱荷川河口

[島津氏系図]



東福寺城  
1301 (貞久)  
清水城  
1387 (元久)  
内城  
1550 (貴久)  
鶴丸城  
1602 (宗信)

□ 福昌寺墓地 (大徳寺門の法号)

I. 第56回例会 平成9年3月2日(日) 於教職員互助組合会館和室

(出会者) 青柳俊二・納 栄蔵・小山田 稔・木場武則・小山 更・肱岡修一郎・平田信芳・  
松浪由安・三善喜一郎・米原正晃(計10名)

II. 豊藩名勝考読会 P.194 ~ P.198

(問題となった地名および事項) 黒園と狗留孫、大河平家と西郷家の出自、被いと禊ぎ

黒園と狗留孫

平田 判りにくかったところ、問題にするようなことはありませんか。私は霧島の向う側、吉都線の沿線を歩いたことがないので何も知りませんが。

三善 196ページの下端、うしろから4行目に見える黒園を、狗留孫岳と書いたのを見たことがありますけど。

平田 それは当て字でしょうから。昔の人はどのような漢字でも当てているようです。

三善 飯野でしたかね、川内川をずーっと遡っていった所に、神武天皇の行在所の跡というのがあるのです。

平田 二千六百年記念にいろんなのを作ったのでしょうからね。

大河平家と西郷家の出自

平田 この大河平村というのは、ちょっと因縁があります。一月ほど前、不動産業をしている方が訪ねて来ました。先祖が大河平家の出だということです。西郷さんの出自は菊池の分家の西郷家と云われているのですが、そんなことは考えられないと国分高校の七十周年記念誌に書きました。それを片岡八郎さんが『横目で見えた郷土史』の中に「H教諭が云々」と私が云っていることを引用されたのです。それで私を訪ねて来たということなのです。その人は西郷さんの系図を丹然に調べておられました。

大河平家の資料を全国的に集めておられるのです。こういうことです。西郷さんのお母さんは椎原家の出ですが、祖母は大河平家の出だということです。この大河平家というのが菊池氏の子孫だ、と。そして菊葉の真中に菊花の入った家紋があるのですが(抱菊葉に菊)、これを用いることを許されていたと。西郷さんの祖母さんは大河平家から椎原家に嫁に来て、その娘が西郷家に嫁いで西郷さんが生まれることになるのです。西郷さんは小さい時から祖母さんの系統によって菊池の子孫という自覚を持っていたのじゃないか、と。西郷さんが菊池の子孫と云ったのは嘘じゃなかったのじゃないか、と。そういう話を持って来られたのです。

その時に聞いた話ですが、西南戦争の時に「大河平事件」という有名な事件があったのだそうです。私は宮崎県の郷土史も持っていないし、調べたこともないのですが、その大河平の殿様というのが飯野に相当大きな領地を持っていたらしいのです。薩軍に加わり、追われて逃げて来た。あの辺で戦ったのは辺見十郎太なんでしょうが、その命令で大河平村に火を付けたらしいのです。そのために大河平村は丸焼けになったそうです。そうしたら大河平村出身の家来たちが、なんぼ殿様でもあんまりだと怒って大河平一族をみな殺しにしたという事件が起きたそうです。その中で生き残ったのが内村氏(不動産

業)の祖母さんだというのです。大河平家は菊池の流れじゃなかろうか、と。西郷さんはそういうことから菊池の子孫だと信じていたようだ、と。西郷さんの系統を根掘り葉掘り調べる人がいるようです。

浄光明寺の墓地(南洲墓地)に目立った墓が一つあります。上の段の1列目(13列目)に西郷隆盛を中心にして主だった薩軍幹部の墓が並んでいますが、上段の2列目(14列目)の一番北、南洲神社寄りに大河平武賢という人の墓があります。その墓が御影石で出来ているのです。あすこに755基、墓があるのですが、花崗岩:御影石で墓を作っているのは桐野利秋の墓と大河平武賢の墓だけなのです。それで以前から目を付けていたのです。この人は特異な存在だ、と。

大河平武賢は、そう云ったことで、西郷さんと縁続きの人物だったということは確かです。そして大河平村の殿様ということで、別格の花崗岩の墓石を作ったとも云えます。桐野利秋の墓は大阪に桐野利秋のファンが居り、その金持が御影石で墓を作ってくれたのです。

西郷さんの家紋ですが、真ん中が菊の花で回りは菊葉、「抱菊葉に菊」という紋。これは明治天皇からもらったと云われています。明治になってからは菊の御紋ということで遠慮して、真ん中の菊の花をとるようになった、と。大河平武賢の墓をみると、真ん中に菊の花が付いています。その家紋からも菊池の流れではなかろうかと云われているのですが疑問点もあるのだそうです。というのは、菊池氏の紋は「違い鷹羽」で、そんな紋は使ったことはないらしいのです。

それはとも角としても大河平家と西郷家はつながりがあることは事実です。大河平事件とかその系譜を調べておられたので、文章化しなさいとすすめておきました。(『敬天愛人』第15号、内村八紘「西郷の祖母、庸の喜びと悲しみ——大河平家の系図

と西郷家のルーツを探す」としてまとめられた)。  
祓いと禊ぎ

納 194ページの下の段、右から3行目のところに「禊アリシ処、故ニ祓川ニ名付ク」。この祓川、昔はナガヤンメ(長思い)は憂世の衆からと云って、同じ長屋の中で生活しとった人が死にそうな病気をしたとか難産をした時に、その長屋の人たちが皆、川に行って禊ぎをした、と。そういうことが書いてあったんですが、鹿児島県内である人のために神様に祈るために禊ぎをしというような場所を、ご存知ないですか。

平田 鹿屋に祓川がありますね。

納 高隈の下ですね。鹿児島県の辺にもそんな所がありはせんかと思うたりですね。さっきの話は江戸じゃったかな。

平田 各地にあるのじゃないですか。川での禊ぎは。

納 江戸では隅田川に何か特定の場所があったらしいですね。そういう禊ぎをする所が。安産祈願とか、病気がよくなるようにというために。

平田 それはあるでしょうね。ヒンズー教徒は今でもガンジス川に漬かっていますから。インドから仏教が入って来るわけですから、水垢離とか、そう云ったやり方は日本各地に残っていると思います。例えば祓戸も祓いをする場所でしょうね。

青柳 「みそぎ」という風習はどこから来たのかご存知ないですか。そして何かそういう関係のことも。みそぎがどこから来たのか、南から来たのか、北から来たのか。そういう話に興味があるのですが、そういうことを取りあげた本はないですね。

平田 南の方は、しょっちゅう浴びなきゃいかなでしょうし、北の方でも氷を割って漬かりますからね。

米原 風呂のそもそもの起源などにしても、そういうところから来ているのでしょね、かなり世

界的にも広い範囲で眺めなければならない問題だと思います。

青柳 先生が云われたように、やっぱり、インドですね。ガンジス川とか。大野 晋という国語学者がいるんですね。その人は日本語は南インドから来たと云われるから。

平田 あゝ、ドラヴィダ語説。

青柳 みそぎとか、そういう風習も密接に関係するのかなと思っているんですけど。

平田 そういのは世界風俗地理大系とかで写真をみながら、そういうのを見かけた所をドット:点で落として範囲をしぼるとい文化人類学的方法しかないでしょうね。そういうことをやるのが得意なのはアメリカだろうけれども。今はインターネットの時代だからパソコンで問い合わせたら世界の情報は集まるかもね。

米原 祓う方法によれば、水で祓う、それから砂で祓う。川の砂を取って来て祓うのは開聞や指宿の方でみられます。それから柴で祓う。柴叩きというのがあります。そして御幣というの、そう云ったものの発展形態なのですけどもね。

納 砂といえば、今はやりませんけれども戦前は正月になれば必ずシラスを持って来て、わがえの庭に撒くものでした。

米原 そう、そう。

平田 シラスと云ったら、鹿大教養部の敷地で古墳時代の遺跡を掘った時に、住居址の中にシラスがきれいに敷いてありました。シラスをとって来て敷くのは乾燥させる意味もあったのでしょね。

納 そう云えば、昔は馬小屋の周辺にようシラスを敷きよったです。やっぱり乾燥が目的だったのでしょね。

平田 生活環境をよくする知恵でしょうね。

米原 祓う場所、禊ぎをする場所というのは大体決まっていますよね。どこの集落も一番清潔な所。

昔は神役の人たちが禊ぐ場所と集落全体が禊ぐ場所がありましたから。それは集落全体とする習俗ということかも知れんですけど。例えば指宿市の西方とか東方は、門(か)全体で葬式をします。集落の葬式としてですね。そういう所というのは、やっぱり集団で行動をとりますね。

納 私が見た本では大勢でするのがありました。病気をした人を見舞うために禊ぎをした、と。その前をば屋形船に芸者衆が乗って、どんちゃん騒ぎをするというようなことが書いてありました。

三善 祓川というのは串木野の五反田川の支流にもあります。現在、冠嶽に中国風の庭園が造られましたが、あの横を流れている川が祓川です。先年、災害があった後に、コンクリートで三面張りにしてあったのですが、具合が悪いということで、コンクリートにしたのを全部壊して石積みで川の流れを自然のまゝにしようという工事が始まっています。

先程、禊ぎの場所はどこかという話がありました。中国の青島の近くに千童鎮という所があります。そこは徐福が三千人の童男童女を集めて訓練して、

この川で禊ぎをやった、と云われます。800ha.という広い場所です。伊川(?)という川の近くで、広い所です。中国の官庁がすごい金をつぎ込んで徐福の遺跡を顕彰しようとしております。今度の4月31日に千童鎮の徐福研究会の人たちが、中国徐福会長をはじめとして約50名ぐらい、訪日団が佐賀・和歌山・奈良・大阪・東京に来ることになっております。

一昨年、私が行った時に、千童鎮という所が三千人の童男童女が禊ぎをして航海の訓練を場所だということでした。その時に、都城市五十市の産婦人科の院長先生が行っておられて、祝詞の中に椋原のなんとかというのがありますね。そのことを話しておられました。徐福が来た歴史と禊ぎとを結び付けての話でした。徐福は神仙思想を持って来たのじゃ

ないか、と。そして憶原にも来たんだという話をしておられました。

納 ことばから云ったら「禊ぎ」というのは、身を削ぐ？水を注ぐ？という。どちらかが先で変化したのですね。水を注ぐということは手を洗うことも水を注ぐですから、神社に行って水を柄杓で手にかけて口を漱ぐ。あれも一種の禊ぎ。禊ぎの変形じゃないでしょうか。

米原 そうですね。

平田 一種の呪術的形態でしょうね。

納 福岡県の宗像神社ですか、普通禊ぎは水をかぶるのですが、あすこの禊ぎというのは汐水。海の中に漬かるのが禊ぎらしいのですね。大国主命の因幡の白兔が汐水に漬かれと云われ、後で水をかぶった、と云います。両方とも兼ねている。汐水と真水ですが、両方とも禊ぎの形式になるのではないかと思ったことがあります。

米原 禊ぐのは必ずしも川の水とか池の水でなくてもいいわけですか。

納 全部、そうです。

米原 宝島あたりの神役は、海岸に行って禊ぎをしますからね。

脇岡 お寺の手水鉢ですね。手水鉢のことを嗽咳(わが)とも云います。川辺に光徳寺という寺がありますが、その寺の手水鉢に「嗽咳」という字が書いてあります。

平田 どんな字を書くのですか。

脇岡 口をがらがらとやるから「嗽」、うがいですかね。あんな字を書いてあります。お寺の方では口中をきれいに清めるという意味で「嗽咳」と云いはしませんか。うがいのことを。

平田 うがいを嗽咳ですか。

脇岡 何かそんな字。お寺の辺では大きな石に彫ってあったような気がします。手水鉢とは書いてない。

納 そう云えばどこかで見たような気がする。

平田 あゝそうですか。前半はこれで終わらしよう。後半はバックナンバーの配布に当てます。